

W8
25

遺教傳話

昭和9年9月

本誌發行所
展寄贈

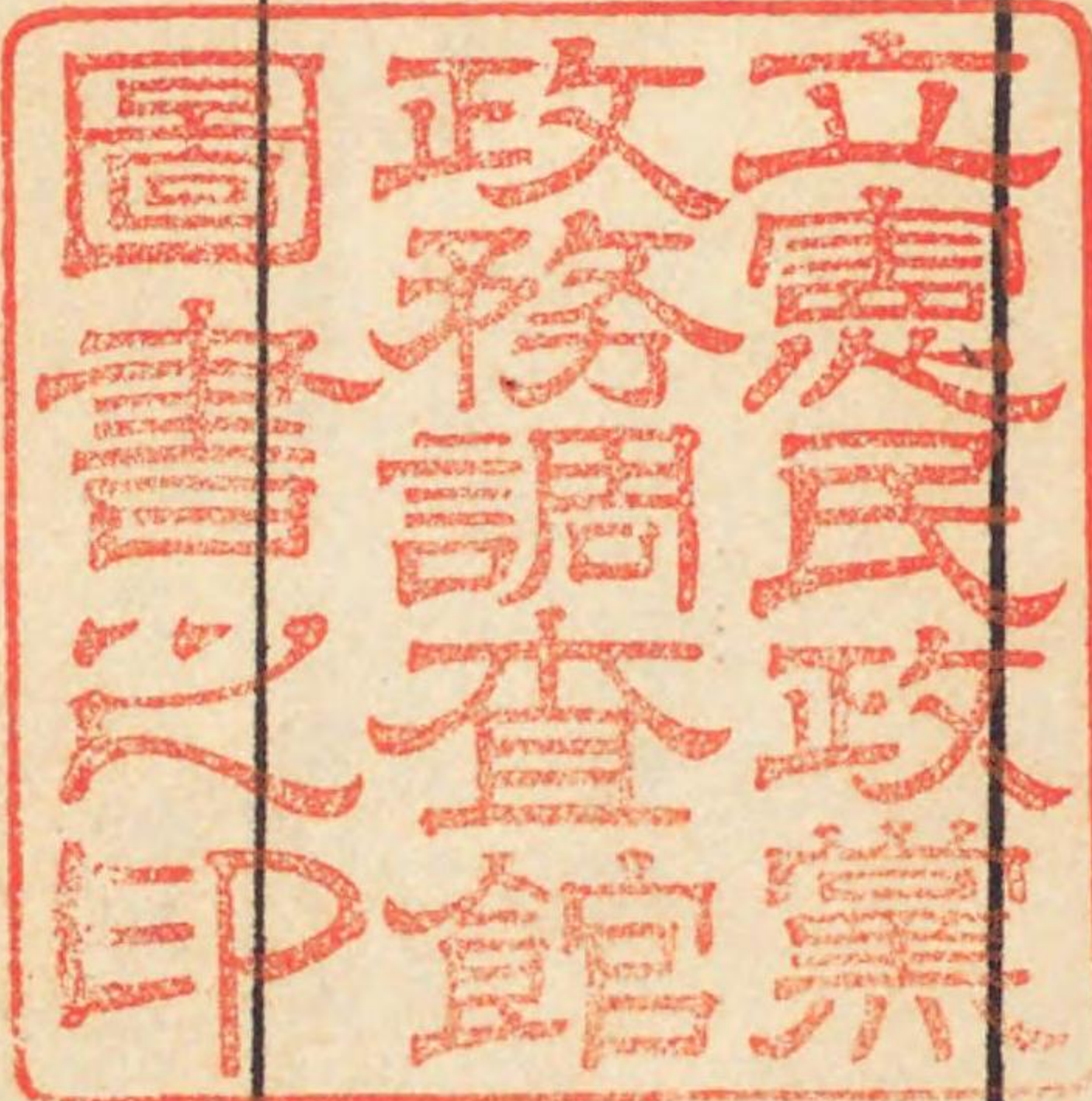
東

京

丙午出版社發行

遺教誨話

高島米峰著



W8
25

昭9

A

916



45.6.10

830580

東京

内子山房

高島米

新編 遺教經

はしがき

此書成立の因縁は、此書の姉妹著たる『四十二章經講話』の「はしがき」に盡きて居るのであるから、今そのまゝこれを左に轉載する。

明治三十二年の頃、今の東洋大學の前身なる哲學館から、『佛教普通科講義録』といふを發行するとなり、僕には、『四十二章經』と『遺教經』とが振り當てられた。

僕は、その時たゞ『四十二章經』が、支那に於ける最初の翻譯であるといふことと、『遺教經』が、釋尊最後の説法であるといふことと、に興味を感じて、引受けたのであつた。

何がさて、今から廿一年も前のことである。まだ學校出たばかりの青二才、文字通りの淺學寡聞で、たゞ僅に道霈の『佛祖三經指南』一冊だけを、唯一の師友として書いて見たのであるが、今から見ると如何にも杜撰千萬誠に以て、面目次第もない。此まゝにして置いては、氣耻かしくもあり、寢覺めも悪い。何とかして、全部を書き直し、聊かでも、佛罰を軽くしたいとは思ひながら、俗塵堆裏に没頭して居る身には、なかく以て着手の暇が得られない。

或時、このことを、學友清泉芳巖君に話ると、君はさういふことなら、出来るだけ助力しようといふ、君の學と識とは、僕の常に推服するところ、君の加勢は實に萬人力だ。話はすぐ纏まつて、仕事は意外に進捗した。

出来上つて見ると、我ながら、見違へる程の出来榮え、手前味噌の塩加減が、チト強過ぎるかも知れないが、凡そ『四十二章經』遺教經を解釋して、これほど平易に、これほど明快に、これほど親切なものが世にあらうか。

といふのも、畢竟清泉君が、耕耘鋤耨の賜であつて、實は清泉君の著として、發表してもよいのであるが、種を蒔いたのが僕だといふので、著者としての榮譽は、僕が收穫することになつたのである。

若し、此書に、取るべきものがあるならば、それはすべて、清泉君の功であるが、若し取るべからざるものがあるならば、それは一切、僕に戻して欲しい。終りに臨みて、此書の讀者は、此書の姉妹著たる『四十二章經講話』をも愛讀し給はむことを、切に冀ふところである。

廣長舌莊に於て

大正十年涅槃會の當日

高島米峰識す

目次

解題

一、本經の價值——二、經題の略稱——三、經題の十字——四、本經の内容——五、本經の翻譯——六、本經の流布——七、本經の結構

第一段序分

釋尊の自覺と覺他の第一歩——鹿野苑の五比丘——四諦の法——八正道——入涅槃

第二段世間法要

一 邪業を對治する法要

(一) 根本清淨戒

戒は佛陀の生命——梵網經の文——戒法の功德

(二) 方便遠離戒

不善の行爲を遠離せよ——清淨生活の條件——貪欲の比丘大魚と成る——嚴肅なる禁欲主義——和光同塵の方便行——雲棲大師の誠

(三) 戒能く定慧を生ずることを明す

目次

一

四三

正順解脫の四字——補註と毘尼母の文——戒徳發嘆——持戒の根本義——形式佛法——牛を眞似する驢馬

(四) 戒能く利益あることを明す.....四九

一章の結辭——五勸の意義——輕戒重戒の疑義——一念の云——クリブランドの逸話

二 諸苦を對治する法要

(一) 根心放逸の苦を對治す

[上] 根放逸の苦を對治す.....五五

三個の喩——五根の解——五欲の解——惡馬の八態

[下] 心放逸の苦を對治す.....六五

五根の主宰——四個の喩——蜜を取る者——狂象と猿猴——調象の術と調心の術——

金言金句

(二) 多求の苦を對治す.....七四

多食を戒む——藥を服するが如くせよ——蜜蜂の如くせよ——牛を役するが如くせよ

——食時五觀の偈——警願の偈——道元禪師一法窮盡の説——百丈禪師一日食はす

(三) 懈怠睡眠の苦を對治す.....八一

勇猛精進の勸戒——睡眠は眼の食——三種の睡眠——孔子宰予を叱す——阿那律尊者

——無常の火——道士と天人——慚恥の服——三人の醉漢——箴言

三 煩惱を對治する法要

(一) 瞋恚の煩惱を對治す.....九三

瞋恚の害と忍辱の徳——羅雲尊者——戰象の喩——三種の忍法——藕益大師の釋——

高潔の餘弊——忍の極致——永嘉大師の語——大賢ソークラテス——好名聞——功徳

を劫むる賊——忍の徳極まれり——皆喜禪師

(二) 憍慢の煩惱を對治す.....一〇〇

自ら頭を摩てよ——禮記と易經の文——高慢梵士——高遠の理想

(三) 諂曲の煩惱を對治す.....一一七

端心質直——百法問答抄の文——直心是道場——前田侯と老臣——七覺支八正道

第三段 出世間法要

一 無求の功徳.....一二三

絶對無欲——シヨツベンハウエルの語——疥癬を搔くが如し——少欲と五種の功徳——

服部支廣の達觀——越後の良寛——少欲にして得道

二 知足の功徳.....一三四

交股法——少欲と知足の別——諸苦の因る所——富樂安穩處——絶妙の警句——富んで而も貧——貧しくして而も富む——歴山王とダイオセオス——石天基の知言——先賢の箴言

三 遠離の功德……………一四二

惑乱苦惱の本——坐禪儀の文——愚人の三層樓——修養と静慮——智門般若體の一則——無爲の尊貴

四 精進の功德……………一五〇

言外の餘韻——不忘精進——鳥の翹足——少水穿石——明證法師の發憤——雨森芳洲の美譚

五 不忘念の功德……………一五六

文の四小節——教師と生徒——常住正念——起信論の文——念力の鏡——宗祇法師の逸話

六 禪定の功德……………一六二

散乱心の静止——五百金の智慧の寶——對症的施設——水と堤塘——四禪八定——智慧と禪定

七 智慧の功德……………一七一

智は真心の體——心理學と佛教哲學——四個の巧喻——蝙蝠僧——世智辯聰——外道の失敗——聞思修の三慧——明見の人

八 畢竟功德……………一八二

畢竟功德の意義——文覺と西行——一經の正宗分

第四段 勸修證成

一 究竟利益を顯示す……………一八七

懇切の勸獎——純一無雜——掬兒の長四郎

二 無爲の徒を誡む……………一九〇

微細親切——二人の學問僧——蓮如上人の名言

第五段 決定證成

一 懷疑の者を誡む……………一九五

現前の比丘を戒め又後世を教ふ——大悲巴む能はざる至情

二 分別決定を顯示す……………一九七

一座の上首——大衆の淨信——因と縁——江邊の説法——先づ信じよ

第六段 斷疑證成

- 一 未辨の者を誠む……………二〇三
 - 三者の修證優劣 — 阿羅陀尊者 — 悟道は電光石火 — 子供の說法 — 追福の眞義
- 二 法性常住の理を示す……………二一〇
 - 深切の上の深切 — 二利圓滿の法 — 法身不滅 — 楠公千古不死 — 法華經の文
- 三 重ねて有爲無常の相を説く……………二一六
 - 法身と肉身 — 八大人覺經の文 — 佛教の目的 — 厭離すべき世間 — 聚沫の山 — 四句の偈

第七段 遺教付屬……………二二三

最後於誨中の最後教誨 — 維摩經の文 — 法華經の文 — 中道の相 — 無我の姿 — 大恩教主大涅槃に入る — 佛陀の血淚

遺教經講話

高島米峰 著

解題

一、本經の價值 (本經を誦持する者の心得)

昔、^{そごのをりやう}梅尾明慧上人が自ら此の遺教經を書寫されて、其の奥に、孝子傳の張敷の故事を附記し、以て學徒を策勵された話は有名であるが、今本講話に於ては開卷第一先づ其の孝子の美譚を假り來つて茲に掲げ、以て此の經を繙く者の心得とし、之れを誦持する上の警めとしたい。

張敷なる者、十歳の時に及んで、始めて自分には母の無いことに氣づき、之れを怪んで父に問うた。そして母は自分のまだをうな嬰兒時に夙く亡くなられて、最早此の世に在いまさぬと知り、非常に嘆き悲んだ。如何に悲み哭くとも、幽冥界を異にする身の

力及ばず、せめては何か母の形見の物はなきかと、父にせがみ求めて、古ぼけた一本の扇を貰つた。扇面には美しい繪が書いてあつたが、母は此の扇を喜んで、朝夕手にせられたものだと思はれ、更にまた新たなる悲涙に咽ぶのであつた。その後には行住坐臥、寸時も肌身放さずして、其の扇を大切に護持し、時折出して見ては亡き母を慕うて泣いて居たといふ話である。恩愛深き慈母を思慕するの至情、人の子として固に斯くもあるべきである。

今、此の遺教經、抑も如何なる聖典か。三界の教主、大聖釋迦牟尼世尊が、無縁の大慈悲を以て、一切衆生の爲めに、五十餘年の化導救済を終り、將に入滅せられんとするに當つて、現前及び後世の諸佛子の爲めに、懇切訓示せられた遺言である。五十年横説豎説せられた教理の實行を催促せられた最後の教誡である。苟も佛心を以て心とすべき佛子たる者、當に佛の慈悲心を體し、孝順心を以て回向して、此の御親の最も尊き遺言を奉行し、一意之れを失せざらんと力むること、恰も孝子が、父母の形見を護念するが如くあらねばならぬ。

明の高僧雲棲株宏禪師も、

世人臨終に言を爲し、以て子孫に示す、之れを遺囑と謂ふ。而して子孫之れを執りて、以て憑據と爲し、世々守りて而も變せざるものなり。況んや、三界の大師四生の慈父、説法五十年、最後の遺囑をや。僧たる者、當に朝に誦し、暮に習ひ、師授け徒傳へ、身を終るまで之れを奉じて、而も一日も廢忘すべからざる所なり。と言はれて居る、誠に適實な言葉である。

元來、釋尊一代の説法は、常に應病與藥的であつて、所謂病に應じて與へられた藥その數、實に八萬四千、一としてその効の顯著ならざるものはなく、機を見て説かれた教、經卷積んで五千に餘る、しかも悉く是れ迷悟の一轉機を照破する底の靈光でないものはない。

殊に愈命終の際に臨んで遺されたる此の經卷、二千三百字に過ぎず、言甚だ簡なれども、意頗る到り、句々切實を極めて、苟も遺法の徒衆たる者の、咸く鏤骨銘肝すべき金科玉條である。此の經の所説、縱令其の形に於ては、小乘比丘に對しての垂誡であるとはいへ、亦以て吾等一般人が、日常生活の指針とすべき、適切の金訓を以て充たされて居るものである。苟も、身佛緣あらん者は、僧俗に論なく、朝に誦し、暮に

念じ、時と處とを問はず、常に此の懇切の遺誡を忘れず、身に體せんことを勉めねばならぬ。

二、經題の略稱 (遺教經)

此の經を「遺教經」といふのは、實は略稱で、具さに言ふと「佛垂般涅槃略說教誡經」の十字が正しい經題である。古今の注家も一般の誦持者も、常に畧稱を唱へて來て居るが、略稱にも「遺教經」とするのと「佛遺教經」と佛の字を冠するのと二様ある。「佛祖三經指南」の著者、爲霖道需禪師などは、後者に從つて居るし、其の他諸家も多くは、佛の字を冠して居る様であるが、最初の譯者たる羅什は、單に「遺教經」と稱した者であるし、「開元釋教錄」に據つて見るも、一名「遺教經」と題して佛字はなく、馬鳴菩薩に有名な「遺教論」といふがあるが、矢張り佛字を用ひてない。

之れに就て、本邦の秀石堅といふ學者が、

今時の經本に、上に佛字を安くは、後人の加ふる所、本と正譯にあらず。巨害無しと雖も、本に從ふを優れりと爲す。

と論じて居るのは、蓋し正しい見解である。今この講話に於ても、之れを採つて、經

題の略稱には佛の字を冠せないこととし、尙ほ書名も、便宜一般人に耳慣れた略稱に從つて「遺教經講話」としたわけである。

三、經題の十字 (佛垂般涅槃略說教誡經)

「佛垂般涅槃」の字はスイの音を約めてシといひ、般の字はハンと讀ますしてハッとし、ブッシハツネハンと讀みくせがついて居る。佛はいふまでもなく、釋迦牟尼佛。垂は臨なり、般は入なりと譯され、即ち釋尊が涅槃に入らんとするに臨んで教誡を畧說された經といふ意を表したのが、此の題號の十字である。

涅槃は梵語であるが、常に譯さずして梵語のまま用ひられて居る。佛典には此の類甚だ少くないので、摩訶般若菩薩提菩薩比丘曼荼羅伽藍等みな梵語のまま、で通用されて居る。之れらは漢字では適確な譯語がない爲めに、原語を存するの已むを得ないもので、大約五種の不翻譯語があるとせられてある。

第一に多義の故に翻譯しない例へば、摩訶は大と多と勝の三義を有つて居るか、此土には適確な譯語が見出せない、已むを得ず原語を用ひるわけである。

第二には祕密の故に譯さない。今日所謂眞言祕密陀羅尼の類で、祕訣奧妙の語

は譯せない。

第三には此土に無きものは譯せず、これは當然なことで、此方に無い物の名は作れない。昔我國には茶や菊はなかつた。支那から移植されたが、日本にない物だから日本語で呼べない、キク、チャと漢字の音其まゝ、即ち支那語で呼ぶより仕方がない。日本の富士山は英譯も佛譯も出来ないし、英國の首府は倫敦などと當て字で書いても、ロンドンと英國人の言ふ通りに發音せねば通用しない。即ち固有名詞は、何處の國へ持つて往つても譯されるものでない。

第四には、譯せざるを以て利多しと爲す、即ち譯語よりは、原語のまゝの方が便利な場合が少くない。國語の中に、外來語として類別されるものはそれで、ゲートル、マント、シャツポ、バン。最近ではサボタージュなどの佛蘭西語や、ストライキ、ステーション、ネクタイ、カラーなどいふ英語の如き、今や殆ど國語として通用されるもので、之れらは譯さない方が便利である。梵語を漢譯する際にも、此の類があつたと見える。

第五には、古風を存して譯さない。これも尤もなことで、例へば、我國の古典に現

はれた「神髓」「祕」「祝詞」などの語は、假りに漢字を假りて當てゝあるが、眞の意義は種々の注解や義釋を用ひねば現はされない。即ち古風のまゝの「つと」「はらひ」などの語を用ひるより仕方がない。

今この涅槃の語は五種不翻の中では、多義の故に譯せざる部類に屬するので、之れには不識の義、無障礙の義、不去不來の義、不生不滅の義など、種々の義があると譯されてあるが、古來最も多く用ひられて來て居るのは、滅度の義と、圓寂の義とである。茲では滅度の義に従ふのが便宜であると思ふ。滅度といふのは、生死の大患永く滅して、四流を超度超えわたるするの意である。四流といふのは、所謂煩惱生死の流れに漂没して、覺りの彼岸に達し能はざるもので、一に見流。二に欲流。三に有流。四に無明流と別たれてある。即ち滅度とは、有らゆる煩惱を滅盡して、斯の生死の流を渡り切つた彼岸の名である。

また『唯識論』の中には、自性清淨涅槃。有餘涅槃。無餘涅槃。無住涅槃と言つて四種の涅槃が説いてあるが、今いふ所の佛陀の涅槃は、無餘涅槃であつて、精神的には一切の煩惱無明と、肉體的には五蘊積集の身とが、共に滅盡して餘す所がないと

いふ意味である。彼の小乗の羅漢などの涅槃は、見思の二惑を斷滅して、分段の生死を出離するが、未だ極く微細な變易生死へんにやうを餘して居るといふので、有餘涅槃といはれるのである。自性清淨と無住の二涅槃は、佛に於ても衆生に於ても、變りのない本面目、迷悟凡聖の境を超絶した、本地の風光とでも謂ふべき理想の上の所談で、實際は、有餘と無餘との二つの涅槃があると見ればよい。

略説教誡、この略説の二字に就ては、古來異説があつて、道需禪師などは、釋尊が既に廣説の『大涅槃經』を説かれた後であるから、それに對して、略説としたものであるといふ様に、解釋して居るが、略は必ずしも廣に對しななければならぬとはない。試みに彼の『大涅槃經』に就て觀るに、北本(北涼の曇無讖譯四十卷)でも南本(六朝宋の慧嚴や謝靈運の譯三十六卷)でも共に純大乘部に屬するものであるが、此の『遺教經』は、古來の學者が種々其の攝屬を論じて、或は純小乗であるとか、或は正機は聲聞緣覺の二乗で、傍機は菩薩の爲めの教誡であるとか言つて、其の説は一致して居ない。即ち『大涅槃經』と此の『遺教經』とは、物がまるで別である。されば、強ひて略説の二字を廣説に對して考へることは、殆ど無意義であるまいか。即ち單に之れを

佛が簡略に説かれた臨終の遺誡であると解して、聊かも差支ないと思ふ。

經は梵語の修多羅スートラを譯した契經がいきやうの略で、修多羅は、古譯の中には、素咀噴、修妬路など、も書かれてある。之れも多義を含んだ語の一で、契經の外、法本えん、善語數(カンムリ)、直説(ノオホヒ)、聖教サウキョウ、常トコナリなどの義譯がある。要するに、常恒に法則となり、萬劫變易なきを示す名である。

佛典中、佛陀と天仙、化人の説を録したものは、此の經の字を用ひるけれども、其餘は如何に高德名僧の説でも、論とか、疏とか稱へて、經字は用ひないのが常である。故に若し人師の説で經と稱するものがあるならば、それは偽經と斷定せられるのである。

四、本經の内容 (大乘か小乗か)

さて、今も言ふ通り、此の經の内容に關する批判には、多くの異説があるが、天台の智者大師の如きは、明かに純小乗部に屬すべきものと判釋はんじやくを下されて居る。それは、單に文義文相の上から見るときは、此の經は小乗部に違ひないので、先づ序分に初めに阿若憍陳如あにやうぜんにょを度し、最後に須跋陀羅しゆはつたらを度すとある、此の二人は共に小乗の羅

漢を得たものであり、更に本文の教誡に入つては、一教誡毎に「汝等比丘」と呼びかけられて「汝等菩薩」とは呼ばれてゐない。而して其の教誡たるや、清淨自活の法を説き、好みを貴人に結ぶ事などを禁じてあるが、大乘菩薩の本領たる衆生無邊誓願度等の利他の道法は少しも説いてない。壊色の衣を着け、應器を持するとか、専ら四諦の法を念すとかあるは、全く小乗比丘の面目作法である。斯くの如き形の上から見れば、智者大師の判釋は甚だ理由あること、言はねばならぬ。

ところが、智者大師に先つて、馬鳴菩薩は「遺教論」を著され、確かに大乘であるとして此の經を扱はれて居る。而してまた圓覺大師の如きは、別に禪家一流の見識を以て、此の經の如きは、佛の暖皮肉、大小乗に拘はらず、といふ様に見て居られる。

古來諸家の異說區々たるも、以上の三者は、最も有力な代表的の見解である。

諸家の批判は、遮莫吾々はたゞ遺法の佛子として、教主の説き示された精神を奉行すればよい。此の經が大乘であらうと、小乗であらうと、其の形式範疇の如きは、どうでもよろしい。小乗と判する者は、其の判するに任す。大乘と稱する者は、亦その稱するを尤めず、孰れであつても、佛陀の眞實語として、釋尊の有難い御遺言と

して、吾々の之れを奉ずる態度に毫も變りあるべきでない。況んや「内秘菩薩行、外現是聲聞」と法華經にも説かれたやうに、形の上では、小乗聲聞の威儀作法はするとも、其の精神は大乘菩薩であり得る道理もある。されば、形式に於て且らく小乗部に屬すべき此の經の如きも、精神理想に於ては、如何なる大根大機の菩薩も、信受奉行すべき、大乘深甚の法門であるとの解釋も出来るではあるまいか。而して、佛陀が其の滅後の遺弟をして、機根の大小に別なく、齊しく皆此の廣大の法門に入ることを得しめんとの大慈悲心より、特に小乗に約して斯くの如く説き遺されたものであるとの見方も出来るではあるまいか。——純大乘の所談では、純小乗機根の者には入り難いが、小乗に約して説けば、小乗大乘通じて入ることが出来るから——若しそれ、小乗とは賤しいもの、大乘とは貴いものと思惟する人があるならば、それは由々しき誤りである。惟ふに、佛説は其の言、玄妙、その理、高遠、なか／＼以てその際涯を探究することは出来ない。然るに今の世の佛教を歡び迎ふる者の多くは、重きを此の難解難得のところに置いて、會々平易の言を以て、簡明の理を説いた佛説があつても、一向これに耳も傾けなければ、目も假さぬといふ有様である。是

れ果して釋尊說法の本旨に適ふものであらうか。言ふまでもなく、釋尊說法の本懷は衆生をして轉迷開悟せしむるにあつて、其の言の雅俗や、その理の淺深などに拘はるものでない。今この『遺教經』の如き、小乘四諦の法を説いたもので、その言必ずしも玄妙でなく、その理も亦必ずしも高遠ではないが、而もその教ふるところが諄々、その説くところが明晰、學んで厭ふことなく、聽いて解せられないといふことがない。苟も佛の遺弟を以て任せむと欲するもの、小乘なるが故に賤しく、大乘なるが故に貴いなどいふ偏見に墮せず、たゞ心解體得せむことを、これ努めねばならない。

四十二章經第三十九章に曰ふ、

佛言はく、佛道を學ぶ者は、佛の言説する所、皆應に信順すべし。譬へば蜜を食ふに、中も邊も皆甜きが如し。吾が經亦爾り。

と。徒に教相判釋の末に走り、大小頓漸の諍ひを爲すの至愚なるを覺り、佛の言説は皆應に信順すべきことを知るべきである。(別著「四十二章經講話」に就て右の一章参照せば義理更に徹底すべし)

五 本經の翻譯

(姚秦三藏法師鳩摩羅什譯)

姚秦は支那の國號である。東普の第四世康帝の永和七年に、符隄といふ者が、康帝に叛いて自ら宣照帝と稱し、國を秦と號した。符隄の從子符堅が立つに及んで、西羌(圖伯特人種)の姚萇なる者、また兵を起して符堅を殺し、自ら秦の皇帝と稱した。姚秦といふのはそれで、符隄の前秦に對して、後秦ともいふ。紀元千〇四十四年の事である。

是より先符隄が彌天の道安といふ高僧に遇ひ、西域の龜茲國に鳩摩羅什といふ碩學が居るといふことを聞き、遂に龜茲國に攻め入つて、羅什を伴ひ來り、篤く歸依し供養して居た。その後、姚秦の代となり、姚萇の子、姚興が、亦深く羅什を尊信して國師と尊稱し、終南山の逍遙園に置いて、諸經の翻譯を爲さめした。『開元錄』第四上に據るに、

姚萇の白雀元年甲申に起り、姚泓(興の子)の永和三年丁巳に至る、凡そ三主三十四年を経、沙門五人が出す所の經律論等、總て九十四部、合して六百二十四卷とある。五人とは、佛念、弗若多羅、佛陀耶舍、曇摩耶舍の四人と羅什とである。

が、此の中、羅什の譯出に係るもの最も多きを占め、七十四部、三百八十四卷に達すと同書に見えて居る。(出三藏記には三十二部、三百餘卷とある)而して此の『遺教經』も實に其の中の一部である。羅什は、『法華經』『維摩經』等の大部のものを始め、重要な佛經及び論釋を多く翻譯して、後世に遺して居るが、弘始年中に逍遙園に於て入寂した。遺骸を茶毘たひに附したが、その舌だけは、どうしても焼けず、少しも變じなかつたと傳へられて居る。

鳩摩羅什は梵名で、童壽の義と譯せられる。この人、童年にして、しかも老成の徳を具へて居たので、かういふ名があるのだといふことである。その本傳を見れば頗る偉言卓行に富んだ閱歷を有する高僧であるが、今は略して置く。『佛祖通載』其他『佛祖統紀』『開元錄』等に詳傳が見えて居るから、知りたいと思ふ人は就いて見るがよろしい。

三藏法師といふことは、三藏は經藏、律藏、論藏で、即ち佛典を總稱した名目、その三藏に通曉して、高世に師表たるべき、學徳ある僧の稱である。

譯は易なりと註せられ、外國の語を自國語に易へること、又、譯は釋なり、陳なりな

ごの説もあつて、解し難き語句を解し易からしめることである。

六。本經の流布 (多くの註釋書)

此の經一卷、要約すれば、初に戒定慧かいぢやうゑの三學を示し、後に苦集滅道の四諦を説かれたものといふに歸するが、上に辨じた通り、釋尊最後に臨んでの親切な遺誡として後世に頗る尊重せられ、古來之れが註釋に力を注いだ高德が甚だ多くある。就中馬鳴菩薩の『遺經論』は最も古く、最も確かなものとせられ、支那の眞諦三藏法師は、之れを漢譯して廣く世に傳へた、それに對して更に隋の靈裕法師は『義疏』を書いたが、唐の懷素律師亦『義疏』を附け、金陵の圓覺大師、孤山の智圓法師の二人も『疏』を作り、其他、晋水の淨源といふ人の『節要』餘杭の元照律師の『住法記』鳳山守遂和尚の『略註』爲霖道霈禪師の『指南』藕益智旭和尚の『注解』など、擧げれば、この經の註釋書は澤山に出て居る。篤學の士は、之等の諸書を涉獵して、玄を探り幽をひそ闡くに勉むるならば甚だ結構な事である。しかし、兎角枝葉の議論に走り易いのが、佛典註釋の一の弊であるとも謂はれるから、漫りに影を追うて形を忘れ、末を採つて本を棄つるが如き愚に陥らぬやう、特に注意を要する。

此の經が、世に流布された著しい形跡は、唐の太宗の時に見えて居る。太宗は此の經六百十三部を書寫せしめ、勅宣を以て天下に施行せられた。其の勅宣に曰く、如來滅後、末代澆浮を以て、國王大臣に付囑し、佛法を護持せしむ。然れば僧尼出家は、須く戒行を備ふべし。若し情を縦にして淫佚し、途に觸れて煩惱し、人間に關涉し、動もすれば經律に違はんには、既に如來玄妙の旨を失し、又國王還付の義を虧く。遺教經は是れ佛が涅槃に臨みて説く所、弟子を勸戒すること、甚だ詳密と爲す。末俗縹緲、並に崇奉せずんば、大道將に隠れんとし、微言且つ絶せん。永く聖教を懷うて、用つて弘闡せんことを思ふ。宜しく所司に令して、書手十人を差し、多く經本を寫さしめ、務めて施行せよ。須ある所の紙筆墨等、有司準給し、其の官宦五品以上、及び諸州史に各一卷を附せよ。若し僧尼の行業、經文と同じからざるを見れば、宜しく公私勸勉して、必ず遵行せしむべし。

と、誠に堂々たるもの、而して頗る親切なものである。降つて宋の眞宗皇帝も、自ら此の經の『御註』を製して、大に天下に施行せられて居る。眞宗より五代、徽宗の時、守遂禪師が、此の經に『四十二章經』と『瀉山警策』とを合して『佛祖三經』と稱して之れに註したが、更に道霈禪師が、『佛祖三經指南』を著述して以來、益々世に行はれるやうになつた。

七 本經の結構 (變則の分科)

馬鳴菩薩の『遺教論』には、本文を七大科に分けられてある。今此の講話に於ても便宜之れに本づいて、矢張り全文を七段に分ち、『節要』其他一二の註釋書も參酌して、更に小段落を分つたが、大小各段落には、成るべく要義を執つて、通俗的に、解し易いやうな、命題を附けることにした。

凡そ諸經は、序分(序論)正宗分(本論)流通分(結論)といふ三段の分科を立てられるのが通則であるが、此の經に於ては、七段に分つた中で、最初の一段は序分、後の六段は悉く正宗分で、最後の流通分の一段を欠いて居る。又序分に於ても、一般他經の最初に置かれる所の「如是我聞一時佛在某處」といふやうな、證信序といふものがなく、直に發起序から始めて「釋迦牟尼佛云々と筆を起してある。斯くの如きは、通常の經に多く見ない變則の分科であつて、他に例を求むれば、現に沿く用ひられて居る『般若心經』の如きが、それである。

所謂七大科は、如何に分けられるか、各段落は何を教誡されるかは、次の講話に入つて、逐次おのづから明瞭になることである。

第一段序分

釋迦牟尼佛。初轉法輪。度阿若憍陳如。最後說法。度須跋陀羅。所可度者。皆已度訖。於娑羅雙樹間。將入涅槃。是中夜寂然無聲。爲諸弟子略說法要。

釋迦牟尼佛、初に法輪を轉じて阿若憍陳如を度し、最後の説法に、須跋陀羅を度したまふ。度す可き所の者は皆已に度し訖つて、娑羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入りたまはんとす。是の時、中夜、寂然として聲無し。諸の弟子の爲に、略して法要を説き給ふ。

【字解】 ●釋迦牟尼佛 釋迦は釋尊の俗姓、牟尼は釋尊の德號、佛も一の尊號である。

ある。即ち印度の釋迦種族なる迦毘羅衛國淨飯王の子、悉達太子が、難行苦行、宇宙の眞理を大悟體得せられた結果の名で、字義を漢譯すると釋迦は能仁牟尼は寂黙の義になることである。佛は佛陀の略で、覺の義と譯される。覺はサトル、又はサメルと訓まれ、迷ひの夢からサメ、萬古不易の眞理をサトルことであるが、佛の本義は、自覺、覺他、覺行窮滿と云つて、自分が覺るのみならず、自分が覺れ

る如く他をして覺らしめ、しかも當に道理を覺るのみならずして、之れを自他の上に實踐し體顯し、理論と實際とが圓滿完全に盡された、理想的境界に名けた稱號である。◎初轉法輪 釋尊既に十二年の修業を終り、菩提樹下に開發悟道されて、起つて鹿野苑に來り、始めて四諦の法門を説かれた、それが初轉法輪である。輪は摧破を義とし、佛の説ける法は、能く諸惑を破り、衆生の煩惱を摧くこと、恰も車輪の物を挽き、砕くが如しといふに喩へたもので、轉は此の喩から假り來れる縁語に外ならぬ。◎度阿若憍陳如 度は濟度又は救度のこと、釋尊の説法を聽く者が、皆迷を轉じて悟を開き、迷へる生死の此岸より、正しき覺りの彼岸に度り達する意である。阿若憍陳如は、釋尊の舅氏である。釋尊が入山修行の當時、父王が思念止みがたく、家族三人、即ち阿鞞跋提拘利、これに舅氏二人、即ち陳如と迦葉都合五人を遣して隨從せしめられた。然るに陳如と迦葉とは五欲に囚はれ、他の三人は無意味な苦行に執着してゐた。釋尊は苦行を捨て、次で佛果を成せられたが、此の五人を憐んで先づ第一に陳如を度し、第二に阿鞞跋提、第三に迦葉と拘利を濟度せられた。これを「三番度五比丘」といふので、即ち釋尊最初

の説法に度せられたのが阿若憍陳如である。◎最後説法 今將に涅槃に入らんとする時、四諦の法を説かれた、即ち此の遺教經を説かれたときである。◎度須跋陀羅 漢譯して好賢または善賢といふ、鳩尸那城に住してゐた修道者で、此の時百二十歳、所謂外道中の長老として人に崇敬せられ、自分も大學者を以て任じ、釋尊を年少者と輕侮して、就いて法を聽くことを望まなかつた。然るに佛陀いよく涅槃に入らんとすると聞き、始めて阿難に伴はれて、佛所に到り法を聽いた。釋尊は之れに四諦八正道を教へられたが、即座に轉迷開悟して、阿羅漢果を證り得た。そして今面たり佛陀の入滅を見るのが悲しいからと、證りを得ると同時に、釋尊に先つて涅槃に入つてしまつた。◎所可度者皆已度 訖 初轉法輪と最後の説法とを擧げて、中間無數無量の説法教化を略したもので、釋尊一代五十年に、凡そ有縁の衆生は悉く濟度して、此の世に出現された使命を果し盡されたことをいふ。訖の字は音コツ、盡の義、また止の義である。◎於娑羅雙樹間 娑羅樹は漢土に堅固樹と譯してある、夏冬その色を改めないからである。此の樹は跋提河の濱に在つて、東西南北の四方に各二本づゝあり、其一本は榮え、一本

は枯れ、しかも枝と枝と相合し、根と根と相連なり、且つ東の雙ぶものは、常と無常南の雙ぶ者は、樂と無樂、西の雙ぶ者は、我と無我、北の雙ぶものは、淨と不淨、此常樂我淨の四德に象つて四方に雙生して居るから、雙樹と稱するのであるといふ。

●將入。今赴きつゝあるといふ意。●是時。正しくその時を指す。●中夜。眞夜中、即ち二月十五日の夜半である。古人は、佛陀が特に中夜を以て入滅せられたのは、斷見(極端なる無の觀念)常見(極端なる有の觀念)の二邊を離るゝ事を表す爲であると説いて居る。斷常の二見は、外道の所見で、佛の所説は「非有非空亦(有亦空)の中道である。●寂然無聲。佛陀が現世を離れんとする時の光景をいふので、天も地も人も、靜肅にして些の喧動なきをいふ。●爲諸弟子。佛陀入滅の席に、隨從して居た教徒は、勿論廣義には末世今日の吾々佛敎を奉ずる者皆この諸弟子の三字に、含められる。弟子の字義は「學、我が後に在るを弟と云ひ、解我に從つて生ずるを子と云ふ」と南山大師の『行事鈔』に見えて居る。●略說法要。雲棲大師の説に「滅に垂んとして復た再會無し。中夜時多からず、是を以て略して之れを言ふ、唯其の要を取るなり。聞く者は宜しく心を盡すべし」とあつて、臨

終の遺言(遺言)固に親切痛切の教誨であるが、特に中夜といふ時間に限りがあつて、ゆるくと説いて居る暇がない、即ち大要を取つて説き遺されたのである。

【講話】 初め釋尊は苦行林に入り、憍陳如等五人と共に、非常の苦行を積み、後には一日僅かに一粒の胡麻を食して、能くその身を支へ得るやうにまでなつたが、しかし、如何にしても未だ大安心が得られぬ所から、遂に苦行そのものは、眞の道を成就し得らるゝものでないことを知り、去つて尼連禪河の水に沐浴し、難陀といふ少女の献げた乳粥を受けて、先づ身體の衰弱を癒し、元氣を恢復して、一人菩提樹下に到り、吉祥草を敷いた安樂坐に坐禪して居られたが、十二月八日、曉天の大氣清新に、金星燦として輝くところ、廓然として大悟せられた。こゝに所謂大自覺を得られたのであるが、更に覺他の第一歩を進めんとして、先づ前に別れた彼の五人の者を濟度しようと思惟せられた。

彼の五人の者は、共に苦行をして居た釋尊が、忽ち之れを棄て、河に浴し、乳粥を受け、菩提樹下に退かれたのを見て、是れ道心衰へて俗界に墮落したものと思ひ、共に波羅奈斯國の鹿野苑に到つて、依然として苦行を續けてゐた。所が偶々

釋尊が來り近づくのを見て、五人は相語げて曰く「彼は既に俗界の塵に染み、五欲の境に歸れり、彼が身體強壯になり、肉豊に血鮮なるは、主として是がためなり、彼近づくとも厚遇すべからず」と、しかし次第に釋尊の近づくに従つて、自然とその端嚴なる相貌に畏敬の念を生じ、且つ釋尊から、苦行は正道を成じ解脱を得る眞因でないといふことを聽き、大に感激して遂に佛弟子たらんことを請ふに至つた。釋尊これを許して、爲めに法を説いて各證果を得しめられた。その時説かれたのが即ち四諦の法である。

四諦は苦集滅道の四諦は、審實不虛の義で、正理または眞理の意である。即ち此の四つの觀察が徹底的に出來れば、迷を轉じて悟を開き、煩惱を斷じて涅槃に達し得られるので、釋尊はその最初の説法にも、その最後の教誨にも、此の法門を示された、まさに佛弟子の修習すべき正道である。

苦諦といふのは、先づ此の身、此の世はすべて是れ苦なりと達觀するので、此の達觀によつて欲樂煩惱を遠離し、悟の第一階段に上るのである。言ふまでもなく、此人世に於て、生老が樂であらうか、病死が苦でないであらうか、愛して會はむ

と欲する者には、會ふことが出來ず、厭うて離れんとするものに、却つて離れられないといふのは、苦でないと言はれまい、況して愛して會つた者とは離れなければならぬといふのは、實に苦の甚しいものではないか。所謂四苦八苦の娑婆世界に處し、盛者必滅、會者定離の世相を見る、蓋し悲の悲なるもの、慘の慘なるものではないか。この悲惨の苦界を脱して、常樂寂靜の境界に到達しようとするには、まづ吾等が此の苦界に沈淪して居るものであることを諦かに知らねばならない。それが即ち苦諦の法である。

集諦といふのは、如上の苦の由つて來る所の原因を、明かに觀察し了知する法で、苦の原因は即ち惑と業とである。吾等が正理に背き、色、聲、香、味、觸の五根を恣にし、財色、食名、睡の五欲を逐うて狂奔するは、皆是れ惑業の致す所、惑業が原因となつて、現在の苦の結果を招來する、故に「集とは招集の義なり」と釋されてある。この惑業、苦の三が循環して、出生入死、迷から迷に輪廻して居るのが、凡夫衆生の有様であるが、既に苦諦を了得した以上は、此の苦を解脱すべく、苦の由て來る原因を究め、惑業を斷離することに努めねばならない。然るに徒らに名利に狂奔

して止る所なく、聲色に沈湎して止む所なきは、これ凡情の常態、世舉つて然らざるなきに至つては、亦憐むべきではないか。しかも、一たび道を聞いて、この世を苦界なりと諦観するものは、更に苦の原因が五欲であることを達識せねばならぬ、これ即ち集諦の法である。

滅諦は寂滅爲樂の悟の境界で、既に此の世を苦界と觀じ、苦の原は欲であると知つたならば、その欲を斷ち苦を離れんことを熱求し渴望せねばならないが、惑業苦を滅除すれば、そこに常樂寂靜の理想境が展開されるのだと、證上の結果を示したのが滅諦である。然らばその滅諦は如何して得られるか。

道諦は即ち此の理想境に到達すべき、正しき道を示されたもので、その道とは約していへば戒定慧の三學、廣むれば三十七の助道品ともなるなど説かれるが、要するに八正道を指すものと見てよい。八正道の目を擧げると、

- 一、正見。正しく四諦の正理を觀じて、外道邪見を破すること。
- 二、正思惟。四諦の正理を深く觀じ、深く察すること。
- 三、正語。綺語、妄語、等一切の不實の語を離るゝこと。

四、正業。邪妄の行を離れて、行業すべて清淨にして正しきを保つこと。

五、正命。清淨にして自活し、俗塵不潔の生活を離るゝこと。

六、正精進。正道を修習し、勉勵不退なること。

七、正念。戒定慧の正道を思念して、涅槃に到るまで持續して止まざること。

八、正定。禪定を修習して心を散亂せしめざること。

本經中に説かれてある八大人覺と稱するものは、この八正道と名目を異にするが、實義に於いて同一に歸せられるもので、佛弟子たるものゝ當に實踐し體得すべき正道である。そは後段其の條下に於いて詳説する。

此の如く釋尊は、その成道の最初に於いて、憍陳如等五人の比丘を度し、次いで頻毘娑羅王の懽迎となり、父王との再會となり、祇園精舎の説法となり、乃至須跋陀羅の濟度を最後とするまで、その間五十年、説法度生、無量無邊、いよゝゝ釋尊出世の本懷を達せられ、救世の使命を果されて、今や娑羅雙樹の間に於て、將に涅槃に入りたまはむとするのである。是の時に當り、大地山河有情、非情寂然として鳴りを沈め、光景淵の如く靜肅に、この大聖入滅の象徴を現示した。是に於て釋尊、更に

諸の弟子達の爲めに、正道の大要を説いて、最後の遺誡を與へられたのである。

第二段 世間法要

一 邪業を對治する法要

(一) 根本清淨戒

汝達比丘。於我滅後。當尊重珍敬波羅提木叉。如闇遇明。貧人得寶。當知此則是汝等大師。若我住世。無異此也。

汝等比丘、我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すること、闇に明に遇ひ、貧人の寶を得たるが如くすべし。當に知るべし、此は則ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此れに異ると無けん。

【字解】 汝等比丘 是れは釋尊が親しく教徒を呼びかけられた言葉で、即ち「汝等比丘」よの意である。比丘は、解題の處で言つた、多義を含んだ梵語で、譯稱が頗

る多い。曰く除穢男、曰く乞士、曰く破惡、曰く怖魔、曰く勤事男等であるが、まづ除穢男といふのは、凡そ世間の欲に赴いて道を見ざる衆生は、精神的には全く飢饉同様の者である、それを比丘は能く精神の糧を與へて、その饑を除去といふ意味である。別に福田の稱あるも此義を意譯したものに外ならぬ。乞士は、他の財施を受けて、清淨に自活する義、破惡は一切の惡業煩惱を破る義に取り、怖魔は正道を行ずるを以て能く天魔を怖れしむるに名づけ、勤事男は、晝夜勤苦修道して倦まざるを義とするのである。要するに比丘とは男僧のことであるが、此の經には唯比丘を擧げて、女子出家の比丘尼や、在家の佛子なる優婆塞(信男)優婆夷(信女)等を略したのは、一を以て他を攝したに過ぎない。佛意は固より各種の教徒に示されるに在る。●當尊重珍敬、當は俗に「キツト」といふ意、尊重珍敬は訓んで字の通り、最も大事にし、敬虔に奉することであるが、元照律師は『住法記』に釋して「功德高勝の故に尊、利益弘深の故に重、保借して失せざるが故に珍、謹奉して慢せざるが故に敬」と言つて居る。●波羅提木叉 佛の説きたまへる戒法のこと、漢譯して別々解脱といふ、即ち五戒、八齋戒、十重禁戒、四十八輕戒、或は二百

五十戒、五百戒など、戒の数はいろいろあるが、その中の一戒だけでも持てば、一戒だけの功德があつて、一戒別々に解脱が得られるといふ義で、又これを處々解脱保得解脱隨處解脱なども譯されてあるが、意義に變りはない。◎如闍遇明貧人得寶 闍中に明に遇へば最も尊重し、貧人が寶を得れば、狂喜して珍敬する。戒法を持すること當に斯くの如くせよといふ、即ち此の對句は、尊重珍敬の形容語である。◎汝等大師 佛陀在世中は佛陀自ら大師となられたが、佛滅後は、この戒を以て大師とせよと示されたので、戒即佛陀の意義が見られ、以て戒の如何に尊重すべきか知られる。大師は古人の註に「和尚、阿闍梨、受業、教授等、皆大師と稱す」とあつて、平たくいへば、師匠に大の字を加へた敬語であると思へばよい。(後代唐朝以來は、天子の師となつた高僧を、特に勅して大師と稱することになり、現に我國でも、朝廷より古の高僧に大師號を追諡せられるなどのことがある)◎若我住世無異此也 戒即佛陀である以上、肉身の佛陀は滅することも、法身の佛陀は永久に不滅で、戒體の存する所、即ち佛體在します道理であるぞと、誠に親切な教誨である。

【講話】

第二段は、所謂煩惱障、業障、報障の三障を破して、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四惡趣を出離するといふやうな、高遠な法は未だ談せず、漸次に三界を超ゆべき道を教へられたので、即ち未だ出世間的でない、題して世間法要とふ所以である。而して其の世間法要の中、最初に先づ邪業を對治する法要を説かれてあるが、更に其の冒頭の第一節が、根本清淨戒と題した右の本文である。

「汝等比丘」と呼びかけられたのは、實に親しい、辱ない詞で、丁度世間の父母が、今生の臨終の際に、子達孫達を枕頭に呼び寄せて、諄々として訓誡し懇々として遺囑するが如く、今釋尊もその通りで、溢るゝ最後の深慈を示されたのである。以下本文中、語を改むる毎に「汝等比丘」と言はれるのは、皆此の意である。

さて、この一節は、戒法の最も尊重すべきことを示されたので、戒法の行はるゝ所、佛身滅せずとまで切言された、戒は即ち佛陀の生命、戒體を破る者は直ちに佛體を毀損することに當るわけで、佛戒の如何に尊く、大切なものであるかを、先づ明かに知らねばならない。

世に『梵網經』と稱する大乘佛戒を説かれた一巻が流布して居るが、傳説によれ

ば、これは佛陀が山を出で、正覺を成せられたとき、三七日間、自受法樂とて、佛の襟懷を瀝ひいて説かれた經であるといはれて居る。その『梵網經』の序に曰く、佛滅度の後、末法の中に於て、應當に波羅提木叉じゆんげうを遵敬すべし、波羅提木叉と云ふは即ち是れ此の戒なり。此の戒を持つ時、闇に明に遇へるが如く、貧人の寶を得たるが如く、病者の差いゆるが如く、囚じつ繫の獄を出づるが如く、遠行の者の歸ることを得たるが如し。當に知るべし、此れは則ち衆等の大師なり、若し佛世に住したまふども、此れに異なること無けむ。怖心生じ難く、善心發り難し。故に經に云はく、小罪を輕んじて以て殃無しと爲すこと勿れ、水の滴り微なりと雖も、漸く大器に盈つ、刹那の造罪も殃無間じけん地獄に墮つ。一たび人身を失すれば、萬劫にも復らず、壯なる色の停まらざること猶ほ奔馬の如し、人の命の無常なることは、山の水よりも過ぎたり、今日けふは存すと雖も、明は亦保し難しと。衆等各各一心に勤修精進して、愼んで懈怠懶惰睡眠して、意を縦ほにすること勿れ。

と、言々句々、莊重にして切實、實に能く佛戒の最尊最貴なる所以を説示し、一讀、人をして求道精進、自ら已む能はざらしむる名文ではないか。更に『梵網經』の本文中には

戒は明なる日月の如く、亦瓔珞珠の如し。微塵無數の菩薩衆、是れに由りて正覺を成す。是の廬舍那ろしゃな法身佛誦せり、我釋迦佛も亦是くの如く誦す、汝新學の菩薩も、頂戴して戒を受持すべし。此の戒を受持し己つて、轉じて諸の衆生に授けよ。諦かに聽け、我れ正しく佛法の中の戒藏、波羅提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信せよ、汝は是れ當に成すべき佛、我は是れ已に成せる佛なりと。常に是くの如き信を作せば、戒品已に具足す。一切心有る者は、皆應に佛戒に攝すべし。衆生、佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る、位、大覺佛の所證に同うし已る、眞に是れ諸佛のみ子なり。

と、戒光戒徳、仰いで尊重すべく、信じて奉行すべきである。釋迦何人ぞ、已成の佛、我れ何者ぞ、當成の佛、即ち釋尊は過去に於ける佛、我は將來に於ける佛といふ、何等痛快の詞であらう。而して、その佛位に入るには、一に戒法に據つて得られるので、戒體を得れば、即身成佛位、大覺に同うして、我と佛陀と異なる所はないといふ

戒法の功德甚深微妙窮まれりと謂ふべきである。

釋尊は、此くの如く、その成道の最初に於て戒を説かれ、最後の説法たるこの遺教經に、亦此の戒を説き遺された、釋尊一代の法門は戒を以て終始したるもの、即ち佛教全體は實に佛戒を精神骨髓とするものであると謂ふべく、従つて佛教徒たる者は、大乘、小乘に論なく、頓教、漸教に別なく、何れもその根本精神は、この戒法に遵據せねばならない。若し戒法の精神に違却する者は、既に佛子にあらず、邪魔外道の徒と謂はれねばならない。

(二) 方便遠離戒

持淨戒者。不得販賣貿易。安置田宅。畜養人民奴婢畜生。一切種植。及諸財寶。皆當遠離。如避火坑。不得斬伐草木。墾土掘地。合和湯藥。占相吉

淨戒をたむ者は販賣貿易し、田宅を安置し、人民奴婢、畜生を畜養するを得ざれ。一切の種植及び諸の財寶、皆當に遠離すること、火坑を避くるが如くすべし。草木を斬伐し、土を墾し、地を掘り、湯藥を合和し、吉凶を占相し、星宿を仰觀し、盈虛を推歩し、曆

凶。仰觀星宿。推步盈虛。曆數算計。皆所不應。節身時食。清淨自活。不得參與世事。通致使命。呪術仙藥。結好貴人。親厚嫖慢。皆不應作。當自端心。正念求度。不得包藏瑕疵。顯異惑衆。於四供養。知量知足。趣得供事。不應畜積。

數算計することを得ざれ。皆應せざる所なり。身を節し、時に食して、清淨に自活せよ。世事に參與し、使命を通致し、呪術し、仙藥し、好みを貴人に結びて、親厚嫖慢することを得ざれ。皆作すべからず。當に自ら端心正念にして度を求むべし。瑕疵を包藏し、異を顯はし、衆を惑はすことを得ざれ、四供養に於ては、量を知り足ることを知つて、趣に供事を得て畜積すべからず。

【字解】

- 淨戒 即ち波羅提木叉のこと。
- 販賣 金錢を以て物品を賤く買ひ、貴く賣ること。
- 貿易 物品と物品とを交換して、利を得ること。
- 安置田宅 田地を買ひ入れ、其處に自己の家宅を造り据ゑ置くこと。
- 人民奴婢 眷屬奴隸、下女下男。
- 畜生 犬猫牛馬等の獸類、及び諸鳥、虫魚等。
- 種植 播種栽培等。
- 財寶 錢財寶物。
- 遠離 身に近けず執着心を去る。
- 火坑 火

の燃ぬ出し居る穴最も恐るべきを謂ふ。◎合和湯藥 種々の藥劑を調合すること。◎占相吉凶 人相家相方位等を占ふト筮のわざ。◎仰觀星宿 五星六曜二十八宿等の天體を仰ぎ觀て、天災地變等を豫測する、即ち天文の學術。◎推步盈虛 日月の運行を推算し、以てその盈ちたり虚けたりする數理を知ると。◎曆數算計 日月の行道、四季の推移等を算へ、氣朔早晚の數を考へて、一年の曆を作ること。◎皆所不應 以上の諸事は皆出家學佛の徒の身に不相應のことですべて世俗外道の所作であるから、淨戒を持つ比丘は、斷じて爲すことを得ずと禁止されたのである。◎節身 所謂節制で、能く一身を修めて放逸ならしめざること。◎時食 正しき食時に食事をすること。比丘は日中一食と定められてある、即ち日中以外は、總て食すべからざる時で、之れを非時といふ、非時の食は爲すべからずといふのである。◎清淨自活 自ら出で、食を乞ひ、多く貪るの慾情は更に無い、前の「節身時食」が即ち清淨自活する所以である。◎參預世事 政黨結社を事とし、その他世俗の事に關係すること。◎通致使命 豪貴の人の間若しくは軍隊と軍隊との間などに立ち交り、甲者の使者となり命令を受けて

乙者に其の意を傳へ通ずる如き類。◎呪術 マジナヒ。◎仙藥 不老長生の藥を製造する如き、前者と共に俗を惑はすもの。◎結好貴人 自ら求めて、高位高官、縉紳に交際すること。◎親厚 貴人と交を親しくし、音信贈答を手厚くすること。◎媿慢 貴人と親交あるを以て榮と爲し、以て他を媿り、自ら慢ずること。◎媿の字には尙ほ親狎の意味もある。◎端心正念 訓んで字の如く、心を正しくするといふは、そのことであるが、茲では、他人が戒法を破ることあるも、己は確く正しきを守つて、之れに染汚するが如き心を起さぬ、その他如何なる誘惑にもかゝらぬとの意を含めて見るがよい。◎求度 度は度脱と熟字し、生死の大海を度り、三界の迷を脱れんことを求むるの意。また滅度と熟字して直ちに涅槃と見てもよい。◎包藏瑕疵 瑕は過、疵は病で、要するに破戒の罪過をいふ。罪過は包み藏してはならぬ、懺悔せよとの意。◎顯異惑衆 長髮、長爪その他奇怪なる形相を顯して、有徳有力の者の如くに見せかけ、衆俗を誑惑すること。◎四供養 衣服と飲食と臥具と醫藥の四通りの供養物。比丘は常に道を説き、法を施して、在俗からは之等の供養物を受ける。◎知量知足 自身の分際相當の

分量を受けて満足し、貪り求めざることを。◎趣得供事 趣は僅と訓むが、速疾の義もあるので、分相應の量を得ば、サツサと受けよとの解釋もつく。供事は前の供養物のこと。◎不應畜積 畜積すれば愛着の心を惹く、愛著は佛道修行の禁物で、所謂清淨自活の道を壞るものである。

【講話】 此の一節は、前節に於て説かれた、根本清淨戒を持たんと欲する者は、その根本戒を汚損するが如き、有らゆる不善の行爲を、遠離しなければならぬ、といふことを、具體的に、頗る親切に教示されたものである。

具體的教示であるだけに、殆ど講話の必要もない、字解だけで十分足りると思ふが、讀者の了會に便する爲めに、更に一應の通義的解釋を添へて置かう。

「根本清淨戒を持つ者」と標榜する以上、飽くまで清淨でなければならぬ。純一無雜な態度が必要である。苟くも清淨純一を汚損する條件は、斷々乎として排斥し、斷絶せねばならない。さうした條件とは何かといへば、大凡此節に於て列擧された類の事である。

即ち、物品を賣買し、交易して利益を計るといふ、商人のやうな事や、又は田宅を買ひ求めて、安逸を貪るが如き、世間の俗人同様の心を起すことや、眷屬を多くし徒に愚痴愛情に纏縛せられて、道心を亂るやうなことや、下女下男を多く召し使つて、驕奢高慢の悪性を助長し、謙遜卑下的美徳を失ふに至るが如き事や、多く動物を畜養して利を求むるが如き類、何れも比丘として爲すべからざる事どもである。

例へば蘭、萬年青などの盆栽類でも、苟も利欲愛着の念を惹くべき物は、皆打ち棄てねばならぬ。總て家財金錢等を遠離することは、恐るべき噴火坑口を避くるが如くせよ、と實に痛烈な誡めである。

草木を斬伐し、土地を掘り墾すが如き事は、比丘としての威儀を損するのみならず、生物の生命を損傷すること多く、無慈悲の業である。又醫藥を事したり、占筮、天文などの觀測を以て、俗衆を誑惑する如きは、外道の所業で、佛戒を持し、清淨純一を旨とする比丘の道法ではない、固く禁止せねばならぬ。

根本清淨戒に依つて、純一の精神を保たんとすれば、飽くまで汚れなき、清淨な生活を営まねばならぬ。即ち日中一食の比丘の作法を嚴守し、能く俗塵の外に

超然として一身を修むべきである。苟も政事、官事より、一家の事、朋儕の事等の俗事に參り預り、或は豪貴の人の爲めに、書を馳せ使ひ歩きをしたり、怪しげな禱りやマジナヒをして人を誑かし、仙薬を製して人を惑はし、以て利を博せんとしたり、族姓権豪の人に親近して、權勢を假つて、他人を侮蔑したりする如き所行は斷じて爲すべからず、之れらは總て比丘たる、世表の氣高き地位を下し、俗境邪業に身を混じり心を染めて、自ら汚れを取るものである。清淨を旨とする比丘の生活に於て、之等は總て遠離すべきで、比丘は唯だ端心正念に住し、不斷の精進を以て、度脱の理想を追求すべきである。

又比丘は、自己の罪惡過失を覆ひ、僞善を以て外面を糊塗し、或は奇異なる幻術を爲して人を惑はしてはならぬ。衣食、臥具、醫藥の四供養を受くるときは、得るに従つて飽くことを知らざる如き、貪慾の心を起してはならぬ。衣食等を得て蓄へる事は、執着を深くし、清淨行の妨げと爲ること甚だしいからである。

「婆娑論」に、適切な傳奇的挿話がある。昔、一人の比丘があつた、欲深かた、常に多くの施物を貪り受け、之れを蓄へて居た。所謂比丘たる清淨自活を營まず、行道

おのづから廢れたもので、其報いによりて大魚の身に墮し、其の背に一本の木が生えてゐて、日夜非常の苦みを受けた。即ち風波起る毎に、その木が動搖し、爲めに皮肉破れて背の上に血を洒ぐ、堪へがたき苦痛に、果ては其の師に對して恨みを懷くやうになつた。愚かなる彼は、自分が此の惡報を受けたのは、畢竟師の訓へ導くことの不親切であつた爲めとした。或時その師が船に乗つて海を渡るとき、此魚が害を加へて恨を晴らさうと企てた。師は憐んで、具さに理を説いて聞かせ、因果歴然、自業自得の結果なるを誨へ、道心を起すべきことを勧めた。魚は遂に理に屈し、深く懺悔して、尙ほ種々と法を聞き、且つ言ふやう「師よ、願くば我が背上の木を以て一の法器を作り、我が爲めに罪を除きたまへ」と言ひ終るや、その魚は死んだが、其の木は波に隨つて、自然に師の處に流れついた。師はそれを以て魚の形を刻み、粥飯時の器と爲し、其腹を撃つて彼が畜身を救ふことにした。今、禪宗叢林の食堂用に打ち鳴らす「杵」は、即ち此の因縁に由つた物であるといふことである。

要するに、比丘たるものは、徹底清淨の生活を營まねばならぬ、苟も清淨を汚す

べき、貪欲執着は、微塵ばかりも有つてはならぬ、それら總て遠離すべき條件を、一々本文に擧げられたわけで、之等諸條件を遠離した端的が、所謂端心正念で、端心正念にして始めて度脱の目的が達せられるのである。

斯く根本清淨戒を守らう爲めには、細かな多くの禁止條件が附けられるので、之れでは非常に窮屈で、煩に堪へないものゝやうに見えるが、前にもいふ如く、此の經は小乗比丘を當面の對機としての所説であるから、修行の形に於ては、當さに斯く嚴肅な、禁欲主義的立場から示されねばならぬので、若し最も精神的な、大乘菩薩の修行からいふならば、趣は全く別になる、即ち菩薩は自利利他の行願の爲めには、縁に隨ひ感に赴き、光を和らげ、塵に同じて、有らゆる形に倚り、雜多な方便を廻らさねばならぬ。晉の佛圖澄が、法力を以て盛に呪術を爲し、所謂異を顯はした如き、唐の一行阿闍梨が、非常に天文運星の事に精通してゐた如き、或は清涼大師が盛に好みを貴人に結んだ如き、古今の高僧善知識にして、此の本文の禁制に牴觸せる如き行爲をなした事例は澤山ある。之れらに對する批判は、今謂ふ所の大乘小乗の區別を以て、その目的理想の上から斷せられねばならぬ。

所が、末世澆運の今日、大乘大根機の菩薩衆が、果して幾人見出せるか。若し徒らに大乘教を大言壯語して、眞面目に佛意を奉體する念なきものは、實に佛門の賊子といふべく、身前身後の惡報、管にかの大魚の類のみでなからう。明の雲棲大師誠めて曰ふ、

古より高僧の庄田を置く者あり、夫力(下僕)を畜ふる者あり、地を鋤する者あり、牧牛する者あり、鈴聲を聽く者あり、七帝の門師と爲る者あり、種々の神通を現する者あり、蓋し大士の所作は尋常に超出す、律の拘る所にあらざるなり。此れを以て彼れを議すべからず、但だ末世の比丘、初心の菩薩は、唯だ宜しく佛の遺教に遵ふべし。

と、今日の學佛徒、當に卷いて懷にすべき至言ではないか。要は清淨に自活し、端心正念にして度脱を求むる、といふ根本精神を確保するに在る。

(三) 戒能く定慧を生ずることを明す

此則略說持戒之相。戒是正。此れ則ち略して持戒の相を説く。戒は是順解脫之本也。故名波羅提。此れ正順解脫の本なり、故に波羅提木又と名

本又因依此戒得生諸禪定及滅苦智慧。

く。此の戒に因り依つて、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得。

【字解】 此則略說持戒之相。

前節を結び、更に後節を開く語である。元來、戒

の體は唯一であるが、戒の相に至つては甚だ多數で、五戒、八戒、十戒、四十八戒、二百五十戒、五百戒など、多くの戒相が説かれてある。今それらを一々擧げて居れないから、最も觸犯し易い、前節の戒相を略說せられたのである。◎戒是正順解脱之本。此は戒徳を示すものである。正は邪と背き、順は理と合ふ。生死の流れに逆うて涅槃の流れに順するにより、煩惱の繫縛を直ちに解脱することが出来るのである。◎得生諸禪定。禪と定と別物ではない、禪即定、定即禪である。禪は梵語で具さには禪那、漢譯して靜慮といふ、靜觀冥想、能く心の散亂粗動を止め、恒に正念に住せしむるのが禪定である。◎滅苦智慧。智も慧も亦同一である。迷は愚痴にして正理に背くより生ず、智慧の光明は能く痴暗を破り、迷苦を脱することを得る。斯の正しき智慧は、前の禪定を以て正念に住するによつて生じ、其の正念は持戒によつて保たれるのである。

【講話】 前節に於て、既に持戒の相を説かれたが、茲には更に戒の功徳を讃嘆せられるので、戒によつて、禪定、智慧を生じ、戒定慧の三學圓にして諸苦を解脱することが出来る、戒は實に滅苦の本である所以を明されたので、「正順解脱」の四字が眼目である。

或はこの四字を「正に解脱に順ず」と訓ませる向きもあるが、矢張り之れは四字共實字にして讀んだ方が可いと思ふ。馬鳴菩薩の「遺教論」なども後者を取つたもので、正は邪業を除くことであり、順は法性に隨順することである、正にして且つ順、それが直ちに解脱の本であるといふ様に解されて居る。如來の三徳をいふにも「法身、般若、解脱」とあつて、解脱の二字は茲に最も重く見られねばならぬ。解はトケル、脱はヌケルと訓む字で、吾々凡夫が、無始劫來、煩惱無明の爲めに、本來の佛性を昧まされ、迷妄諸苦のために繫縛されて居るのを、釋然として其の縛めをトキ、その不自由な境遇からヌケ出して、大安樂、大自由の涅槃寂靜地に入る、それが所謂解脱である。

而して斯くの如き大解脱を得んとならば、諸の痴暗を照破する所の眞實智慧

の光明がなければならぬ。其の智慧の光明は、常住正念を持續して、心を迷妄の裡に散らさない所の禪定によつて輝き出す。しかもそれら禪定、智慧は何に依つて得られるかといふと、實に持戒の功德によつてのみ得られる。即ち戒は解脱の根本たる所以である。雲棲大師は「補註」に、「楞嚴經」の

戒に因つて定を生じ、定に因つて慧を發す。

の文を引いて、此の義を釋明して居られるし、また「毘尼母」にも

波羅提木又は、最勝の義、諸善の本なり。戒を以て根と爲して、諸善生ずることを得。

と見えて居る、何れも同工異曲の文相である。然るに今この本文には「此の戒に因り依つて、諸の禪定、及び滅苦の智慧を生ず」と、戒能く定を生じ、戒能く慧を生ず、即ち戒法護持の功德は、直ちに定慧兩ながら發生せしめるといふ、戒徳贊嘆の至りて、古人は此の一節を「贊戒」の文と名づけて居る。

戒は前にも解したやうに、防非止惡を義とするので、總ての非行惡業を防止するのが戒である。總ての非と惡とが止めば、當然の結果として、そこに眞純な、渾

然無雜の至善の境地が現はれる、此の境地に到つて、定慧の輝きがおのづから發せられ、所謂解脱が得られるのであるから、根本義として、持戒即解脱と謂ひ得られるのである。元來、現在迷妄の諸苦は、その本、無明煩惱より様々な惡業を重ねて來た結果であるが、それら様々な惡業を斷絶するのが戒で、持戒に因つて諸惡を斷ち、再び惡に移らぬといふ禪定の力を生じ、惡の本たる無明を照破する智慧の明を發するならば、迷ふべき妄もなく、受くべき苦もない。「正順解脱」といひ「滅苦」といふ、實に此の根本義に歸結されるのである。

此の根本義を沒却して、徒らに戒法の形式にのみ拘泥するものあらば、實に戒の功德を享け得ないのみならず、戒徳を損すること大なるものあるであらう。今の世、持戒堅固の佛子は殆ど求めて得られないが、偶々佛戒を守るが如き者あつても、大抵は無意義な、無自覺な、形式佛法たるに過ぎないのを、深く悲まざるを得ない。

昔、牛の一群があつた。何れも性質素直で、日々やわらかき草を食み、清き水を飲み、楽しく生活してゐた。それを或る驢馬が見て、非常に羨み、自分も其の樂み

に預りたいたいものと密かに牛の群に入り、牛のやうな動作をして、同じく草を食ひ水を飲みつゝ、群牛の中に在つた。そのうちに牛の鳴き眞似をして、モーと一聲高く吼えたが、こればかりは如何とも出来ない、驢馬の聲はヒーンと響いた。これは失敗つたと狼狽して「おれは牛だ、おれは牛だ」と叫んだが、群牛は承知せずつひに寄つてたかつて舐き殺してしまつた。

これは佛説群牛經の中に説かれた因縁で、清淨比丘衆の中に交つて、比丘の威儀を眞似し、自ら「我は比丘なり、我は比丘なり」と叫ぶとも、眞實淨行を身心に修行するのでなくては、かの群牛中の驢馬の如く、斷じて我が教團中に置くことを許すべからず、と強く誡められた教材である。

今日の佛門、何ぞそれ群牛中に驢馬多きや、否な、何ぞそれ群驢中に牛少きや、の歎なきを得ない状態ではあるまいか。要するに、佛の遺教を奉ずる佛徒たるものは、飽くまで生活を清淨にすべきである。清淨生活の條件は、佛戒護持であらねばならぬ。而も持戒の根本義は、滅苦解脱に在ることを、徹底的に悟了すべきである。

(四) 戒能く利益ある事を明す

是故比丘當持淨戒勿令毀缺。若人能持淨戒。是則能有善法。若無淨戒。諸善功德皆不得生。是以當知戒爲第一安穩功德住處。

是の故に、比丘、當に淨戒を持ちて、毀缺せしむること勿るべし。若し人能く淨戒を持てば、是れ則ち能く善法有り、若し淨戒無ければ、諸善の功德、皆生ずることを得ず。是を以て當に知るべし、戒は第一安穩功德の住處たることを。

【字解】

●持淨戒

淨戒は(一)に謂ゆる根本清淨戒のこと。持は任持または堅持、即ち正念相續し、保持して失はぬ義である。●勿令毀缺 毀は傷なり、缺は損

なりと解釋され、キズツケ、ソコナフことである。(二)の方便遠離戒を正しく守れば、能く淨戒を毀缺せしむることはない。●有善法 戒光既に輝き、眞に防非止

惡の状態に到れば、更に衆善奉行へと轉向さるべきは、人の心理の必然的傾向である。而して持戒の功德は、實に前節にいへるが如く、善法中の最上乘なる、禪定、智慧の解脱法を得しめるのである。●無淨戒諸善功德皆不得生 前句の意味

を反面より重ねて言つたもので、諸善功德は、唯だ淨戒を持つことによりてのみ生じ得らるゝ旨を、強く示されたのである。◎第一安穩功德住處。淨戒を持てば、善を生じ、惡を滅し、生死の苦を解脱することが出来る、これほど安全平穩な境界はない。これは、功徳の大なるものはない。由來、惡には不安が纏ひ、善には平安が伴ふこと必然であるが、善法中の最善法たる持戒の安穩功德は、眞に至すと謂ふべく、諸多の安穩功德中に於て、特り之を第一とされる所以である。

【講話】 此の一節は、「二、邪業を對治する法要」の結辭と見るべきもので、「是故」から「勿令毀缺」までは、前を承けて、持戒の大切なる意味を結び、「若人」云々から「有善法」までの十二字は、更に持戒の功徳利益を挙げ、「若無」から「不得生」に至る十二字は、破戒の不徳損失を示し、「是以」から以下の十六字は、重ねて持戒の利益大なる所以を示されたもので、要するに、戒徳、戒光を親切叮嚀に示され、必ず淨戒を持つべきことを、反覆勸説されたものである。

〔節要〕には、此の佛の勸説を、次の如く五勸の意義ありと釋明して居る。

(一) 自體を失はざることを勸む。

(二) 方便を捨てずして、能く善法あることを勸む。

(三) 諸過を遠離し、身語意業、常に功徳を集むることを勸む。

(四) 過患多き者は、三業の中に於て、一切時に功徳を生ぜずと知ることを勸む。

(五) 菩薩所修戒の中、是の如き得失あることを顯示す。

と、而して「補註」には

五勸ありと雖も、大意通じて上文を結ぶ、要は、安穩處多しと雖も、戒を第一と爲すことを示したるなり。

とあつて、此の一節は要するに、持戒の功徳最勝なる所以を示し、必ず之れを護持すべきことを、慫慂された結勸の御言葉である。

佛が戒の一字を讚嘆し、勸説されること、眞に至れりであるが、茲に或は疑を挾む者があつて言ふであらう。「此經に於て、斯程までに戒の一字を重く見られて居りながら、他の梵網經などに見える、殺、盜、姪、乃至謂ゆる十重禁戒の如きは、一も挙げずして、一般に輕戒と言はれて居る項目のみを戒められてゐるのは如何」と。道霈和尚の「指南」に曰ふ、「輕すら猶ほ遮止す、重は知んぬ可し」と。明快な一語、以つ

て此の疑問を解決して十分である。況して、此の經に戒められた諸條件は、何れも殺、盜、姪、妄等の重戒を犯すに至る媒とも爲るものではないか。例へば、酒は決して飲むなよ、と強く戒むるのは、酒の上では、つひ色情の罪にも陥る、或は人殺しをするやうな兇惡も敢てするやうになる、即ち禁酒の嚴戒は、荒姪、殺人等の大罪を未前に防止する所以であるが如き類である。その漸を防ぎ、微を杜々佛の深意、眞に貴きものあるを看取すべきである。兎角、凡人は小善小惡を輕んじて、禍害の測るべからざる結果を閑却するが、焉んぞ知らん、善惡は眞に一轉機、毫釐の差は實に天地懸隔に至るのである。而して、淨戒を持てば能く善法あり、若し淨戒無ければ諸善の功德、皆生ずることを得ず、戒の一字は實に善惡の分岐點を爲すものであり、しかも點滴の微も、つひに大器に充つるが如く、小罪を輕んずれば、結果は永劫生死に沈淪するの禍殃となり、小善も勤めて缺くることなければ、功德無量、第一安穩處たる大解脱の境界にも至る。たゞ心志轉向の動機如何に在る。持戒と破戒、一念の差、實に斯くの如くである。

クリブランドが米國大統領になつた時、同國の一監獄に於て、終身懲役刑に服

してゐた或る囚人が、仄かに之れを聞いて、非常な熱心な態度で、其事の實否を看守に質した。看守はクリブランドが大統領當選の眞實なる旨を告げ、且つ「お前は新大統領と、何か緣故でもあるのか」と訊ねた。すると其の囚人は、非常に恐縮しながら次のやうに答へた。

「實は、私はクリブランド氏は、同郷の子供友達です。幼少より仲好しでしたが、青年時代のこと、或る時私が、漸く覺えた酒色の道づれに、クリブランド氏を誘致し、共に或る青樓に上らうとしました。其の途中に某教會の門前を通りましたが、フト見ると會堂の門には、其の日の牧師説教の演題が掲げられて「罪の値は死なり」と大書してありました。何氣なくそれを見たクリブランド氏は、非常な驚きと怖れとに打たれたやうに「あゝ、僕は彼の標札の文字に良心を抉られるほどに感じた。僕は罪を懺悔せねばならぬ。僕は最早酒樓に足は向けられない」と言出しました。私は、牧師の演題など、何らの注意も惹きません。何だ馬鹿らしい、サア往かうと頻りに最初の目的地へと彼れを促しましたが、彼れは頑強に反對して、どうしても同意しませぬ、つひに喧嘩となつて、其の場で二人は絶交し、

彼は教會へと、私は酒樓へと、互に方角を別にして相別れました。相別れて既に何十年、私はそれから漸次墮落し、罪惡に罪惡を重ねて現在の淺ましい身となりました。」

と。看守は更にクリブランドの青年時代より、刻苦勤學して辯護士となり、市長となり、つひに大統領にまで進んだ經歷を、概説して聞かすと、彼の囚人は今更のやうに悔恨し、血涙混々として徒役場の艸を霑したといふ。是れは有名な話である。

みどりなる一つ草ぞと春は見し

秋は色々の花にぞありける

本來具有の佛性に異りはないが、一念忽起、無明煩惱に障へられて、六道輪廻に様々の業相を惹くが、本は實に一念の差である。一念、善に轉向すれば、小善と雖も、その延長は諸の善法を生じ、つひに最上乘の善法たる大解脱の安穩處に到ることが出來、此の反對に善に向はざれば、小罪の擴充、つひに永劫の苦界を招くことになる。眞に恐るべし、慎むべしである。此の深い意義を「持淨戒」と「無淨戒」と

の語を以て説破せられ、「勿令毀缺」と勸誡せられたのが、實に此の一節の佛意である。

二 諸苦を對治する法要

(一) 根心放逸の苦を對治す

〔上〕 根放逸の苦を對治す

汝等比丘、已能住戒。當制五根。勿令放逸。入於五欲。譬如牧牛之人、執杖視之。不令縱逸。犯人苗稼。若縱五根、非唯五欲。將無涯畔。不可制也。亦如惡馬。不以轡制。將當牽人墜於坑塹。如被劫害。苦止一

汝等比丘、已に能く戒に住す。當に五根を制して、放逸にして五欲に入らしむると勿るべし。譬へば牧牛の人の、杖を執りて之に視し、縱逸して、人の苗稼を犯さしめざるが如し。若し五根を縱にすれば、唯五欲のみならず、將に涯畔無くして、制す可らざるむとす。亦惡馬の轡を以て制せざれば、將當に人を牽いて坑塹に墜さんとするが如

世。五根賊禍。殃及累世。爲害甚重。不可不慎。是故智者。制而不隨。持之如賊。不令縱逸。假令縱之。皆亦不久。見其磨滅。

し。劫害を被るが如きも、苦一世に止まる。五根の賊禍は、殃累世に及ぶ、害を爲すこと甚だ重し。慎まざればある可からず。是の故に智者は、制して隨はず、之れを持すること、賊の如くにして縱逸ならしめず。假令之れを縱にすることも、皆亦久しからずして、其の磨滅を見む。

【字解】

●己能住戒。節要に「前を躡みて後を起す」の語とあつて、既に上來戒相戒徳を説き明かし、汝等比丘は能く戒に住するを得るが、徹底戒法護持の條件としては、●當制五根。云々の對治法を修めねばならぬ、と、後段の説法を起すのである。五根とは眼、耳、鼻、舌、身の五官をいふ。此の五のものは、視覺、聽覺、鼻覺、味覺、觸覺と、それ／＼識を生じて働く本であるから、根と名けたのである。●放逸。放蕩安逸で、何等抑制する所なく、勝手に振舞ふこと。●五欲。五根はそれぞれ色、聲、香、味、觸の容觀的事象を對境とし、之れを受け入れて執着の欲念を起す

が故に、之を五欲の境といふ。持戒清淨の生活を爲す者は、堅く此の五根を制し、五欲に入らしめてはならぬ。●牧牛之人。牛を飼養し使役する人。●縱逸。縱はホシイマ、逸はヌケル、又はノガレルと訓む字。●苗稼。田畑の作物の總稱。●無涯畔。涯畔はハテシのないこと、五根を抑制せざれば、牛の暴れ出し逸走して田畑を荒らし廻るやうに、五欲の境以上に、有らゆる罪惡を爲して、底止すべからざるに至る。●惡馬。人の五根に譬へたもの。●轡。戒法に譬へたもの。●坑塹。二字共に穴である。●劫害。劫はオビヤカス。害はソコナフ。(二本に害を賊に作る、意味に大差なし) ●累世。代々のことで、一世の反對であるが、未來永久にの意に見ればよい。●智者制而不隨。淨戒を持して正しき智慧に住する者は、如上の恐るべき五根の害惡を、明かに知るが故に、堅く抑制して縱逸ならしめない。●持之如賊。五根を制して能く保持すること、恰も賊を捉へて獄裡に繋ぐが如く、決して縱に五欲中に放たない。●假令縱逸。智者は決して、五根を縱逸ならしめないが、萬一之れ有りとしても、意。●不久見其磨滅。正智見の輝きにより、忽ち五欲を照破し、殆ど電光石火、刹那に之れを磨滅に歸せ

しむるであらう。

【講話】 上來、極力持戒の要を示し、佛徒の究極理想たる、解脱の境に撞入すべきことを勸説されたが、さて其の解脱を得るには、現在の諸苦を脱れなければならぬ。諸苦を脱れるには如何にすべきかといふに、大體先づ、(一)放逸、(二)多求、(三)懈怠。これらが苦を招く本となるものであるから、之れを對治せねばならぬと、其の法要を説かれるのが、これ以下の本文である。而して人を放逸に馳せしめるのは、五根と一心であるから之れを堅く制伏しなければならぬといふので、先づ根を制する法要を説かれたのが、此の一節である。

文相を一見すればわかる通り、此の節に於ては、三つの喩が用ひられてある。

第一喩は、牛を五根に喩へ、牧牛の人を比丘に喩へ、杖を攝念にたとへ、苗稼を三昧方便に喩へたものである。

第二喩は、惡馬を五根にたとへ、轡を戒に喩へ、坑埒を三惡道にたとへたものである。

第三喩は、劫賊を五根にたとへ、劫賊の害と、五根の害との大小輕重を、比較し教

誨せられたものである。

大意は、汝等比丘よ、汝等は既に能く持戒者たることを得た。是よりは當に勉めて、破戒者となつてはならぬ。氣儘勝手にして自制を失すると、忽ち破戒者となるから、よく戒慎防護せねばならぬ。戒慎防護の第一は、日日夜夜、我が身から離るゝことの出來ない五根を、徹頭徹尾抑制調伏して、之れを五欲の境に入らしめてはならぬ。

如何に五根を制するかに就て、先づ第一喩の施設が見られる。夫の牛飼が、杖を執つて是を牛に視し、以て氣儘勝手に、人の田畑に飛込み、作物を荒すが如き場合には、笞杖の苦痛、忽ち到るべきことを教へ、克くその命のまゝに従順ならしむるが如くに、比丘も亦戒を以て、五根を制し、縱逸にして、三昧、方便、諸善功德を犯さしめぬやうにせよと、卑近な見易き喩を引き來つて教誡せられたもので、第二の馬の喩、第三の劫賊の喩も同様之れに例して知るべきである。即ち吾々は戒法といふ轡を以て、五根の惡馬を制御しなくては、遂に如何なる恐ろしい深坑に、引込まれるか知れない。劫害の劫は、與へざるに取るといふ意味の字で、強盜、追剝の

類をいふのである。盜賊の被害は一時の難儀で済むが、五根の賊に脅かされる
と禍殃累世で、ワザハヒを蒙ること、世々代々、生れ變り死にかはるまで、惑業苦を
繰り返さねばならぬ。その害、その苦に至つては、到底同日の比論ではない。し
かも此の恐るべき五根の劫賊は、從晝至夜、如何なる場合にも我が身に付き纏ひ、
五欲の境は到る所に、如何なる場處にも充滿して誘惑の網を張つて居る。「慎ま
ずんばあるべからず」一通りの警戒では、克く之れを制伏することが出来ない。
唯だ持戒の眞實智慧者のみ、能く之れを制して隨はざる」ことが出来るのである、
といふのが此節の教意である。

五根と五欲のことは、字解に於て一應の解釋を施して置いたが、序に今少し詳
しい釋義を附けて置かう。

五根は五官のことで、之を佛教で五根と名けるのは、之が五識の作用を生ずる
根基であるからだとは、字解のところと言つた通りであるが、此の根に、扶塵根と
勝義根との差別が説かれてある。扶塵は塵を扶けると訓むが、塵はケガレの義
で、五塵即ち眼には色、耳には聲、鼻には香、舌には味、身には觸、この五つのものが、人

の本性を塵す種になるといふので、之れを五塵といふ。此の五塵を扶ける働き
をするのが五根であるが、先づ色塵を引き入れて心の本性を汚す扶けを爲すの
が、眼球である。此眼球は即ち扶塵根である。所が此の眼球は色塵を映するが、
色塵を深く心に引き入れる強い力を有つたものは、更にその奥に在る所の視神
經で、勝義根といふのは、此の視神經のことである。他の耳、鼻、舌、身も之れに準じ
て知られることである。

五欲といふのは、本文では、右の五塵、即ち色、聲、香、味、觸のたとするものが、直接の見
方で、この五つは五根の對境であるから、又これを五境ともいはれるのである。
此の五境に對して、五根を放逸にすれば、様々の欲を生じ、禍害極りなきに至る。
故に此の五つを直ちに五欲と稱せらるゝのである。

しかし、通常五欲の名目は、財、色、食、名、睡となつて居る。此の五の欲は、人間の本
能に發するもので、財欲とは有ゆる物質に對する所有本能。色は男女の色で、即
ち生殖本能。食は飲食物に對する欲、即ち生存本能。名はやゝ高等の欲に屬す
るが、矢張一の本能欲で、名譽欲である。睡は安逸若くは休養を欲する欲とでも

いふか、是れ亦一の本能より發するものと見るべきである。

五欲を、財色、食、名、睡と見るにせよ、又は色、聲、香、味、觸の五塵と見るにせよ、鬼に角之等の諸欲は、人の本能であつて、絶對的に之れを撲滅することは不可能なことであり、無意義なことである。唯だ克く之れを制して縱逸ならしめぬやうにするといふのが要旨でなければならぬ。如何様に制すべきかの法要は、本文所説の通り、牛馬を御するが如く、劫賊に對する防護の如くすべきである。

それから本文中の、惡馬の喩から思ひ出されるのは、「佛說馬有八態譬人經」に説かれた惡馬の八態である。序に抄録して置かう。

- 一には、羈韁(馬具)を解かんとすれば、直ちに車を掣いて走り出さんとするもの。
- 二には、車に駕すれば跳躑して人を喫まんとするもの。
- 三には、前足を舉げて、車を掣いて走らんとするもの。
- 四には、ともすれば車軫(横木)を傷める癖あるもの。
- 五には、人の如く立ち上り後躑して車を引くもの。
- 六には、常に道傍に寄り添うて邪行する癖あるもの。

七には、車を掣けば一概に走り出し、泥濁の地に至つて止まるもの。

八には、食物を與ふれば、熟視して之れを食せず、車を掣かしめんとすれば乍ら秣を食ひ始むるもの。

人にも亦之れと同じき八態あり。

一には、經を説くものあれば、乍ら耳を掩うて走り去らんとするもの。

二には、經を聞くも其意を知らず、其の語の趣向する所を知らずして、返つて怒り跳躑するもの。

三には、經を説く者あれば、便ち逆うて是れを聞くことを欲せざるもの。

四には、經を説くものあれば、便ち是れを罵詈するもの。

五には、經を説くものあれば、便ち座を立ちて去らんとするもの。

六には、經を説くものあれば、敢て之れを靜聽せず、或は側を見、或は他人と私話するもの。

七には、經を説く者あれば、徒に半途にして傍難を試み、若し返つて質せば唯だ黙して答ふ所なきもの。

八には、經を説く者あるも、敢て之れを聞くことを爲さず、かへつて多くの邪念を思ひ煩ひて、心を外に馳せ、死して惡道に入らんとするに當つて、始めて聞法を思ふもの。

所謂八態は以上の如きもので、此は同じく惡馬の喩へではあるが、本文の惡馬の例とは、喩への意味は全然異ふもので、本文の解釋に何の關係もないものゝやうであるが、しかし、末世の今日、恰も斯の如き八態を敢てする自稱佛教信者が、甚だ尠くないことは事實である。佛の遺誡、如何に徹懇親切であるとも、眞に信受奉行する所の正信者の態度がなければ、金言金句も、それこそ猫の前の小判ほどの價值もあるまい。聖經を拜し、佛説の義理を解了する者、更に能く佛陀の眞意を信受し、如法に奉行しなければならぬ、この警めの爲めに、右の八態の如きは頗る適切な好譬喩であると思ふ。

尙ほ此の節に就ては異説があつて、或る經本には、終りの「假令縱之皆亦不久見其磨滅」の十二字が無い。それは淨戒を護持して禪定智慧を生じた、所謂智者が、萬一にも五根を縦にするが如き道理がないから、此の十二字は蛇足であるとい

ふので、是れの無い方が正しいのだと言ふ。此の十二字が有つたとて、一向不都合はない、假説を設けて語に駄目を押しした結辭と見ればよいと思ふが、兎に角、一説として知つて置くがよからう。

〔下〕心放逸の苦を對治す

此五根者。心爲其主。是故汝等當能制心。心之可畏。甚於毒蛇惡獸怨賊。大火越逸。未足喩也。譬如有入手執蜜器。動轉輕躁。但觀於蜜。不見深坑。譬如狂象無鉤。猿猴得樹。騰躍踔躑。難可禁制。當急挫之。無令放逸。縱此心者。喪人

此の五根は、心を其の主と爲す。是の故に汝等當に能く心を制すべし。心の畏る可きこと、毒蛇、惡獸、怨賊よりも甚し、大火の越逸なるも、未だ喩とするに足らず。譬へば、人有りて手に蜜器を執り、動轉輕躁して、但だ蜜のみを見て、深坑を見ざるが如く、譬へば狂象の鉤無く、猿猴の樹を得て、騰躍踔躑して、禁制すべきこと難きが如し。當に急に之れを挫ぎて、放逸ならしむること無かるべし。此の心を縦にすれば人の善事を

善事。制之一處。無事不辨。是

頭うなふ之れを一處に制すれば、事として辨せ

故比丘。當勤精進。折伏汝心。

すといふことなし。是の故に比丘は、當に勤めて精進して、汝が心を折伏すべし。

【字解】

◎此五根者心爲其主

眼耳鼻舌身等の五根は、外界の五塵を受け入れ

る働きは爲すが、それは甚だ單純な働きに過ぎない。之れに對し取捨愛憎の了別を爲すは、心の働きである。佛教では、五根及び五根の働きを色法しきほふ（色は一切形あるものに名く）といひ、之れに對する了別の能力ある心の方を、心法と名けて居る。又五根の働きを一口に前五識と稱し、之れに對し、心の働きを第六意識と名ける。前節では、眼耳鼻舌身の五根（五識）之れに對する色聲香味觸の五境（五塵）であつたのが、是に於て更に意の一つを加へて、六根（六識）となり、對境に於て法の一身を加へて、六境（六塵）となるので、六根六識で、人間の心身兩面を總稱される譯である。◎當好制心 五根は受付のやうなもの、心はそれを整理し、若くは五根に命令する所の主宰者たる働きを爲す、五根の主たる者であるから、五根を制せんとならば、先づ心を制すべきであると、枝末より根本に突き入つた對治法である。

此の制心の二字に就て、雲棲大師は、事制と理制との二つに區別して、事制は、固く眼耳等の門を守り、五欲の境に走らざらしめるとであり、理制は、直ちに五塵の根も五欲の境も、本然空寂と觀じて、聊かも心念を動かさないのである。事制既に最も難しとする所、理制に至つては、達人の境界であるといふ風に解説して居る。◎毒蛇惡獸怨賊大火 これらは皆慘害の最も恐るべきもの、而も心を主とする五欲の害は、之等と比較にならぬほど、更に一、恐るべきであることを對比的にいうたもので、越逸は焦天の大火の貌を形容したものの。◎蜜器 蜜を盛つた器物。◎動轉輕躁 蜜を手にして、喜び浮かれて躁ぎ廻ると。◎不見深坑 蜜を得た嬉しさに、蜜にばかり氣を取られて、脚下を顧みず、恐ろしい深坑に轉落する如き愚をいふ。◎狂象無鈎 大象が一たび怒を發すれば、到底、人間の力でこれを制御することは困難である。況して狂象に鈎を施さずして放置した場合には、如何なる暴れ様をするか知れない。◎猿猴得樹 猿猴は平地に於ては、それほどの敏活さも見せないが、一たび樹を得れば、忽ち得意自由の活動を爲して手におへない。◎騰躍躑躅 騰はトビアガル、躍はオドル、此の二字は狂象にか

ゝる形容。蹕はノボル、躑はオドル、この二字は猿猴の方にかゝる形容。◎難可
 禁制。騰躍する狂象、躑躅する猿猴は、共に取り抑へ様がない。五根五欲を縦に
 する貌は之れと同様である。◎當急挫之無令放逸「節要に」之を挫ぐは其狂象、
 即ち心を抑へて、動くこと無き處に入るを示し「放逸ならしむること無き」は其の
 猿猴、即ち心を攝して、調伏聚に入るが故に——と解釋してある。狂象、猿猴の狂
 暴は、急に挫がねば、その害惡測るべからざるものあると同じく、心を制すること
 も、妄念微かに動き出した時、猛力を以て速かに對治すべきことをいふのである。
 ◎縱此心者喪人善事。前節に於て、持戒は諸善功德を生ずる所以を説かれたが、
 能く心を制せざることは、其の正反對で、心を主として五根を縦にすれば、破戒至
 らざるなき結果に墮落するのであるから、世間、出世間の有らゆる善事を喪失す
 るは當然である。◎制之一處無事不辦。前者は、心を縦にするより招く損失を
 言つたものであつたが、之れは、其の反對の、能く心を制するより受くる得益を言
 ふので、「一處に制するとは」即ち意根の一處を抑制し、脚下を照顧して常に心を粗
 動せしめざることを。能く心を制する者は、光を回し、念を歛め、志を用ふることを專

一であるから「事として辨せずといふことなく」何事も期望を成就し、安穩自在の
 境地に至り得られるのである。◎當勤精進折伏汝心。精進は六波羅蜜の一、精
 進は精勤、進は進趣、大なる奮發を以て、間斷なき努力を續けること、「唯識論」には「精進
 は勇悍を以て性と爲す」とあり「勇は畏るゝ所なく、悍は勞倦に堪ふるなり」と註し
 てある。折伏は、破折降伏で、前に言へる急に挫ぐことである。

【講話】 前節に於ては、専ら五根のこのみを説かれたが、此の節に於ては、更に
 深く入つて、五根の主宰たる心のことを説かれたもので、輕より重に及び、枝末よ
 り根本に進む手段である。それで先づ最初に「此五根は心を其の主と爲す」と大
 綱を擧げ、前節に於て示された五根の禍害は、畢竟、心即ち第六意識が主人公とな
 つて招く所であることを教へ、次でその心の如何に畏るべきかを、種々の譬喩を
 以て説き示されたので、入理の深談ではないが、丁寧親切、何人をも首肯せしめ、信
 服せしむる慈訓である。

第一に、毒蛇、惡獸、怨賊、大火の四つは、貪瞋癡の三毒それ／＼の害及び三毒等分
 の害に喩へたもので、此の心、忽然として瞋れば、恰も毒蛇の人を螫さんとするが

如く此の心一たび癡を起せば、惡獸の人を搏たんとするが如く、此の心一たび貪を生ずるときは、怨賊の人を劫掠するが如く、また貪瞋癡の三が等分に同時に起るときは、焦天の勢を以て燃え上がる、大火の越逸なるも、未だ以て喻ふるに足らざるほど、畏るべき禍害を來すものである。この三毒は、有らゆる罪過の本たるもので、三毒の火、一たび心上に失すれば、忽ち燎原の勢を逞うし、總ての善法功德を焼き亡ばすに至るとの示誨である。

次に「人有り手に蜜器を執りて云々は、百喻經にも見えて居る喩で、蜜を採ることを業とする者が、藪の中に蜜蜂の巢のあるを見附けたとき、嬉しさに動轉と心が動き、輕躁と身が落ちつかず、たゞ蜜蜂にばかり心を取られて、足許に恐ろしい深い坑のあることに、一向氣がつかない、實に危険極まる話である。前喩は意識の畏るべき毒性を明し、之れはその輕浮妄動の様子を示したものである。

それから更に、意識の甚だ抑制し難いことを示されて、次の狂象と猿猴との二喩を挙げたので、人若し無智にして心を縦にすれば、心は、唯だ五欲六塵の境に馳走し、幻滅の樂を追うて三途の苦を慮はず、涯てしもなく跳動して、甚だ控制し難

く、罪に罪を重ね、苦に苦を添へて、生死海中に頭出頭沒せねばならぬことを、切實に了會せしめられるのである。

昔、釋尊が祇樹精舎じゆしやうじやに大衆と共に居られたとき、呵提曇長者かだいどんといふが來詣して、教誨を受けんことを懇請した。時に釋尊は先づ、長者が如何なる職務に従事する身なるかを尋ねられた。長者は、曾て先王の世には調象師の職を奉じて居た旨を答へた。釋尊重ねて、調象の術は如何に、と尋ねられたので、長者は具に三種の方法をお答へした。

「先づ第一の方法は、剛鐵の鈎かぎを以て象の口を羈絆し、第二には日常の食口を減じて常に飢餓せしめ、第三には杖を以て嚴しく打つて、楚痛いたさを覺えしめるのでございます」

釋尊は、それを聞かれて、斯く致せば象は如何いたすか、とのお尋ねに、長者は、「斯様に鐵鈎を以て口を鈎かぎして置く時は、如何なる狂象にても、氣儘に身動きがなりませぬ故、次第に強暴なる所作を止める様になり、又食物を減じて置くときは、勢力次第に弱り、猛惡の行が出来なくなり、其の上しばしば鞭撻むちします

れば、恐怖して遂には柔順なる氣性に變つて参ります」

「然して其の象は如何にするか」

「斯様にして、始めて王の乗用に供せられ、戦時に際しても、命のまゝに自由に位役することが出来る立派な、有用の象となるのでございます」

「尙ほ此の外に調象の術はなきか」

「是れ以外には、別の方法もございませぬ」

「長者よ、調象の術に於て、左様に堪能なる長者の如きは、自身の心意も、いと易く制御することが出来よう」

釋尊が斯う改まつてお尋ねになつたに對し、長者は、其の眞意を解し得ずして、伏拜只管慈教を仰ぐのみであつた。釋尊は次のやうに開示せられた。

「我も亦三事を以て、一切人を調御して、自ら無爲(悟)の境に至らしむるのである。一には至誠を以て口業を調御し、二には慈貞を以て身の剛強を伏し、三には智慧を以て意の痴蓋を滅す。此の三事を以て一切を度脱し、三惡道を離れしめて、生死、憂悲、苦惱に遭はざらしむるのである」

と、長者は此の教説を得て、内情釋然、即座に悟の眼が開けた。此は「法句譬喻經」の所説であるが、吾々の心は誠に狂象の如く、一寸でも油斷をすれば、狂暴忽ち三毒の邪道に馳せ去る。佛所説の如く、身口意三業の上に、三事の鐵鉤を確と施し、善く之れを調御することを怠つてはならぬ。

猿猴の木を得れば、如何に手におへぬかは、甚だ見易きことで、其の制し難き意味は誰にもよく判る。「急に挫ぎて放逸ならしむること勿れ」心の狂象、意識の猿に對しては、不斷に氣を弛めず、抑遏を嚴にせねばならぬ。支那の傅太師に「猿猴心歌」といふがある。

由來心相本無形。 逐境如猿漫得名。

用意羈靡終莫測。 但能息念自念平。

記して自警の箴とすべきである。斯く譬喩を重ねて用ひ、心の畏るべきことを十分に明され、終りに「此心を縦にすれば」云々以下、心を制すると制せざるとの得失を對比的に示し、此の一節の結勸とせられたので、之れを一處に制すること、が最も肝要とする所、之れに向つて當に日夜勇猛精進すべきである。

「八大人覺經」に曰く

心は是れ惡の源、形は罪の藪なり。

僧璨大師の「信心銘」には曰く

一心生ぜざれば、萬法咎なし。

永嘉大師の「證道歌」には曰く

法財を損し、功德を滅するは、斯の心意識に由らざるはなし。是を以て禪門には心を了却す。頓に無生に入るは知見の力なり。

臨濟大師の「語錄」に曰ふ。

心動すれば疲勞す、冷氣を吸つて益なし。如かず、一念縁起無生にして、三昧權學の菩薩を超出せんには。

之等の語亦仔細に實究し、心識を鞭撻すべきである。

(二) 多求の苦を對治す

汝等比丘。受諸飲食。當如服

汝等比丘。諸の飲食を受くること、當に藥を服するが如くすべし。好きに於ても、惡

藥。於好於惡。勿生増減。趣得

しきに於ても、増減を生ずること勿れ。趣

支身。以除饑渴。如蜂採華。但

に身を支ふることを得て、以て饑渴を除け。

取其味。不損色香。比丘亦爾。

蜂の華に採るに、但だ其の味のみを取りて、色香を損せざるが如く、比丘も亦爾なり、人

受人供養。趣自除惱。無得多

の供養を受けて、趣に自ら惱を除け、多く求

求。壞其善心。譬如智者。籌量

めて、其の善心を壞ることを得ると無かれ。

牛力所堪多少。不令過分。以

譬へば智者の牛力の堪ふる所の多少を籌量して、分に過して以て其の力を竭さしめ

竭其力。

ざるが如し。

【字解】

◎受諸飲食。當如服藥。

飲食は以て饑渴を醫すれば足る、猶ほ藥の病を

治するが如きである。故に

◎於好於惡。勿生増減。

飲食に對しては、自己の好

むと好まざるによつて、取捨増減を爲すべきでない。

◎趣得支身。以除饑渴。

飲は渴を除き、食は饑を除くに在るものなれば、畢竟自己の身を支へ、生命を持續することが出來れば、その餘に多くを貪り求むる要はない。

◎蜂採華。但取其味。

不損色香。蜜蜂が花蜜を採るは、その味のみを取るものであつて決して花の色香を損せない。之れ譬喩である。◎比丘亦爾。蜜蜂は花蜜を採らざれば、身を支ふることが出来ない。比丘は飲食を他より受けざれば、その身を支ふることが出来ない。但し、其は蜂が花の色香を損せざるが如くすべきで、即ち◎受人供養趣自除惱。人とは佛敎を尊信する檀越で、比丘は常に法を施し、檀越より供養、即ち諸の物質的施與を受けるのであるが、供養を受けては僅かに、饑渴の苦惱を除くを以て限度とすべきで、◎無得多求壞其善心。例へば托鉢の場合に於て、己の身分相應に供養を受けて、自ら満足し、供養の量の少分なりとて、更に多くを乞ひ求め、以て供養者の善心を壞るやうなことがあつてはならぬ。多くを貪るは即ち蜂が花蜜のみを採らずして、花の色香を損する如きものである。◎籌量牛力所堪多少。牛は檀越に譬へたもの、即ち在俗信徒は、るれくの身分に相應した施しをするのであるから、比丘は宜しく信徒の身分を籌量して、物の多少を論せず、其の喜捨の善心を受くべきである。然らずして物の多きを貪り求むるが如きは、相手の善心を壞り、自他の功德を失ふものである。◎不令過分以竭其力

力強き牛も、其の物を負ふ所の力に限がある。限りなき重荷を負はせては、牛をして有効の力を出さしむることが出来ない。比丘が信徒の供養を受くることも、亦斯くの如くで、施主の身分不相應に多くを求めてはならぬ。

【講話】 この一節は、分外多量の飲食物を食することを誡められたものである。

前節に於て示された如く、比丘の本領は、清淨自活に在る。清淨に自活せんが爲めに、比丘は、所謂日中一食樹下一宿で、衣食住に於て絶対に執着を離れ、常に托鉢を以て信者の供養を受け、以て生命を持続し、專念に道法を修行する、是れ比丘たるもの、威儀作法である。故に多求多欲は、清淨自活の唯一の敵で、此の一節の眼目とするところ、實に此の多求の念を對治するに在るのである。

譬喩を用ふること三、最初には飲食に對すること、猶ほ藥を服するが如くせよとの喩、服藥の目的は病苦を治するに在れば、其の味の苦いの甘い、其の量の多いの少い、といふことは考へて居るべきでない。治病に必適の藥を、治病に適當なだけ服用すべきである如く、比丘の飲食物に於けるも、其の目的、法身の慧命を相續するに在つて、唯、饑渴の苦惱を除けば足るのであるから、好き嫌ひの故を

以て取捨増減を生ずべきでない。

同じ意味を更に説明せんが爲に、第二の蜜蜂の喩を擧げ、丁寧反説されるので、蜂は比丘に、蜜は飲食に、花は供養に、色香は檀信徒の善心に喩へたもの、即ち蜂の色香を損せずして蜜のみを採つて満足するが如く、比丘も檀信徒の善心を受けて満足し、決して物の多きを貪り求めてはならぬ。多く求むるは、他の善心を壊る所以で、同時に自己の清淨生活を汚し、道業を妨ぐることになるとの教意である。

第三の牛の喩は、前喩の「善心を壊ることを得ること勿れ」の意味を、更に強めて説かれたものと見られる。即ち牛力は、檀信徒が供養の負擔力に喩へたもので、相手の身分相應の供養を受け、決して過分の量を貪り求めてはならぬ。分に過ぎた要求は、無理な力を牛に求めて、牛をして堪へざらしむるが如く、供養の善心を壊る所以となる、この意味に解せられるのである。

此の第三の喩の解釋には、異説があつて、牛を供養者と見ずして、比丘自身に喩へたものとし、己の徳行を省み、供養に對する資格を自ら付つて、之れに應すべき

である、といふ意味に取つて居るのが、古來多くの義釋に見えて居る。しかし文相から見て、特に「所堪」の二字に注意すれば、前説の方が妥當のやうに思はれる。何れにしても、多求を戒め、善心を壊らず、供養者、被供養者、共に清淨功德にあづかるべき歸結に至つては異りはない。

要するに、比丘は清淨自活を營み、轉迷開悟の理想境に達すべく、辨道精進して餘念あるべきでない。飲食を攝るのは、此の窮極目的を達するに就ての、身心を持續せんが爲めで、一掬の飲、一椀の食も、總て成道の爲めの故である。徒に嗜むに驅られ、苟も貪り求むる念あつて可からうか。古來禪宗叢林に行はれて居る食時五觀の偈に曰く

- 一には、功の多少を計り、彼の來處を量る。
- 二には、己が徳行の全缺を付つて供に應ず。
- 三には、心を防ぎ過を離るゝことは、貪等を宗とす。
- 四には、正に良薬を事とするは、形枯を療せんが爲なり。
- 五には、成道の爲の故に、今此の食を受く。

と、又同じく誓願の偈に曰く

一口爲斷一切惡。二口爲修一切善。三口爲度諸衆生。皆共成佛道。

と、禪の修行僧は、食に向つて必ず斯く唱へ終つて、それから箸を取ることになつて居る。眞に斯くの如き觀法を爲して食に向ふならば、意地穢き多求の念など微塵も生ずる筈がない。道元禪師は「食等、法等、一切皆等」と言はれ「等」の一字を提起して一法窮盡の理を示し、食時に於ては、食の上に佛法の全態を現じ、食即法、法即食たる禪の第一義を説かれて居るが、佛道成就の爲に攝る飲食であれば、飲食に對する佛徒の態度は、當に斯くの如くあつて、徹底眞實なりといふべきである。昔、支那の百丈大智禪師は、八十の頽齡に至つて、數百の學徒と共に、運水搬柴、總ての作務を同じくせられた。學徒は老僧の勞力を劬り、身の健康を氣づかつて或日の作務に老僧が用ふべき鋏を隠して、一日の休養を餘儀なくせしめた。ところが食時に至つて、老僧は絶対に箸を取りあげない。斯くすること三日に及び、學徒達は大に恐懼して、隠せる鋏を取り出し、伏拜して老僧に謝した。其の時の百丈禪師の垂示に曰く

一日作さざれば、一日食はず。

と、禪宗叢林の修行は、行住坐臥すべて禪であり、水を汲むも、地を鋤くも、悉く佛法である。とせられるので、一日の作務を廢するのは、即ち一口の辨道を廢する所以、辨道の爲め以外に飲食する謂はれがない。故に「一日作さざれば一日食はず」といふ、極めて嚴肅主義的垂示であるが、嚴肅な一語、此の一節の教意と合せて反覆咀嚼せば、味ひ盡きざるものがあらう。

(三) 懈怠睡眠の苦を對治す

汝等比丘。晝則勤心修習善法。無令失時。初夜後夜。亦勿有廢。中夜誦經。以自消息。無以睡眠因緣。令一生空過。無所得也。當念無常之火。燒諸世間。早求自度。勿睡眠也。諸

汝等比丘、晝は則ち勤心に善法を修習して時を失せしむること無かれ。初夜にも後夜にも、亦廢すること有ると勿れ。中夜には經を誦して以て自ら消息せよ。睡眠の因縁を以て、一生空しく過して、所得無からしむること無かれ。當に無常の火の、諸の世間を燒くことを念じて、早く自度を求む

煩惱賊常伺殺人。甚於怨家。安可睡眠。不自警寤。煩惱毒蛇。睡在汝心。譬如黑蛇在汝室。睡當以持戒之鉤。早摒除之。睡蛇既出。乃可安眠。不出而眠。是無慚人。慚耻之服。於諸莊嚴。最爲第一。慚如鐵鉤。能制人非法。是故常常慚耻。勿得暫替。若離慚耻。則失諸功德。有愧之人。則有善法。若無愧者。與諸禽獸。無相異也。

べし。睡眠すること勿れ。諸の煩惱の賊常に伺つて人を殺すことは怨家よりも甚し。安んぞ睡眠して自ら警寤せざるべき。煩惱の毒蛇睡りて汝が心に在り、譬へば黒蛇の汝が室に在つて睡るが如し。當に持戒の鉤を以て早く之を摒除すべし。睡蛇既に出でなば、乃ち安眠すべし。出でざるに而も眠るは、是れ無慚の人なり。慚耻の服は諸の莊嚴に於て、最も第一なりとす。慚は鐵鉤の如く、能く人の非法を制す。是の故に常に當に慚耻すべし、暫くも替つることを得ること勿れ。若し慚耻を離るれば、則ち諸の功德を失ふ。有愧の人は、則ち善法あり、若し無愧の者は、諸の禽獸と相異

ること無けむ。

【字解】 ●勤心 精進心、即ち勉強心のこと。 ●修習 修業學習。 ●善法 比丘が必修すべき四諦の法。 ●無令失時 貴重之光陰を惜み、寸時も空費するなどの誡め。 ●初夜、後夜、中夜 次の圖示によつて知悉せよ。

晝				夜			
酉	申	未	午	寅	子	亥	戌
六ッ	七ッ	八ッ	九ッ	八ッ	九ッ	四ッ	五ッ
六時	四時	午後二時	十二時	午前二時	十二時	二更	午後八時
				四更		初更	
				後夜	中夜	初夜	

◎消息 古人の註に「消は盡なり、息は生なり」とあり、又加ふべきは加へ、減すべきは減するを消息と謂ふ」とも釋してある。それ〴〵勤むべきは勤め、休めるべき

は休めよといふほどの意味。◎當念無常。火燒諸世間。無常は遷流の義、萬物高象變化して常なき、宇宙の事實である。之れに龜と細の二様の見方があつて、龜には一期の無常といひ、細には刹那の無常といふ。人間が生れて死に至る、此の生死の大變化が一期の無常である。また吾々の身心は、念起念滅、電光石火の裡にも、間斷なく變移してゆく、之が即ち刹那の無常である。世間といふにも二種あつて、一には器世間、二には有情世間、器世間とは依報の國土、依られる方で有情世間とは正報の衆生、依る方である。凡そ生ずる物は必ず滅することあるは、自然の數理、吾々の國土も成壞相摩して、四時變異する。而して國土に依つて住する衆生に在つては、刹那々に生滅を繰返し、一波は一波を追うて移るが如く、生滅に繼ぐに生滅を以てし、つひに滅盡し去る。實に無常の火は、依報正報諸の世間を悉く燒きつゝあるものである。◎早求自度。無常迅速斯くの如き世間に處する身は、一刻も安閑として居られない。早く禪定智慧の善法を修習し、生死無常の此岸より、涅槃常住の彼岸に度り到らんことを努むべきである。◎諸煩惱賊常伺殺人。煩惱の字義は、煩悶苦惱と解されるが、詳しくは、唯識百法の中に

六煩惱、二十の隨煩惱など説かれてあつて、吾々の迷の本を爲すものに名けた名稱である。分類すれば無数の煩惱があるが、之が根本となるものは、貪瞋痴の三毒である。諸の煩惱は常に吾々の心内に在つて、本來法性の慧命を害するものであるから、之れを賊に喩へたのである。◎甚於怨家。怨家とは吾に怨みを含みて害心を抱き、常に吾が隙を狙ふ者、心内の煩惱は之よりも更に油斷のならぬ、恐ろしいものである。◎警寤。寤は覺の義、サトル、サメルといふ意味である。或は之を普通の借用で、悟と同義と見てもよい。常に自ら警戒覺醒して用心するの警寤である。◎煩惱毒蛇睡在汝心。前に賊に喩へた煩惱を、更に毒蛇に喩へて其の恐るべきをいふ。◎黑虺。虺は通常守宮といふ字であるが、茲では矢張り毒蛇の如き害虫のこと。◎持戒之鉤。鉤は鐵曲也とあつて、鐵で作つたカギ、之を以て毒蛇を除く。煩惱の毒蛇を除き去るには、持戒の鉤を用ひねばならぬ。◎摒除。シリゾク、ノゾク。◎無慚人。耻知らずの人。◎慚耻之服。慚耻を衣服に喩ふ。慚も恥も、心にハツカシク思ふ意味の字。之に對して愧の字は外にハヅル意。「涅槃經梵行品」に「慚は内に自ら羞恥し、愧は發露して人に向ふ」

と見えて居る。◎莊嚴 莊裝嚴飾の義即ち飾り装ふこと。内に慚恥の念を離れざるは猶ほ盛装の衣服を身に着けたやうなもの、若し慚恥なければ、恰も赤裸の醜きが如きものである。服の喻へから莊嚴といふ縁語を用ひた、文の修飾である。◎勿得暫替 替は廢なりと註してあつて、スツルと訓む、恥を思ふことを寸時も放棄してはならぬ。◎與諸禽獸無相異也 無慚愧の者を禽獸と同じであるといふ。痛烈な教誡である。

【講話】 此の一節、總て一百八十有七字、其要は、懈怠と睡眠とを誡め、慚恥と精進とを勸説せられ、修行專一なるべきことを策勵せられたもので、佛陀の如何に、勇猛精進なりしかと、一讀して看取せられる。懈怠にして惰眠を貪れば、人は昏迷に陥るばかりである。反對に覺醒の人は精神常に緊張して、明慧となる。佛陀は、飽くまで昏迷を去つて、明慧に就くことを、親ら勤め、亦弟子達に勧められたのである。

此の一節、おのづから三小節に分たれる。「汝等比丘」より「令一生空過無所得也」までを第一小節とし、徒らに惰眠して、光陰を空しく過すなからんことを戒められたものである。元來、睡眠は眼の食なりなど言つて、人は眠りによつて疲勞を休め、次の新たなる精力を挽回することが出来る、恰も口に於ける食の如く、人間の生存上、重要なもので、何人も絶対に之れを禁するわけにはゆかない。否、適當の睡眠は、吾々の生活に極めて有意義な、必須條件たるものである。但、前の飲食に於けると同じく、之れを貪るといふに至つて、所謂五欲の一に擧げられるほど、それは、強く戒むべき、修道の障礙物となるのである。

睡眠に三通りあるとが説かれてある。一は食に依つて起るもの、俗にいふ、腹の皮が突つ張れば、目の皮が緩むの類、食ひ過ぎると眠くなる。二には時節に依つて起るもの、春眠曉を覺えず、春さきから、眞夏の日中など、兎角眠氣を催し易い。三には懈怠の心より起る。懶惰安逸で、精神の緊張味を缺く場合に、誰も睡眠を催す。而して前二者は、佛でも羅漢でも免れぬもので、道の爲めに健康を保持せねばならぬ場合には、適度の熟睡を以て、身心に一定の休養を要するが、第三の懈怠心より惰眠を貪るといふは、絶対に禁制しなければならぬ。

【論語】に孔子の弟子、宰子が晝寢をしたに對し、孔子が「朽木は彫すべからず」と叱責

された鋭い語は、有名であるが、聖者の人物を鍛成せられる手段は東西一軌で「楞嚴經」にも、佛陀の痛烈な教導ぶりが見えて居る。

佛の十大弟子の一人に、天眼第一を以て稱せられる阿那律尊者といふがあるが、此の人は如何なる前世の宿業にや、一生懸命修行する精神は有りながら、晝夜とも睡魔に襲はれて、眠さへあれば昏々として眠つて居る。佛が憐んで或時、強く叱責せられた。「螺蛤は一睡千年といふが、お前は螺蛤の類である」と、阿那律は此の一語に、ひどく鞭撻され、大に發奮した。「あゝ自分は勝れた因縁によつて、今斯く佛弟子となることを得ながら、日夜睡眠の因縁に囚はれて、心のまゝに佛道修行が出来ぬとは、何といふ情けないことであらう」と、七晝夜悲泣して、一心に正法を念じたが、其の爲め終に兩眼は失明してしまつた。而も肉眼はつぶれたが、同時に心眼の開けた羅漢果を得て、天眼通を得たといふ。

要するに睡眠は人を昏沈煩惱に陥らしむるものであり、煩惱は正しき善法を害する賊であるから、懈怠惰眠は修道者に在つて、強く警めねばならぬ。

第二小節は「當念無常之火」より「不出而眠は無慚人」まで、此中には、無常と煩惱と

持戒の三法。火と賊と蛇と鈎の四喩が説かれてある。字義、文意は字解に於て既に明かで、更に講辯の要もないが「雜譬喩經」の中に、此の本文と合せ味ふべき適切な聖話が出て居るから、序に擧げて置かう。

昔、或道士が市中に於て修業して居たが、どうも喧雜でならぬので、山奥の閑靜な處へ往つて、坐禪觀法をすることにした。所が山中には蝮蝎が澤山棲んで居るので、道士は大樹の下に高牀を設けて、その上に坐禪してゐた。

かくて、愈禪定にかゝつたが、夜中になると、睡氣がさして來て、如何にしても制し切れない。この有様を觀た一人の天人が、氣の毒に思つて、さうかして醒ましてやらうと、先づ空中に於てカラ／＼と高笑ひをして聞かした。それでも道士は眼を醒まさぬので、天人は「おい／＼、その道人よ、大きな蝮蝎が這ひ寄つたぞ」と叫んだ。之には道士も喫驚して目を開き、遽て、火を點じて四邊を索ねて見た。が蝮蝎の影も見えない。やれ／＼と安心して坐禪にかゝると、忽ち又昏々として睡つてしまふ。と、又天人が、それ蝮蝎がと呼ぶ。喫驚してまた目を醒まし、探して見ても何も居ない。斯くの如きこと再三に及んで、道士は遂に立腹し

苟も天人どもあらうものが、虚言を吐くといふことがあるかと詰責した。天人は之を聞くと、何で虚言を吐かうぞ。お前さんの索ねやうがわるいのぢや。蝮蝎は身外に居るのではない、お前さんの身の内に、一匹ならず、二匹ならず、三匹四匹も蟠まつて、凄い鎌首を立て、居るではないか、と警告を與へた。道士は天人の言葉に猛省一番し、銳意内觀の工夫を凝して見ると、如何にも恐ろしい蝮蝎が、四匹までも身内に居た。即ち吾が身の四大は五陰六衰おんの爲めに沈没せられて、無數劫以來、今に至るまで、脱却することが出來ず、縦晝至夜、之が爲めに脅かされて居ることを覺り、茲に四諦の法を諒解し、つひに阿羅漢果を證得したといふ。

此の聖話は「煩惱の毒蛇、睡つて汝が心に在り、譬へば黒蛇の汝が室に在つて睡るが如し」との本文の義を、一層徹底的に明かした、具體的説示である謂ふことが出来る。

次の「慚恥之服」以下が、即ち第三小節の文で、慚恥は猶ほ衣服の如く、常に身から放してはならぬと第一喩を用ひ、更に「慚は鐵鉤の如し」と第二喩を引いた。前節

に狂象を制するに鉤を以てすると言へるが如く、慚恥を以て鉤とすれば、人の非法は克く之を制する事が出來るとを示し、比丘は常に當に慚恥して、暫くも廢棄してはならぬことを教へ、最後に無慚無愧の者に、諸善功德を失し、其の憐むべきこと、禽獸に等しと、第三譬を以て、反語的に慚恥の力と徳とを説いて、此の一節を結ばれて居る。要は、佛道修證に一大障礙たる所の懈怠、睡眠を嚴に戒め、懈怠睡眠を除く方法として、慚恥の法を授けられたものである。

往昔、佛陀が多くの教徒を隨へて遊行して居られると、途中で三人の醉漢に出遇つた。三人の中、一人は佛の姿を見るや否や、走つて叢の中へ身を隠した。殘る二人の中、一人は大道の真中に胡坐こざをかいて、くだらないことを口走り、前後不覺の無狀を爲して、たわいがなかつた。最後の一人は、立ち上つて大音聲に、おれは何も酒を盗んで飲んだのでないから、逃げたり隠れたりするには及ばないこと叫喚わめいて、千鳥足で跳ね狂つてゐた。

佛陀は、近侍の阿難尊者を顧みて斯う言はれた。先に逃げて叢の中へ身を隠した者は、猶ほ罪を自覺する所があり、我を見て慚愧し恐るゝ所があつたもので

彼は當來彌勒佛の時に、因縁成熟して悟を得るであらう。次なる者は、未來千佛に見えて後、始めて得道の者たるであらう。而して最後の者に至つては、到底成佛の縁は無からうと。

これは「舊雜譬喻經」に見えて居る聖話であるが、實に慚愧は修養の第一階で、慚愧より懺悔に至り、懺悔より淨信を生ずる。慚愧の心、即ち入道の門と謂ふことが出来る。世に所謂「慚知らず」は、放辟邪私、至らざるなく、狂暴恣惡、底止する所を知らざるに至るであらう。能く私慾を抑へ、妄念を制し、清高の心操を持することを得るもの、一に衷心一片の慚愧心存するが爲めである。若し是れ無くば眞に他の禽獸と何ら撰ぶ所なき、淺ましい身に墮落するものと謂はねばならぬ。

〔出曜經〕に

慚ぢざれば、還つて慚ぢ、慚づれば還つて慚ぢず。畏れざれば、還つて畏れを現じ、畏るれば還つて不畏を現す。

とあるは大に味ふべき金句、「涅槃經」に

無慚無愧は、飛禽走獸と相異なること無し。

とあるは、本文の末句と全く同唱同義で、以て自警の箴とするに足る者である。

世の中を恥ぢぬ人こそ耻となれ

耻づる人には耻ぞすくなき (讀人不知)

三 煩惱を對治する法要

(一) 瞋恚の煩惱を對治す

汝等比丘。若有人來。節節支解。當自攝心。無令瞋恨。亦當護口。勿出惡言。若縱恚心。則自妨道。失功德利。忍之爲德。持戒苦行。所不能及。能行忍者。乃可名爲有力大人。若其

汝等比丘、若し人有り、來りて節節に支解するとも、當に自ら心を攝めて、瞋恨せしむること無れ。亦當に口を護りて惡言を出すこと勿れ。若し恚心を縱にすれば、則ち自ら道を妨げ、功德の利を失す。忍の徳たること、持戒苦行も、及ぶこと能はざる所なり。能く忍を行する者は、乃ち名けて有力の大人と爲す可し。若し其れ惡罵の毒を歡喜

不能歡喜忍受。惡罵之毒。如_レ飲甘露者。不_レ名_二入道智慧人_一也。所以者何。瞋恚之害。則破_二諸善法。壞_二好名聞。今世後世。人不_レ喜見。當知瞋心。甚_二於猛火。常當防護。無_レ令得_レ入。劫功德賊。無_レ過_二瞋恚。白衣受欲非_二行道。無_レ法自制。瞋猶可_レ恕。出家行道無欲之人。而懷_二瞋恚。甚不可也。譬如清冷雲中。霹靂起_レ火。非_二所應_一也。

忍受すること、甘露を飲むが如くすること能はざる者は、入道智慧の人と名けざるなり。所以は何。瞋恚の害は、則ち諸の善法を破り好名聞を壞る。今世後世人見んことを喜はず。當に知るべし、瞋心は猛火よりも甚しきことを。常に當に防護して、入ることを得しむること無かるべし。功德を劫むる賊は、瞋恚に過ぎたるは無し。白衣は受欲、行道の人に非ず。法の自ら制するもの無きすら、瞋猶ほ恕む可し。出家行道無欲の人にして、而も瞋恚を懷くは、甚だ不可なり。譬へば清冷たる雲の中に霹靂の火を起すは、所應に非ざるが如し。

【字解】 ●節●支●解 ●節々はフシク、支は枝の字と同義。こゝでは四肢のこと、

解は切解。即ち四肢五體を一寸試しに切り裂くこと。●自攝心 克く堪忍し辛抱すること、此の肉體は如何に損せらるゝとも、道念は斷じて損せない。●無令瞋恨 過去の因縁と觀じて毫もイカリ、ウラムことをするなどの意。令の字は自分の心に令するので、生の字に作り替へて見ればよくわかる。●護口勿出 惡言 心を攝めずして、瞋り恨めば、必ず口に惡言を出して罵る。内に瞋恨を制するは、即ち外に惡言を禁ずる所以である。●縱恚心 心に瞋恨あれば、口に惡言を出す、それが直に恚心を縦にするといふもの、瞋も恚と同じくイカリと訓む。●自妨道失功德利 瞋に對するに瞋を以てするは、暴に代ふるに暴を以てするもの、畢竟、自利利他共に失ふもので、道行を妨ぐることも大なるものである。●忍之爲德 俗に謂ふならぬ堪忍、するが堪忍、忍ぶ能はざるを能く忍ぶ、德の大なるもので、忍即ち德である。●持戒苦行所不能及 戒の德は既に初に説かれた通り、大なるものであるが、今は持戒苦行も及ばぬ所であるといふ、忍の德を讚歎する極語である。持戒の者、或は忍に於て全からざるあらんも、忍を行する者は必ず持戒者たり得る。忍の德の大なる所以である。●有力大人 忍は人の守り

難きもの守り難きを克く守る、最大の力を要する。大なる力の所有者なるが故に、即ち大人である。大人であるが故に即ち有力の人である。◎歡喜忍受惡罵之毒如飲甘露。管に堪へ忍ぶのみならず、更に他の辱しめに對し、歡喜の念を起すまでにならねばならぬ。即ち惡罵を毒と形容し、此の毒を甘受すること、恰も甘露の妙藥を得たるが如く、歡喜し忍受するに至つて、忍辱の行極まれりと謂ふべきである。然らざれば、◎不名入道智慧人也。淨源師の曰く「甘露は是れ諸天長生の藥、忍力既に成ずるときは、法身を益し、慧命を延ぶ。故に惡罵を忍受するを以て甘露を飲むに喩ふ。彼の辱しめに由らすんば、我が忍を顯はすに由なし」と。持戒苦行も及ばざる、道の極致たる忍を行するは、眞實入道者の最も希ふ所従つて忍を行する對境たる惡罵の毒は、寧ろ歡んで受くべき甘露でなければならぬ。能く此に至つてこそ、眞に忍力成就の、入道智慧者と謂ふべきである。◎瞋恚之害則破諸善法。瞋恚は忍徳の正反對、忍の徳の大なると反比例して、其害の大なるは自明の理である。善法は、比丘の正に修むべき四諦の法及び他の總ての善法である。◎壞好名聞。他人の爲めに惡名を流布せられること。◎

今世後世人不喜見。現在も將來も、いつの世何れの人か、瞋恚の者と相見ること喜び希はう。嗔りの形貌は實に見られたものでない。◎當知瞋心甚於猛火。嗔りの害の甚だ恐るべきを猛火に喩ふ。嗔りの火は實に諸の善法を悉く焼き盡すものである。◎常當防護無令得入。馬鳴菩薩の「遺教論」に曰く「自らの善法を護ること火を防ぐが如くす」とある。◎劫功德賊無過瞋恚。同論に「利他の功德を護ること賊を防ぐが如くす」と註釋してある。前に瞋恚を猛火に喩へ、今復た之を賊に喩へて、重ねて其の害の甚しきを示すのである。◎白衣。印度の風俗として在家の者は白い衣服を着け、出家すれば染衣といつて、即ち色のついた袈裟をかける。白衣は即ち在家の人の代名詞である。今日の日本の風俗は此の正反對で、僧侶は多く白衣を着、在家の者が黒つばいものを着て居る。◎受欲非行人。在俗の者は、愛欲利欲の裡に生活するもので、出家沙門の様な清淨自活の佛道を行するものでない、即ち非行道の人である。◎無法自制瞋猶可怒。在俗の者は、出家の人の如く、戒法を持ち、八正道を行するといふ、所謂修業の法とて定まれるはなく、情を抑へ欲を禁ずるといふ、やかましい掟はないが、それでも

猶ほ相手の怒りに對しては、機々になだめ和らげて、自他の瞋りを鎮めるやうにする。瞋猶怒の三字の解釋には今一つの見方をしたのもある。即ち、在家の人は、特に嗔りを制すべき戒法とてないから、在家の者の瞋りは深く尤むるに足らぬ、猶ほ恕すべきだ、といふ意味に解するのである。しかし、前の説に従つて、嗔りは在家の者でも悪いことゝして居る、といふ意味に見た方が、次の句との對照上、妥當であらうと思ふ。◎出家行道無欲人。前句と對比して、出家の人の瞋りを戒めるので、此の句の上に「況んや」の字を加へて見ると、意味が強く、明かになる。◎而懷瞋恚甚不可也。受欲非行道の人と、默許されて居る在家すら、猶ほ瞋りを悪い事とするに、況して貪瞋痴の三毒を滅し、戒定慧の三學を修むる、所謂行道無欲の出家の身にして、瞋恚を懷くことの不可なるは、言ふまでもないことである。◎譬如清冷雲中霹靂起火非所應也。恰も清く澄み渡つた青天白日の空に、遽かに雷電の轟き起る様なものである、と譬喩一番して、ろのあるまじき所業なることを誡められたのである。清冷の雲は、持戒無欲、飽くまで清淨なるべき比丘に喩へ、霹靂、雷の急激なるものに、瞋恚の煩惱の烈しき姿に喩へたもの、所應に非ず

とは、甚だ相應せぬことであるとの意である。

【講話】 此の一節は、忍辱の徳を讚歎し、瞋恚の害の恐るべきことを教説せられたのであるが、文おのづから四小節に分たれる。一には身口意の三業を護らしめ、二には忍辱の勝力を讚し、三には瞋恚の重患たることを誡め、四には對比舉げ來つて、黑白非宜を較べ顯はされてある。

「汝等比丘」から「失功德利」までが首めの一小節、乃ち、たとひ節々支解と、此の身を一寸試めしに切り苛まれても、心を攝めて瞋恨してはならぬ、とあるは、身意の二業を戒められたもので、亦當に口を護つて悪言を出すこと勿れとあるは、口業の戒めで、若し此の三業を護らずして、此の身に着し、意を縦にし、悪言粗語を發して他人に加ふる時は、自ら勝れた功德の利を失し、化他の利益を滅却することになると、此の冒頭の一小節に於て、先づ峻烈に、瞋恚を戒め、忍辱を行すべきことを説き示されたものである。

昔釋尊の弟子に、羅雲尊者といふがあつた。此の人、未だ得道せざるとき、心甚だ兪暴にして、常に悪言を出し、自他の道業を妨ぐるが多かつた。釋尊は、彼

れを賢提精舎に籠居せしめ、嚴に口の四道(兩舌、惡口、妄語、綺語)を護念せしめ、絶えず教導せられてゐた。

或る時も、釋尊は強く誡めて、次のやうに説かれた。

「羅雲よ、汝は勝縁によつて、今沙門の身となる。雖も、常に身口意を攝めず、龍言惡語を出す爲に、聖賢は少しも汝を愛護したまはず、汝の如きは、死して三途に墮し、永劫苦惱無量であらう」と、羅雲は之を聽いて、身の置き所もなき程に慚愧し、恐怖し、佛足を禮して救ひを希ふのであつた。釋尊は、爲めに戰象の話を擧げて教誨せられた。

「昔國王あつて一大象を畜うて居た。王嘗て軍を起し、逆國を伐たんと思はれ、彼の大象を引き出して、身に鐵の鎧を被らしめ、兩牙には雙矛を繋ぎ、兩耳には二劍をつけ、四脚には曲刃を縛し、鐵搥を其の尾に緊縛して、用意おさく周到を極めた。しかし其の鼻だけは厚く保護して、少しも自由に使用出來ぬやうにした、其は象の鼻、甚だ軟かにして、一度箭に中ると、乍ち斃されるからである。

かくして戰鬪劇烈を極め、兩軍入り亂れて戰ふに至り、大象は非常に猛惡な元氣を出し、頻りに鼻を出して、劍戟を求めんとしたが、斷じて之れを與へなかつた、之れに依つて此の大象は、敵箭に急所を痛められることなく、他の全身につけた谷武器を以て、思ふ存分に敵を惱まし、能く大功を樹て、しかも其の身を完うして凱旋することが出來た。

「羅雲よ、人の口を守ることを、猶ほ戰象の鼻を守るが如くすべきであるぞ、口過を犯さんか、大象の急所を射られて、忽ち斃るゝが如く、忽ち三惡道に墮在せねばならぬぞ」

と、懇切の開示によつて、羅雲尊者は、迷霧漸く散じ、感激自奮したが、やがて阿羅漢果を證得したと、法句譬喻經に見えて居る。

「口は是れ禍門」とは古徳の金訓、世諺にも、物も言ひやうで角が立つといふ。一言以つて身を亡ぼし、國を傾けた事例も、古今東西に多くある。口を護つて惡言を出す勿れ、口禍の怖るべきことを忘れてはならない。口を護らんと欲するもの先づ心を攝めて、瞋りを密閉すべし、而してたとひ節々支解の慘害に遭ふとも致して瞋恨することなきまで、克く忍辱を保たねばならぬ。是に至つて、眞に身口

意三業を守ること徹せりと謂ふべきである。

次の第二小節は「忍之爲徳」より「不名入道智慧人」までの文で、忍辱の徳を讚歎して、忍を行する者は有力の大人と爲すと極言し、而して如何に忍を行じ、瞋恚を除くべきかの方法を教へられてある。

忍といふにも、三通りあることが説かれてある。一には耐怨害の忍といつて怨害を耐へる、即ち我に怨み悪みを懐いて、様々の惱害を加ふる者ありとも、其の苦を忍耐して、報復の心を懐かない。二には安受苦の忍、これは順逆の二境に處して、安然として一念を動かさず、得意失意共に能く忍ぶのである。三には諦察法の忍、これは更に精神的根本的の忍法で、前の如き忍境に於て、主觀、客觀共に眞空無我なる道理を諦かに悟るので、害を加へる者、害を受ける者などいふ差別もない、實は忍不忍を超越して居るものである。斯くの如き無我の大忍に住して始めて前小節にいへる如き、節々支解にも耐へられるのである。

藕益大師は釋して曰つて居る。

我心を以て持戒するものは、報僅に人天に在り。無我を以て忍を行すれば

即ち出世の大道を成す。

と、是れ忍の徳たること持戒苦行も及ぶ能はざる所以である。

又、道霈禪師は曰つて居る。

戒高き者は、多く世を輕んじ、己を苦しむる者は、多く他に瞋る。

と、兎角、戒行の高潔なる者はその持戒といふことを鼻にかけて、他人を輕蔑し、自ら誇る風のあり勝ちのものである。又、苦行をも敢てし、獨りを潔くする者は、態度兎角排他的で、他に瞋る風を免れない。斯くの如き持戒苦行に比して、能く忍を行する者は、眞に有徳の人であり、有力の人である。忍を行する人に在つては、冤親は平等であり、苦樂は等一である。何の瞋恨か起るべきものあらう。

所が唯だ耐へ忍ぶといふだけでは、尙忍の徳を盡くさない。更に歡喜し、忍受して、毒をも甘露を飲むが如くするを得なければ、眞實入道智慧の人でない。

永嘉大師歌うて曰く、

他の謗するに任せ、他の非するに任す。火を把りて天を焼くも、徒らに自ら疲る、我れ聞いて、却つて甘露を飲むに似たり。銷融して頓に不思議に入る。

と、無我真空の玄妙に體達すれば、眞に此の如き境地に到り得るものである。

ギリシヤのソークラテスは、當時の俗類に憎まれ、誤まれる輿論に罪せられて終に死刑の宣告を受けた。死刑宣告の前日は、恰もアテンの祭船が、デロスに向つて、ピライウス港を出帆する日であつた。アテンの法として、此の祭船が再び歸つて來る迄は、一切の死刑執行を禁じてあつたので、彼れの死刑は此の船の歸るまで、三十日を延期されたのであつた。彼れの友人及び弟子達は、此の延期を利用して、此間に獄吏を買收し、ソークラテスを逃亡させようとして極力勤めたが、しかも彼れは頑として肯かすたどへ無實の罪、無法の判決なりとも、國法は即ち國法である、苟も國法の定むる所である以上、之れを犯すことを屑しとせぬ」と説いて弟子達を諭し、つひに獄を出でなかつた。

斯くて愈刑執行の日——紀元前三九九年四月一日といふに、既に妻子其の他の婦女子に別れを告げて、家路に送り還せるソークラテスは、友と弟子達とに取り卷かれ、恰も祝ひの筵に、喜びの美き酒杯を擧ぐるが如き態度で、獄吏の渡せる毒杯を執り、顔の皺一つ動かさず、靜に呑み乾したのである。毒が全身にめぐり

重き死の影が彼れの顔を覆ふ最後の刹那に至り、尙ほ從容として、弟子のクリトンを呼び、

「クリトンよ、アスクレピオスの神に、鶏一羽の負債があつた、忘れずに拂うて呉れよ」

どの一語を残して、七十歳の老哲人は、神の如くに此の世を去つたのであつた。

眞理の爲めに、正義の爲めに、その七十年を献じたソークラテスの最後は、げに本文の「惡罵の毒を歡喜し、忍受して、甘露を飲むが如く」したものであつた。彼れの如きは、以て有力の大人と稱するを得るものであるまいか。

第三小節は「所以者何」から「劫功德賊無過瞋恚」まで、此は瞋恚の害を擧げて、前「功德の利を失す」と云へることを結ばれたものである。

瞋恚は常に猛火に喩へられて説かれる。火は何物をも焼きつくすもので、瞋恚の害惡の熾烈さは恰も火の如く、如何なる善根功德も、一時に消滅させるほど恐ろしいものであるといふので、即ち諸の善法を破ると説かれ、又好名聞を壊ると示された。名聞を貪るといふことは、元來他の利欲と同じく、佛門に嚴しく戒

められる所であるが、其の德行高くして、必然に集まつて來る好名聞は、最も欣ぶべきことで、貪り求めて得るものと、固より同律に論すべきでない。阿彌陀佛、觀世音菩薩、その他三世十方の諸佛諸菩薩の御名は、迷ひ惱める衆生が、齊しく之れを唱へ、之れを念ずる、所謂唱名念佛によつて救はるゝ道が開ける、是れ最も廣大顯著なる好名聞である。斯かる理想的好名聞ならずとも、たとへ小善小徳でも、それ相當の好名聞は、必らず求めずして、響の聲に於けるが如く、身に集るものもあるが、それが一たび怒りの煽をあぐるに於ては、如何なる善行も功德も、忽ち灰燼にし去らねばならぬ。今世後世人見んことを喜ばず、怒り腹立の爲めに、衆望地に墜ち、誰も敬意や好意を以て迎へてくれるものはない。試みに怒火心頭に發したとき、自ら鏡を執つて面を映して見るがよい、たとひそれが菩薩の如き美人たりとも、その瞬間は恐らく、夜叉の如き形相を示して居るに違ひない。怒りの相は、我れ自身さへも、ぞつとずる位であれば、況して他人が見て愛想をつかして棄て去るは當然である。其の害、雷に猛火のみならず、實に瞋心は猛火よりも甚しいものがある。

〔華嚴經普賢行願品〕には

一念瞋心起れば、百萬の障門開く。

と説かれ、〔報恩經〕には、

猛火は一世間を燒く、惡口は無數世を燒く、猛火は世間の財を燒く、惡口は七聖財を燒く。是の故に一切衆生の禍は、口より生ず、口舌は身を鑿つ斧なり。

と強く戒められてある。一點心内に萌せる怒りの火は、忽ち惡言の煽となつて口から吐かれる、惡口だけで濟めばよいが、怒罵は毆打となり、傷害となり、果ては殺人とまでなる。即ち功德を劫むる賊は、瞋恚に過ぎたるはなし、最も恐るべく慎むべきである。

次の第四小節は、〔白衣受欲〕から、〔霹靂起火非所應〕までの末段の文で、白衣即ち在家の者を擧げ來り、之と對比的に、強く出家學道の者を戒められた結辭であるが、在家だから怒りを恣にしてよいといふことはない、佛道修行の上とのみ限らない、一般社會的生活に於て、一般修養上の要諦として、怒りを慎むといふことは、最も肝要なことではなければならぬ。況んや、清淨佛戒を持つて一意正道を勤修

すべき沙門の身に於てをやである。

瞋恚は實に恐るべき猛火である。慄るべき劫賊である。常に當に防護して心内に入らしめてはならない。而して如何に能く之れを防護すべきか、そは忍の一法あるのみ、克く忍を行ずる有力の大人となつて、熾烈なる怒りの火に、冷靜なる入道智慧の水を濺ぎ、忍辱の鐵扉を以て、痲癩玉を密閉し、所謂劫賊の襲來を防護せねばならない。要は忍の一字に歸結される、しかも忍の徳の偉大なる、つひには如何なる痛苦に對しても、些の痛苦を感ぜざるのみならず、更に歡喜の念を以て、總てを迎へ、總てを處することが出来る、是れ前に所謂忍の徳たること、持戒。苦行も及ばざる。所以である。

昔、皆喜禪師といふがあつた。此の和尚は年中喜色を滿面に湛へ、曾て悲み苦みの色を見せたことがない、況して怒りの影など、其の顔に表したのを見た者はなかつた。

假りに晴天の好日がつゞくとする、此の和尚は、あゝ托鉢が都合よく出来て有りがたい、と非常に喜ぶ。反對に雨降りつゞきで毎日引つこもつて居らねばならない場合は如何といふに、あゝ落ちついて毎日靜かに坐禪が出来ると、矢張り喜ぶ。客が来れば、話對手があつてよいと喜び、誰も來なければ讀書が出来ると言つて喜び、眠られぬ夜は、念佛稱名が出来たと喜び、よく眠れば十分の休養が出来て、翌日元氣が出ると言つて喜ぶ。他の好意を受けては、自他の善根功德を積む勝因縁と喜び、若し悪口罵詈を受けても、是れ亦何かの因縁、勸忍の徳を一つ積んだと言つて大に喜ぶ。有らゆる物事に、一々喜ぶべき理由を見出しては喜ぶ、和尚さんどうも暑いですな、逆も苦くて堪らないといへば、和尚例によつて「いや暑いとき暑いと感じられる身で居られるが有難いぢや、暑き日にあつがる今日ぞうれしけれ

つめたくなりし人にくらべて

暑さ寒さもわからぬ冷い身になるが幸福かい」といふ調子で、此の和尚には、有らゆる物事が、一々喜ぶべき理由を附せられるのであつた。そこで入禪名して皆喜禪師と呼んだといふ。順逆二境に處し、眞に能く皆喜禪師の如くなるを得て總てを歡喜し、常住感謝に生きてゆくことを得ば、此の世このまゝ安樂國である。

是に至つて前に言へる、耐忍、安忍、諦忍も、缺くることなく行得せられ、六度の隨一たる忍辱波羅蜜、以て體中に圓なりと謂ふことが出來よう。

(二) 憍慢の煩惱を對治す

汝等比丘。當自摩頭。已捨飾好。着壞色衣。執持應器。以乞自活。自見如是。若起憍慢。當疾滅之。增長憍慢。尚非世俗白衣所宜。何況出家入道之人。爲解脫故。自降其身。而行乞耶。

汝等比丘、當に自ら頭を摩づべし。已に飾好を捨て、壞色の衣を着し、應器を執持して乞を以て自活す、自ら見るに是くの如し、若し憍慢起らば、當に疾く之れを滅すべし、憍慢を増長せんは、尚ほ世俗白衣の宜しき所に非ず、何に況んや、出家入道の人、解脫の爲の故に、自ら其の身を降して、而も乞を行するをや。

【字解】 ●自摩頭 出家沙門は頭髮を剃り頭を圓めて居る、是れ愛欲を除去せる象徴である。自ら頭を摩でよとは、斯くして我が出家の根本目的は、離欲寂靜に在ることを、絶えず、顧み警めよとの意。 ●捨飾好 在俗の者は、衣裳、髮飾其他

帶劍等身分に應じて、それ〴〵身の裝飾を爲すが、一旦佛弟子となれば、それらの飾りは總て捨て、身に着けない。 ●壞色衣 青黄赤白黒の如き、所謂正色は好んで在俗の用ふる所、出家は之等の正色を捨て、間色を用ふる、木欄色、茶褐色等多く土色したもの、それが即ち壞色で、是れ亦愛着を去る標章である。今日の世の高僧善知識たちが、競うて紫衣、緋衣等を着け、金襴の袈裟などを纏うて居るのは、こゝには例外として見て置かう、原始佛教の佛制にはないものである。尤も律文以外の他の經典には、金襴衣のことなど見えてゐないでもない。 ●執持應器 應器とは具さには、應量器といふ、比丘は日々托鉢に出で、在家に食を乞うて自活するのであるが、食を乞ふ場合、自分の一度の食量に應じた器を所持して、それに受ける。それが應量器で、鐵若くは瓦で作つたものである。何でも施されたものを其の器に受けて、一杯になれば引返して自分の修行處、若くは樹下石上に到り、それを食ふ。若し煮沸しなければならぬ物ならば、其の器をそのまゝ、火にかける、鍋兼茶碗のやうな重寶なものである。世俗に所謂鐵鉢であるが、今日の日本の禪僧が用ゐて居るのは木製で、しかも應量器中には次鉢と稱し、汗椀用、皿

用と數箇大小の椀が重ね組みになつて居る。此は風俗の變移で、元と佛制ではない。◎以乞自活。佛弟子は、飲食財貨すべて蓄積すべからざるは、首めに説かれた通りで、釋尊の一代も亦行乞を以て自活されたのである。◎憍慢。憍は自らタカブルこと、慢は他を凌ぐこと。◎爲解脱故自降其身而行乞耶。解脱が出家の窮極目的である。解はトケル、脱はヌケルと訓む。即ち煩惱忘想の重圍をトキ、現在の苦界からヌケ出して、寂靜安樂の證りの境に到ることである。此の目的に向つて専心向上すべき佛弟子は、日常生活すべて世俗と混同して、果敢なき榮華や快樂を貪つてはならない。世俗の追求する一切の名聞利養を棄て、貪と瞋と痴の三毒を離れんが爲めに、自ら身を降し、心を抑へて、行乞を以て自活して居るのである。それに何として、世俗すら宜しとせざる憍慢の心など、微塵たりとも起して可からうか。教主釋尊が、王位、妻子、珍寶すべてを棄て、出家成道し、而して入滅の最後まで、一介の行乞僧を以て身を處せられた所謂身を降して乞を行せられた勝躡は、佛子の等しく欽慕し、倣ふべき洪範である。

【講話】 此一節六十八字、眼目とするところ、憍慢の二字に在る。理窟も解釋も

要しない。自ら頭を摩で、見ればよい。何の爲めに頭を丸めて居るのか。何の爲めに飾好を捨て、間色を身に着け、四衆に卑下して、行乞を之れ事とするのか。自ら見るに是くの如し、みな是れ解脱の爲の故。だと自覺し自重するところに、いかで憍慢煩惱などの起るべき餘地があらう。

〔禮記曲禮〕にも

敖は長ずべからず、欲は縦にすべからず、志は満たしむべからず。

とあり〔易經〕にも

謙をたる君子、卑しみて以て自ら牧ふ。

と見えて居る。憍慢を増長するは尙ほ世俗白衣の宜しき所にあらず、世間の教に於ても憍慢は深く戒め、謙徳を稱揚して居る。況して出世間の清淨學道者にして、憍慢を抱いて可からうか、若し憍慢起らば疾く之れを滅すべし、苟も之れを増長せしめてはならない。

〔法句譬喻經〕に高慢梵士の話が出て居る。昔、一梵士があつた。生れて二十歳才氣自然に發し、凡そ世の中の事、如何なる事も、一度目を通せば必ず了解すると

いふ程であつた。彼れは大に慢心して、凡そ世の中の事、たとひ一事たりとも通せざるものあつては、眞の達識者といふことは出来ない、我は必ず一切の事物を識得しよう、との誓ひを立てた。それより六藝、雜術、天文、醫方より、技樂、博奕、さては裁縫の末技に至るまで學び盡した。そこで自ら思ふやう、最早天下我れ以上の識者はなからう、万世の後迄博識の名を竹帛に垂るゝ者は、我を措いてあるべからずと、即ち諸國を遊行して、果して己に勝る者なきかを實驗しようと思つた。此の目的を以て旅に上り、最初に或る町へ入ると、四辻の處で弓を作つて賣つて居る男があつた。見て居ると其の巧者なこと實に驚くばかり、多くの人々の目の前で、瞬く間に立派な弓を作り上げ、人々の需に應じて渡して居る。買手はみな大満足の様子である。

梵士は、ホト／＼感服し、之れは迎も自分などの及ぶ所でない、と意を決して其の弓師に入門を申込んだ。元來利潑な彼れのことゝて、目を重ねて習熟するうち、最早師匠にも勝る立派な弓を作り得るやうになつた。

弓師の許を辭して、今度は途中或る湖水を渡つたが、その時、船頭が舟を操るこ

この巧みさに、亦た悉く感心してしまつた。梵士が高慢な鼻はこゝでも、へし折られた。彼れは早速船頭の弟子となつた。之れも幾程もなくして、妙技を自得し、大波を押し切つたり、速瀬を避けたり、自由自在に出来るやうになつた。

船頭に謝禮をして出で、行き行いて、さる國の首都に着いた。そして國王の宮殿の、壯麗にして人目を眩惑するばかりなるを見て、驚歎を禁じ得なかつた。これは大したものだが、これを建てた大工は、素晴らしい腕を有つた者に違ひない、之れには自分も遠く及ばないと、また我慢を折つて、大工を尋ね、其の道の教を受けた。聰明なる彼れは、亦幾程もなく建築の奧秘を極めることが出来た。

斯くの如くして此の梵士は、印度十六大國を周遊し盡し、最早知らざる事なく學ばざる事なきに至り、何れの國にも此の梵士に勝る者一人も居ないといふことになつた。是に於て梵士は、非常な貢高我慢を生じ、天地の間に於ける最勝者は實に我であると謂つて居た。

時に釋尊は、祇園精舎に在して之れを聞かれ、何とかして濟度してやりたいものと思召し、直ちに身を沙門に棄し、杖をつき鉢を持つて、彼の梵士の前に立つた。

梵士の國にはまだ佛法が傳つてゐなかつた。梵士は沙門の服装を見たので怪んで問うた。君の服装は一體何を意味して居るのだ。君の持つて居る器物はそれは何だ。自分はまだ多くの祭器の内にも、そんな物を見たことがない。全体、君は何を職業としてゐて、そんな變な風をして居るのだと。沙門の答に曰く、我は是れ調身の道者であると、更に問ふ、調身とは一体如何なる事か。そこで沙門が偈を説いて聞かせた。

弓匠は角を調め、水人は船を調め、巧匠は木を調め、智者は身を調む。

譬へば厚石の如し、風も移すこと能はず、智者の意は重く、毀譽にも傾かず。

譬へば深淵の如し、澄靜清明なり、慧人は道を聞き、心淨く歡然たり。

斯く述べ終ると同時に、沙門は忽然として身を變じ、三十二相の端嚴なる佛身を現じ、大光明を放つて梵士に告げて言つた、此は是れ我が道德變化調身の術である。

梵士が從來長い間抱いてゐた高慢の塊は、木つ葉微塵に打破された。梵士は五體を地に投じ、只管調身の極意を授からんことを請うた。彼れは此の時より

すとなり、専心修業の結果、つひに羅漢の聖果を得たといふ。

わづかに一能一藝に於て得、又は一部分の學理を究めれば、そこに満足し自負して居る、これ世の憍慢者の常態であるが、彼の高慢梵士にも及ばない輩が多い。言ふに足らぬ末技に於ても、慢心があつては進境は望まれない、況んや、釋尊の所謂、道德變化調身の術を修むべき、高遠の理想の下に辨道すべき佛弟子にして、憍慢の煩惱の爲めに、自他の行業を妨げてよからうか、愼み戒めねばならぬ。

何ゆゑに斯くなる身ぞと折々は

すがたに恥ぢよ墨染の袖

(三) 諂曲の煩惱を對治す

汝等比丘。諂曲之心。與道相違。是故宜應質直其心。當知諂曲但爲欺誑。入道之人。則無是處。是故汝等。宜當端心。

汝等比丘、諂曲の心は、道と相違す。是の故に宜しく應に其の心を質直にすべし。當に知るべし、諂曲は但だ欺誑を爲すことを、入道の人、則ち是の處無し。是の故に汝等、宜しく當に端心にして、質直を以て本と

以質直一本

すべし。

【字解】 ① 諂曲 諂はへツラヒ、曲はマゲル、他の意を迎へて之れに合はんことを希ひ、我が意を曲げて彼れに従はんとするのが諂曲である。② 與道相違 道とは正道、佛弟子が遵行すべき八正道。諂曲は正しきを曲げるものであれば、此の道と違ふこと甚しいものである。③ 質直 質樸正直、些の虚飾なき、本性のままをいふ。諂曲は此の正反で、不質なるが即ち諂、不直なるが即ち曲である。④ 欺誑 欺はアザムク、誑はタブラカス、諂曲の心より發する言行は、必ず欺誑を伴ふ。諂曲の心それ自體が、自ら欺き他を欺くものである。⑤ 無是處 處はコトワリと訓む、佛弟子には、そんな欺誑などある筈がない、といふほどの意。⑥ 端心 端はタマシと訓む。古人の註釋に「諸の委曲の相なきをいふ」とあつて、下らない小細工を用ひぬ、純眞な一本調子の心、俗にいふ眞面目の意に解して可い。

【講話】 この節に於ては、諂曲を誡められたのであるが、之れが對治の法として質直を勸説された。端心にして質直を以て本と爲すべしといふのが、實に此の節の緊要である。

〔百法問答抄〕に

他の意を取るが爲めに、他の氣色に隨うて、自の本儀を現せず、矯げて他の威儀に隨ひ設くる、澆曲の心を以て性と爲す。

とあるが、諂曲の心は自己の本心を曲げるもので、第一自己を欺くものであり、本心ならずして、他の意を迎合し、他の威儀に隨設するもので、即ち他を偽り誑かすもの、正しき道と相距ること幾千里、身心を清淨に持ち、清淨の行を修むべき比丘として、斯くの如き言行が微塵もあつてよい筈がない。當に其の心を質直にすべし。質直にして些の諂曲欺誑を存せざるところ、即ち是れ端心なる所以、端心にして能く正道に入るべきである。

〔維摩經菩薩品〕には

直心是れ菩薩の道場。

と説かれ、楞嚴經にも

出離生死は皆直心を以てす。

とある。直心とは本文の質直の略語と見ればよい。生死を出離して大解脱を

得んが爲めに出家行道する者の心は、常住直心であらねばならぬ。

出家行道の人と限らない、端心正直といふことは、一般人の處世上にも、極めて肝要なこと言ふまでもなく、古今東西の聖賢等しく誠め來れる所であるが、末法浮薄の道俗、諂曲欺誑をこれ事として居る世の實際状態は、眞に悲むべく慨すべき限りである。

昔、前田加州侯が、或る夏の夜、老臣數輩と俱に中庭に下り立つて、逍遙されてゐたが、フト立ち止つて側の甲斐守を顧み、アレそこになつて、殊によく光る星が見えるが、甲斐にも見えるか」と問はれた。甲斐守は侯の指す方に眼をやつたが、「ハ成程如何にも仰せの如く、よく光つて見えます」と一つ二つ叩頭しながら言つた。次に侯はまた「阿波、うちにも見えるか」とのお尋ねに、阿波守も恐縮しながら「ハイハイよく見えます」と申上げる。今度は土佐、そちにも見えるであらう」とのお尋ねであつたが、土佐守は「私には頼と見えませぬ」と對へた。侯は尙ほも熱心に「屋根の端ぢや、まだ見えぬか」と指示されたが、土佐守は、幾度も目をこす

はカラ／＼と大笑して言はれた。「馬鹿ぢや、土佐は馬鹿ぢやから、見えるといふ星が見えぬのぢや。伶俐な者には、見えぬ星が目に見える」と。侯の此の皮肉な試しに、甲斐守や阿波守は、さぞ顔から火の出る思ひをしたことであらう。

前田侯が土佐守を評した「馬鹿」は「正直」の代名詞であつて、他の老臣に對する「伶俐」の評語は「不正直」の成語轉換に外ならない。土佐守は本文に所謂質直の心の所有者であつた。他の老臣共は、所謂諂曲の輩であつた。諂曲は但だ欺誑を爲す。實際見えない星を見える、と云つて侯の言葉に合槌を打ち、自己の意志を曲げて、侯の意を迎へた、全く自ら欺き侯を誑かしたもので、家臣としての、忠實なるべき道と相違すること甚しいものである。

借問す、今日の世、果して幾人の土佐守を能く見出し得られるか。「馬鹿」を代名詞として、甘受して却つて會心し、「伶俐」の成語を受けて、赧然として背に汗した、加州侯の當時はまだよかつた。現代では如何か、質樸正直の者は「馬鹿正直」と嘲笑せられ、欺誑をこれ事とするの輩、却つて「伶俐」を稱讚の辭として受けて居る有様でないか。今や黑白反對の意味に於て、昔の代名詞は、冠詞と變換して用ひられ

るやうになつた。なさけない話である。

遮莫斯くの如き現代なるが故に、本文の教誡の如き、更に一層の尊き光を放つわけで、所謂改造の新世界を開拓せんとする現代人は、出家在家の別なく、齊しく新しき自覺を喚び起し、質直を以て本とする、即ち真面目の人として、真面目に各人の務めを果すに努むべきである。

以上で、第二段の世間法要を終つたわけであるが、これまでの所は、何れも「爲す勿れ」「爲す可からず」といふ禁誡ばかりで、世間の惡道邪路に陥らないやうにとの教であつた。就中、此の一段のうち、第二章の「諸苦を對治する法要」に於て根放逸の苦。心放逸の苦。多求の苦。懈怠睡眠の苦。

の四個條を擧げて之れが對治法を説かれ、次の第三章「煩惱を對治する法要」に於て

瞋恚の煩惱。憍慢の煩惱。諂曲の煩惱。

の三個條を示して誡められた。之れ等は何れも、覺りの道に入る主なる障礙物で、之れを對治することが、世間的に必修の法要である。そして、此の法要を修む

ることが、次の出世間の正道、即ち佛道に入つて佛果を成就する所の豫備であり基礎となるのである。

右の七個條は、覺りの道の邪魔物で、之れを一口に七覺支と稱せられてある。

次の第三段「出世間法要」には、

少欲、知足、遠離、精進、不忘念、禪定、智慧、不戲論

の八法が説かれてあつて、之れを八正道とも八大人覺ともいふ。大人とは菩薩のことであるが、廣義に佛弟子と見ればよい。此の八法を修めることによりて、佛道窮極の目的たる寂靜の覺りが得られるので、七覺支、八正道、これ實に此の經中の樞要と見られるのである。

第三段 出世間法要

一 無求の功德

汝等比丘。當知多欲之人。多。汝等比丘。當に知るべし、多欲の人は、利を求

求利故苦惱亦多。少欲之人。無求無欲。則無此患。直爾少欲。尚宜修習。何況少欲能生諸功德。少欲之人。則無諂曲以求人意。亦復不爲諸根所牽。行少欲者。心則坦然。無所憂畏。觸事有餘。常無不足。有少欲者。則有涅槃。是名少欲。

【字解】 多欲 欲は迷の根源即ち惑である。これを煩惱障といふ。多求 惑は業を生じ、即ち多欲の根源から、多求の業障を生ずるのである。苦惱 多欲の惑と、多求の業との結果、招くところは苦惱で、即ち報障である。惑業苦を繰り返して、生死の海に頭出頭没して居るのが、凡夫衆生の有様で、比丘の目的は、此

むること多きが故に、苦惱も亦多し。少欲の人は、求め無く欲無ければ、則ち此の患無し。直爾に少欲すら、尚ほ宜しく修習すべし。何に況んや、少欲の能く諸の功德を生ずるをや。少欲の人は、則ち諂曲して人の意を求むること無し。亦復諸根の爲めに牽かれず。少欲を行ずる者は、心則ち坦然として、憂畏する所無し、事に觸れて餘り有り、常に足らずといふこと無し。少欲有る者は、則ち涅槃有り。之を少欲と名づく。

三障を除き、解脱を得るに在る。故に比丘の修すべき法は、此多欲多求の反對でなければならぬ。則ち少欲の法である。無此患 少欲なれば三障共になく一切の苦患は、おのづから消滅する。直爾 タゞニと訓む、俗語のタゞサヘといふ意味。少欲尚宜修習 若し能く少欲なるを得ば、苦惱憂患なく、心常に安らかである。たゞそれだけでも、少欲は宜しく修習すべき價值がある。何況上の「直爾」を受けて、下の意を強める言葉。生諸功德 少欲の法は、聖道により聖果を得べき、多くの功德を生ずる。即ち次の如き諸功德である。無諂曲以求人意 少欲の人は、利己的觀念を以て、他の懐心を求むるが如き必要が、毫もない。従つて前節に説かれた如き、聖道の障害たる諂曲欺誑の過に陥るやうなことはない。不爲諸根所牽 多欲の故に、眼耳鼻舌身意の六根が、色聲香味觸法の六塵に牽かれて、際限もなき欲求を爲し、それが爲めに限りなき苦惱を受ける少欲なれば、其の憂へもない。心則坦然 坦然は寛平の貌、即ち心ヒロク、タヒラかなこと「節要」には法身顯矣と註してある。無所憂畏 は同書に、般若發とあり。事觸有餘 を解脱成と言つてある。法身とは、絶對とか本體とかい

ふ宇宙の妙體般若とは其の本體が顯す靈妙の作用、解脱は宇宙の靈德靈妙の當相此の大自然の靈妙不可思議なる體相用の絶對眞理を諦觀し、體得せるもの即ち佛陀である。それで此の法身般若解脱を佛の三徳といふ、斯かる三徳も少欲によつて自然に顯はれる、一切の苦惱なく、心坦然として點塵の汚れも止めざる状態に至れば、そこに何の憂へど畏れか有らう。事に觸れて餘り有り、從容自適何事を爲すとして何等囚はるゝ筈もなく、累はさるゝ筈もない。◎有少欲者則有涅槃。涅槃は前にも解説した通り、窮極の聖果である。少欲は既に今言へるか如き三徳をも生ずる。三徳は自然の結果として涅槃に至る。少欲の功德實に斯くの如く大なるものあり、所謂大人の學ぶべき、八大人覺の一たる所以も茲に存するのである。

【講話】 所謂八大人覺の第一、少欲の法を説かれたもので、無求無欲が眼目である。既に字解に於て説明したやうに、無求無欲にして始めて出離解脱が出来、多求多欲は此の聖道に入る障碍の最大なるものである。解脱が出家の根本目的である以上、比丘の先づ必修すべき法は實に此の少欲でなければならぬ。少

欲と名くるもの、實は絶對無欲の状態である。

多欲の人は利を求むるが故に苦惱も亦多し。と先づ貪欲多求の如何に障礙たるかを示し、之れを對照して、無求の功德を説かれてあるが、欲多くして際限なく利を追求する事實は、言新らしく指示する迄もなく、殆ど一般の世態人情として、何人の眼前にも、最も雄辯に説明されて居る所で、シヨツペンハウエルの如きは、

「人生は限りなき欲求の連続である」

とまで極言して居る。所が多欲多求の心理的經過は如何といふに、事實、心萬境に随つて轉じ、憂怖縦横無盡に生ずと云つた調子で、其の未だ利を得ざるに當つては、只管これを得んことにのみ心を痛め、既にこれを得るに及んでは「物事の一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世」の中で、隴を得て更に蜀を望むの念生じ、求むる所を得るも、欲を充たすに足らず、經營畫策、思慮百端、飽くなき欲求の爲めに、身心共に疲憊せしめ、斷えざる苦惱の重荷を背負はねばならない。何の事はない、疥癬を搔くやうなものである。初め手の先が一寸痒いと思つて搔くと、次いで腕の一部が痒くなる、兩手の全部がむづ／＼して来る。背中

も腹も脚もと、つひに全身に及んで、搔いても搔いても痒ゆきが増すばかりといふ結果になる。彼の物欲を追求して、欲求から欲求へと連続増長し、常に心配不安、憂患に苦んで居る俗輩は、疥癬患者と異ならない精神状態に在るものではないか。

所謂少欲は此の正反對で、無求無欲を心として居るのであるから、斯くの如き憂患のあらう筈がない。既に何等憂患なくして、無事無爲であれば、身も安らげ、心も定まる。此の苦惱なくして、身心安穩なるを得る、といふだけでも、少欲の法は當に修習すべき尊き價值がある。而も當に之れのみではない。少欲は更に諸種の功德を生ずる最勝の善法である。

諸種の功德とは何か、本文の示す所五種の項目に分たれる。

(一) 少欲の人は、諂曲の如き惡徳を犯し、自ら欺き他を偽り、以て他の信心を買ひ、自己の利欲を充たさうなどのことを決してしない。前に解説したやうに、諂曲なき心は、端心である、直心である。少欲の人は、能く直心に住することが出来る、直心以て道に入るべし、即ち少欲にして、以て聖道に入ることが出来る、是れ大なる功德である。

(二) 五根に牽かれて塵境に迷はされることがない。一切迷妄の根源は欲心に發し、欲の爲に五根五境に累たづなはされ、際限なく煩惱を産み出す。少欲にして、求むる所なきは、即ち煩惱の根本から除き去る所以、煩惱を滅する所、即ち菩提である、少欲以て菩提を獲る、功德亦大なりと謂ふべきではないか。

(三) 少欲を行する者は、心坦然として、憂畏する所なし。愛といひ、畏といふ如きは、元來求むる所ある者にして、始めて心内に懐くもので、少欲を行し、無求無欲である人に、些の憂畏も存する道理がない。事に憂畏する所なく、心常に坦然たるを得るは、正に得道達觀の大人と稱すべきである。

(四) 既に求むることなく、欲することなければ、物なく事なきも、何の不足も不備も訴へない。事に觸れて餘あり、身邊常に綽々として餘裕を存し、心恒に悠々として、充ち足る、蓋し幸福の最大なるものである。

(五) 斯くの如き心身を保ち得る少欲は、求めて得難き佛道の極果なる涅槃を、求めずして、おのづから得られる。實は少欲即涅槃と見ることが出来るので、少欲

の功德こゝに至つて極まれりと謂ふべきである。

昔加賀に服部玄廣といふ醫者があつた。常に仁術を以て任すといふ精神家で、修養も餘程出来てゐた人である。或るとき不慮の失火で、家屋敷を悉く灰燼にするの不幸に遇つたが、世の俗人輩のするやうな、狼狽の態度は毫もないのみか、何の悲みも歎きも感じないものゝ如く、凄じい紅蓮の焰を眺めて、ニコ／＼として立つてゐた。或る悪戯者が心憎しと思つたものか、其の焼け跡に左の如き落首を書いて置いた。

お醫者さん家の黒焼何にする

と、服部先生之れを見て、即座に下の句をつけた。

大工左官の腹ぐすりなり

一般俗人は所謂諸根の爲めに牽かれて、五欲六塵の境に馳せ、物欲の纏縛の爲めに、得失成敗共に心身を勞苦し、寸時の安きも得られない、畢竟みな多求多欲の煩惱に累されるものである。少欲の人、無求の人は、能く此の囚はれから脱れ、如何なる事變に逢ひ如何なる不幸を見るときも、元來無求無欲なれば、則ち此の患な

し。能く超然として遠觀することが出来るのである。

近來世に有名になつた越後の良寛和尚の如き、蓋し末世に稀な無求の達人であつたらしい。彼れの一生は彼れ自ら謂へる「山かげの石間をつたふ苦水のあかなきかに」生れ且つ死んで往つた、一個の隱遁者であつたが、其の高徳と並びに其の藝術——書家として、歌人として——は後世に永く光輝を放つものである。

米五合あれば一日を安く活きるに足るとて、其の一小草庵を五合庵と稱し、焚くはごは風がもて来る落葉かなと脱落の身心を其處に安んじ、無邪氣な兒女達と毬突きなどして日送りをしてゐた。徹底無求無欲の面目が髣髴される。或は彼れを口して、たわけた隱遁生活、極端な退嬰生活を營んだもの、と一概に斥け去らんとする者もないではあるまいが、それは甚だ皮相の見である。事實、彼の赴くところ常に不可思議な感化が行はれたことは、今日尙ほ歴々として窺ひ得られる。

良寛の生家は出雲崎の橘屋であつたが、良寛が老僧になつた頃の其家の主人

は馬之助と云つて、即ち老僧の甥に當つてゐた。それが放蕩で家産を傾むける由を聞いて、老僧一日訓誡を與へるつもりで出かけて行つた。所が何か言はうとしたが、飽くまで無我で、無抵抗的な此の老僧は、女や子供のやうに氣が弱かつた。三日間泊つてゐたがどうも何も言ひ出し得ないで、そのまゝ暇を告げたら、何と思つたか其の立ちぎはに甥に草鞋の紐を結んでくれと頼んだ。甥は、今日に限つて老僧が不思議なことをいふと思つたが、命のまゝに草鞋の紐を結んでやらうとした。其の刹那、老僧は無言のまゝ、ちつと甥の顔を見守つた。甥は何氣なしに仰ぎ見た眼には、熱涙の流れ傳つて居る老僧の頬が映つた。老僧は無言のまゝ、やがて立ち去つた。其の口から甥の生活がガラリと變つた。全く改善された新人となり、以前の放蕩は忘れたやうに止つた。

僧中玉島附近での出来事であつた。或る時附近の或る農家に晝盜が忍び入つたとの訴へがあつた。村吏は、それは近頃比のあたりをうるつく、乞食坊主の所爲に違ひない、と目ぼしをつけた。乞食坊主は早速捕へられた。しかし如何に糺問しても、一言の辯明もしない。盜みの罪は彼れに歸せられ、土穴を堀つて

生理の極刑に處することになつた。と、そこへ村の豪農が通りかゝつて、近頃聞けば玉島の圓通寺に、一人の雲水が來て居るが、表面は凡俗に似て、頗る悟道の深い高德だといふこと、若しや其の雲水ではないか、このことに、村吏は更に容も言葉も改めて訊問すると、果して圓通寺の雲水であるとの答へに、大に驚いて、何故辯解なされぬと問ふと、雲水は從容として言つた。「人が一旦他人から理不盡に疑はれると、如何に辯明しても、疑を深くするばかりだ。無益な申譯をするよりも、宿世の罪業とあきらめ、如何なる苦みも受けやうと覺悟した。が、まだ因縁があつたと見ゆる」と、村吏等は深く過ちを謝し、早速放免した。その乞食坊主は、良寛であつた。

「三慧經」に

人自ら意を伏すること能はずして、反つて他人の意を伏せんと欲す。能く自らの意を伏せば、他人の意、おのづから伏すべし。

とあるが、良寛和尚の多くの逸話は、眞に此の經の義を具體的に説示して居る。五合庵主としての隱遁生活に、無求少欲の行者たる良寛和尚の風事が窺はれる

と共に、過つて生理にされんとするに當つても、自若たる態度に、所謂坦然として、憂畏する所なし、事に觸れて餘りあり、の様子が見え、また無言にして、却つて舌大千を覆ふの微妙の説法を爲し、能く放蕩息子を改善せしめたなほは、以て其の内面に湛へられた法悦功德の、如何に大なるものありしかを證するに足る。少欲有る者は、則ち涅槃有り、徹底少欲の行者たり得る者、おのづから是れ得道得法の大人たる所以、亦看取すべきである。

二 知足の功德

汝等比丘。若欲脱諸苦惱。當觀知足。知足法。即是富樂安穩之處。知足之人。雖臥地上。猶爲安樂。不知足者。雖處天堂。亦不稱意。不知足者。雖富

汝等比丘、若し諸の苦惱を脱せんと欲せば、當に知足を觀すべし。知足の法は、即ち是れ富樂安穩の處なり。足ることを知る人は、地上に臥すと雖も、猶ほ安樂なりと爲す、足ることを知らざる者は、天堂に處すと雖も、亦意に稱はず。足ることを知らざる者

而貧。知足之人。雖貧而富。不知足者。常爲五欲所牽。爲知足者。所憐愍。是名知足。

は、富めりと雖も而も貧し。足ることを知る人は、貧しと雖も、而も富めり。足ることを知らざる者は、常に五欲の爲めに牽かれて、足ることを知る者の爲めに憐愍せらる、是れを知足と名づく。

【字解】 字句平明、殆ど解義の要なし。●諸苦惱 現在の境を苦界と見る、而して之れを解脱するのが比丘の目的である。先づ苦の體相を擧げ、迷妄の結果を示す。●當觀知足 苦の體を打破するに知足の法の用を以てす。迷妄の果に對して、解脱の因を示すのである。●富樂安穩之處 法の用より得たる體、即ち結果たる解脱境。●地上と天堂貧と富 各一對、交互相關の文法。●爲知足者 所憐愍 足る事を知らざる者は愚者、痴人である。足ることを知る人は智者、達人である。智者よりして愚者を見る、大人の小兒に於けるが如く、憐まざるを得ない。

【講話】 此の一章、いふまでもなく知足の二字が眼目であるが、知足の人と、不知

足の者とを對照し、前者の安心を揚げ、後者の不安を抑へたかたちである。漢文法の所謂交股法かうこほふを用ひたもので、知足と不知足、貧と富とを一上一下し、互に出入せしめて居る。

さて前節の少欲と、此の知足とは頗る相似たものであるが、前者は、貪らざるを本義とする無求の功德を明かし、之れは必要の最少限度を得て足れりとする。満足安心の法を説かれたものである。

諸苦の因る所は、貪欲を本とす、

この「法華經」の文の如く、人生に於ける苦惱は、多くは欲の深いところから、自ら招來するもので、其の欲なるものは、畢竟、足ることを知らないところから、無限に起つて來る。故に先づ諸の苦惱を脱せんと欲せば、當に知足を觀すべしと冒頭に説き起された。即ち此の觀法によつて諸の苦惱を脱し得られるので、多求貪欲の苦惱なき處、即ち是れ富樂安穩の處である、と斷案を下されたわけである。

知足の法は何故富樂安穩の處であるか、知足の功德を更に説かれ、不知足に對照し、富と樂との二つを以て、安穩の意義を示されてある。觀法の要は、一に心に

在るので、心を修め眞に足ことを知るならば、心常に充足して不足不平の念を惹くべき何ものもない。富とは元來充足を豫想し、貧とは即ち缺乏に名づけられるものと見られるが、心に足ることを知つて、不足の感なく、心自ら充足を得るならば、此の人は大なる富を得たものと謂ひ得られるので、足ることを知る人は、貧しと雖も而も富める所以である。又、足ることを知る人は、此れを斯様にしたい彼れは彼様にありたいなど、限りなき欲望の追求を爲すことがない、即ち儂はかなき煩惱妄情に逼られ、苦しめられるといふことがない、是れ大なる樂ではないか、また足ることを知れば、利を貪り、名を釣らんが爲めに、危険なる浮世の深坑に近づき、萬一を僥倖せんとする如きことが絶對にない。心に斯の大なる富を得、心に斯の大なる樂を得、而して些の危険も身邊に見ない、眞に安穩の處ではないか。知足の人を揚げて、地上に臥すと雖も、猶ほ安樂なりと爲す、といひ、不知足の者を抑へて、天堂に處すと雖も、亦意に稱はずと對せしめ、更に不知足の者は富めり、雖も而も貧しと疊みかけ、知足の人を重ねて稱揚して、貧しと雖も而も富めりと復た對せしめた、實に絶妙の警句である。

事實、世上凡俗の常態を見れば、正に斯の斷案を下さるべく、比々之れが大前提小前提を、その行實に示して居るではないか。見よ、假使財寶の多きを以てするも、假使田土の廣きを以てするも、假使居宅の宏麗を以てするも、假使官爵の顯榮を以てするも、假使權力の強大を以てするも、其の他有らゆる條件に於て、彼が豫て望みたる所を充たさしむるとするも、足ることを知らざる彼は、それらを得て以て未だ足れりとせずして、必ずや、尙ほその上に、更に多く、更に廣く、更に宏麗に更に顯榮に、更に強大に、更により充足せんことを欲して止まないであらう。得れば得るに従つて、心に足らず、心に充つるなきは、心、些の富を感ずることを得ない者、即ち富めりと雖も而も貧しき者ではないか。

知足の人の、貧しと雖も而も富める所以は此の正反の消息で、假使粗末な葛衣を身に纏ふとも、足ることを知れる彼に於ては、猶ほ上等の毛皮に裹まれたる如き温さを覺える。假使藜あかぢの合物あへものや藿まのほの汁を口にするも、足ることを知れる彼に於ては、猶ほ肥肉や美穀を食ふ味がある。假使茅屋の中に起臥し、樹下石上に坐すとも、足ることを知れる彼に於ては、猶ほ金殿玉樓に住まふと等しき思がある。

假使夜番の如き、下足番の如き、卑しき職を執るとも、足ることを知れる彼に在つては、猶ほ大臣大將と等しき榮光がある。眞に足ることを知れる彼は、事の何たるに關せず、自ら得る所に随つて、常に此くの如く、綽然しやくぜんたる餘裕を有し、心、恒に充ち足る、實に富樂安穩の處ではないか。

世界征服者の代表の如く目せられる、アレキサンダー歴山大王は、歐亞に跨る尨大の領域に、その權力威力を存分に振ひ、大王中の大王としての顯榮を擅しんにしたが、其の意に猶ほ物足らぬ何ものかゞあつた。當時賢者として知られたダイオゼネスは、住むに家なく、一個の樽の中に身を處おいて、乞食のやうな生活をしてゐた。しかも其の意は常に充ち足りてゐた。大王が親しく市井しせいに之れを訪うて、道を聞き、若し求むる所あらば、何にても意のままに給與せんと言へるに對し、大王の我が前に立つて日光を遮ぎり、我が暖を取るを妨ぐることをなきを望むと言ひ放つた。此の乞食哲學者には、物質的の欲望は何もなかつた。それだけ精神的に大なる富と樂とを有する安穩處を見出してゐた。黄金の王冠も、強大なる權勢も、嚴然たる威儀も、彼に於ては猶ほ糞土の如く、兒戯に等しき物に過ぎなかつた。地上の

何事何物にも、絶對の支配力を有するかの如く自惚れてゐた、さすがの歴山大王も、此の一介の乞食哲學者の前には、反對に大富豪の前に立てる乞兒のその如く、氣壓されてしまつた。大王は讚歎して言つた。「あゝ我若し歴山大王たるを得ずんば、ダイオゼネスたらん」と。物質的の富貴と、精神的の富貴とを、最も痛快に對照せるものとして、廣く人口に膾炙せられる所の話頭である。

明の石天基曰ふ、

平民、徳を種る惠を施せば、便ち是れ無位的卿相たり。仕夫、徒に權を貪り寵を市らば、竟に有爵的乞兒と成らん。

と、物欲を追はず、心に足ることを知る者は、徳を種る惠を施すことを得るだけの餘裕を有す。物質的の欲望のみを追求して、足ることを知らざる者は、たとひ顯榮に達すとも、心に満足安心を得ること能はず、たとひ欲しいと思ふ、是れ一個有爵的乞兒たるのみ。英雄歴山大王に於て、猶ほ此間の消息を窺はれる。英雄ならざる世俗凡庸、滔々として物質の餓鬼たらざるはない有様、常に五欲の爲に牽かれて、足ることを知る者の爲に、憐愍せられる輩のみである。痛歎すべきでないか。

いか。

老子曰く、

禍は足ることを知らざるより大なるは莫し。故に足ることを知れば常に足る。

と「論語」にも、孔子が顔回の賢を稱せる語に、

一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人其の憂に堪へざるも、回や其の樂みを改めず、賢なる哉、回や。

とある。古今東西、聖賢の見るどころ、其の軌一であるが、現代佛教徒中、一人のダイオゼネス、一人の顔回も見出し難きは、悲しむべき状態ではないか。

「八大人覺經」には、

心厭足(あきたる)なければ、唯多求にして罪惡を増長することを得。菩薩は爾らず、常に知足を念じ、貧に安んじて道を守り、唯慧を是れ業なりと覺知す。と説かれてある。本文の所説と全く歸旨同一で、苟も大乘佛教徒を口にする者之等の金訓を銘記し、自ら省み、自ら鞭撻して、多求にして罪惡を増長せしめざら

んことに努むべきである。

三 遠離の功德

汝等比丘。欲求寂靜無爲安樂。當離憤鬧。獨處閑居。靜處之人。帝釋諸天。所共敬重。是故當捨己衆他衆。空閑獨處。思滅苦本。若樂衆者。則受衆惱。譬如大樹衆鳥集之。則有枯折之患。世間縛著。沒於衆苦。譬如老象溺泥。不能自出。是名遠離。

汝等比丘、寂靜無爲安樂を求めんと欲せば、當に憤鬧を離れて獨處閑居すべし。靜處の人は帝釋諸天の共に敬重する所なり。是の故に當に己衆と他衆とを捨て、空閑に獨處して、苦本を滅せんことを思ふべし。若し衆を樂ふ者は、則ち衆惱を受けん。譬へば大樹も、衆鳥之れに集まれば、則ち枯折の患有るが如し。世間の縛著は、衆苦に沒す。譬へば、老象の泥に溺れて自ら出づること能はざるが如し。是れを遠離と名づく。

【字解】

●寂靜無爲安樂 「節要」に、寂靜を無我空、無爲を無相空、安樂を無取捨願空と釋してある。寂も靜もシヅカといふ字で、身も心も妄動なき境涯に名づけたもの、身心寂靜なれば即無爲である。無爲とは何も爲さぬといふのでない、一切の有相差別を超越し、總ての妄念妄情を離れた真人の視聽言動は、爲すがまゝに無爲の消息である。寂靜無爲にして、何物にも囚はるゝなきところ、即ち安樂である。佛弟子の求むる理想境は斯の寂靜無爲安樂に外ならぬ。●憤鬧 憤は憤憤と熟字され、心の亂るゝこと。鬧は擾鬧とて四邊の靜かならざるをいふ。●獨處閑居 憤鬧の反對で、獨り靜かな處に居ること。●帝釋諸天 帝釋は梵語で具さには釋迦提婆因陀羅といふのであるが、此の中の因陀羅が、漢語の帝の字に相當する意味を持つて居るといふ。此の譯語の帝の字の下へ、梵語の最初の釋迦提婆の釋の字を置いて、帝釋といふ熟字を作つたものだと解されて居る。譯語は「能主」欲界天の天主にして、能く佛教を護持する神としてある。諸天は六欲天、更に其の上の色界天、無色界天の諸天を總稱したもので、何れも人間界よりは遙に果報の優れた神界のことである。●所共敬重 天部の神々も靜寂の

境に閑居して、清淨の心に住する人をば、尊敬し重んずるといふので、寂靜無爲の境涯の尊さを示すのである。◎捨己衆他衆 己衆は自分の弟子その他近親者他衆は他人の弟子、その他其の眷屬等と見るのが一の解、更に之れを我を組成する所の四大五蘊を衆と見て、我が此の身を己衆と見、己の同侶弟子その他我に附屬せる一屬等、我以外の多くの他人を、すべて他衆と見る解釋もある。何れにせよ、己衆他衆を捨てるとは、主觀的にも客觀的にも、有らゆる繫累を離れた心身に成りきることである。◎思滅苦本 離苦得樂、安穩地に到らんとするのが、沙門の唯一の目的である。靜處に閑居し、坐禪冥想に耽るのも此の爲めであつて、一意、苦の本を尋ね、之れを滅すべき工夫を爲す所以である。◎若樂衆者 樂はネガフと訓む。所謂己衆と他衆とを捨てずして、此の身に着したり、或は近親眷屬等に心を引かれ、戀々たるが如き、即ち衆を樂ふ者である。◎大樹衆鳥集之則有枯折之患 大樹は自己の心に、衆鳥は附隨者の多きに、枯折の患は、衆の爲めに苦惱を受くること多きに、それ〴〵譬へたもの。◎世間縛著沒於衆苦 世間俗人の常態は、衆を樂うて、限りなき繫縛執着の爲めに、心身を囚はれ、自ら衆くの苦惱

中に没在するものである。◎老象溺泥 巨大なる象の體軀を以て、深泥に溺れては全く動きが取れない。衆の爲めに衆苦を受け、自滅を招く悲惨を、重ねて譬喩を以て示されたもので、二つの譬は、反面から對比的に、空閑獨處の勝れたる意義を、詮說せられたものである。

【講話】 此章は、遠離の功德を説かれたもの、即ち心を惑亂し、身を苦しむる因縁となるべき總てのものから、遠ざかり離れよと勸誡されたものである。何の爲めの遠離行かといへば、寂靜無爲安樂を求めんと欲するが爲めで、憤鬧雜沓の地を離れ、獨處閑居する、即ち寂靜を得んが爲めに、身心を寂靜にする、これ當然の條件でなければならぬ。教主釋尊が、樹下に端坐六年の行跡の如き、正に此の清範である。

長廬禪師の「坐禪儀」に

珠を探るには、浪の靜なるを宜しとす。動水には取ること難かるべし、定水澄清なれば、心珠自から現す。

とあるが、吾々内面の心水を攪亂し、有相差別の前波後波を、起伏相續せしむるも

のは、所謂己衆他衆の繫累である。故に之等の繫累を一切遠離して、空閑に獨處し、心水面の澄清に努めることが肝要である。

「百喻經」の中に、愚人の三層樓といふ面白い譬喩が説かれてある。或る處に、おろかな金満家があつた。或る日他の某金満家の家に招かれて往つたが、某の家には、素晴らしい立派な三階の樓閣が新築されて、其の第三層の高臺に於て手厚い響應を享けたのであつた。おろかな金満家は、浮世放れのしたやうな立派な高樓に立つて半空を仰ぎ、また下界を俯瞰して、むしろやうに悦に入つたが、急に自分もそれが欲しくなつた。自分だつて財産は某に劣らぬほど持つて居る。一つ某のよりも優つた立派な三層樓を建て、日夜展望の快を得ようと、早速大工の棟梁を呼んで命じた。大工は「あれは矢張り私が建てたので、あれと同じでよいなら直ぐにも作つてあげませう」と早速引受けて、地所を見計らひ、造作に取りかゝつた。おろかな主人は、大工の仕事を見てゐたが「お前は何をそんなに愚圖々々して居るのか」と尋ねた。「ハイ三階を組み立て、居るのです」と云つて土臺から一階二階と説明したが、主人は「どうして、了會が出来ないで、イヤおれは、そんな面倒くさい下の二重の仕組なんか要はないのだ、早く三階の高い立派なやつを建て、くれ」といつて、大工が如何に説いて聞かしても承知しない。大工もつひに持て剩して「それは、逆も私には出来ません」と手を引いてしまつた。おろかな金満家は、斯くて他の三層樓を羨望するのみで、自らは有り餘る資財を持ちながら、終に我が三層の高臺に坐することを得なかつた。

佛陀は、此の喩に附け加へて、凡夫俗人が、最勝の道果をのみ望み求めて、しかも精勤修行することなく、徒に欲を貪り苦惱を脱し得ざるは、亦實に彼の三層樓を望む愚人の如くである、といふやうに説き示されて居る。

三層樓上の展望を望むものは、先づ一階二階を築かねばならぬ。それよりも先づ土地を經營し土臺をしつかり固めねばならぬ。寂靜無爲安樂の道果を得んと欲せば、當に苦本を滅せんことを思はねばならぬ。苦の本を滅せんには、苦の因縁たる己衆他衆を捨て、靜寂の境に獨坐し、深思靜觀の工夫を爲さねばならぬ。試みに駈け足をしながら、冥想に耽けらんとして見よ。試みに縁日社頭の雜沓裡に、靜に想を練り、詩文を作らんとし、若くは深遠の哲理を探らんとして見

よ。如何に修養せる人、如何に意志堅固の者と雖も、冷靜よく其の目的を達し得難いであらう。

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆきゝの人を深山木に見て

なごゝ澄まして居ることは、枯木寒灰の如き無心禪に徹せる得力の道人にあらざれば、到底普通人間の不可能な業である。一寸した思索に耽るにも、喧噪雜沓は第一の妨害たるものではないか。何人の經驗によるも、沈思熟慮に、最も自然的にして、最も必要な條件は、靜處に獨坐することではなければならぬ。況んや最尊、最勝の窮極理想たる無爲安樂涅槃寂靜の道果を得んと一意專念に勤修工夫すべき佛弟子に於て、絶對に喧雜紛亂の縁を謝して、靜閑の地に獨り坐禪觀法するといふのは、彼の三層樓に於ける階下地盤の如く、誠に必須の條件であり、最適の作法であらねばならぬ。

境地、既に寂靜なれば、諸種の念慮は、おのづから絶する。萬念絶するところ即ち無爲である。無爲のところ生死の苦あるなく、生死の苦なき、是れ即ち大安樂

この境域に至れば、佛法の極地を窮めた聖者(小乗の佛とする羅漢)で、以て梵天帝釋の尊重恭敬を受くるに堪へたるものである。

〔碧巖集〕に「智門般若體」といふ一則がある。圓悟禪師が之れに評して次のやうな話を挿んで居る。

須菩提尊者、巖中に宴坐す。諸天華を雨らして讚歎す。尊者曰く空中に華を雨らして讚歎する是れ何者ぞ。天曰く、我れは是れ梵天なり。尊者曰く汝如何ぞ讚歎する。天曰く、我れ尊者の善く般若波羅蜜多を説くを重んず。尊者曰く、我れ般若波羅蜜多に於いて、未だ嘗て一字も説かず、汝如何ぞ讚歎する。天曰く、尊者無説、我れ乃ち無聞、是れ眞の般若と。又、天地を動かし、華を雨らせり。

須菩提尊者は、佛陀の十大弟子中、解空第一を以て稱せられ、般若真空の理に於て最も深く悟了せられてゐたと傳へられるが、此の天人との問答の如きは極大乘の教理を戲曲的に説いたものと見られる。般若真空の理の如何なるものであるかの概説は、茲には容易の業でもなく、預りとして置くが、靜處の人は帝釋諸

天の共○敬重する所なりとの、本文に對する引例として、茲に揚げたわけで、寂靜の境に、無爲の法を修得する人の、如何に尊貴なるかの面目を看取さればよい。尙ほ本文は二節に分けて見られるので、初めから苦本を滅せんことを思ふべしまでを前節と爲し、専ら遠離の意味を強く説かれたものである。次の「若し衆を樂ふ者は以下が後節になつてゐて、これは遠離の反對を擧げて、衆苦の如何に恐るべきかを示し、衆鳥と老象の二喩を用ひ、苦惱を滅せんが爲めに、早く遠離すべしと誠められたもので、文義は既におのづから明瞭であらう。

四 精進の功德

汝等比丘。若勤精進。則事無難者。是故汝等當勤精進。譬如少水常流。則能穿石。若行者之心。數數懈廢。譬如鑽火。未熱而息。一欲得火。火難可得。是名精進。

汝等比丘。若し勤めて精進すれば、則ち事として難きもの無し。是の故に汝等當に勤めて精進すべし。譬へば、少水も常に流るときは、則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心、數數懈廢すれば、譬へば火を鑽る

未熱而息。一欲得火。火難可得。是名精進。

に、未だ熱からずして、而も息むときは、火を得んと欲すと雖も、火得べきこと難きが如し。是れを精進と名づく。

【字解】

精進

梵語の毘梨耶を譯した語で、菩薩が必修すべき法とせられる六波羅蜜の一である。精は精勤進は進取事に當つて専念努力すること、之れに

事の精進と、理の精進との二つが説かれる。事とは事實(客觀的)の方面で、行狀の上に、惡を止め善を勤めることに勉勵すること。理とは理想(主觀的)の方面で、心想空寂、一念不生の境に到らんと努力して息まぬこと、これ眞の精進であるといふやうに解釋されてある。●少水常流則能穿石。精進の結果を示されたので、水は至弱のもの、石は至堅の物であるが、至弱を以て終に至堅を破る、乃ち精進不息の結果を譬へられたのである。●數數懈廢。中途に於てたび／＼怠り止める即ち精進の正反。●鑽火。原始的の古代に於ては、火を得るに、木と石とを摩擦して、其の熱によつて發火せしめたもので、鑽の字はキルまたモムの訓がある。即ち石を木に當て、揉むが如く、切るが如くするのである。木の中でも檜など

が最も發火し易く、主として火を取るに用ひられた、ヒノキ即ち「火の木」である。

●未熱而息。未だ木片に火氣を生ずるほどの熱度に至らずして、早く摩擦をやめることである。

【講話】 この本文僅かに六十字、いふまでもなく精進の二字が其の骨子である。譬喩を用ふること、少水と鑽火と、交互錯綜して、文辭の巧妙をきはめ、深義を言外に響かして、餘韻盡きざるものがある。

前章と同じく、此の章に於ても文おのづから二分して見られる。首めは正しく精進を明かして、少水穿石の譬を示し、中ごろ「若し行者の心……」以下は反面より不精進を擧げて鑽火の譬を示されてある。

何事を爲すにも精進、即ち一意專向、勉めて倦まざることの必要なるは、多くいふまでもないことで、努力なき成功は曾て有り得ない。而して精進だにあらば所謂「精神一到何事か成らざらむ」として難きものなし、深甚なる佛法の海も、精進不怠、つひには以て其の底に徹し得べく、高遠なる證上の山も、不怠精進、以て其の頂を極め得べきである。

謂ふところの精進は、急進躍起の意味とのみ取つてはならない。永平道元禪師は、

時光の太だ速かなるを恐怖す、所以に行道は頭燃を救ふが如くす。身命の牢からざるを顧眄す、所以に精進は翹足に慣ふ。

と、學道の用心を示し、學人を策勵して居る。即ち無常迅速の世相を諦觀し、恰も頭に火のついたのを揉み消すが如き、將た鳥の飛び立たんとして足を翹てるが如き、緊張した、撓みなき意氣を以て、暫くもさし措かずして學道修行にいそしむこと、これ精進の面目であるが、しかも急進焦躁に失すれば、一時的の銳氣に過ぎずして、多くは早く精力を疲らし、中途退轉し、易きを免れない。

おこたらず行かば千里の外も見む
牛のあゆみのよしおそくとも

内に勇猛不退の精魂を蓄へて、不屈不撓に前進向上を續けてゆく、怠らずゆく牛の歩み、精進の眞消息はそこに見られる。本文の、少水も常に流れて息まざれば、終に能く石を穿つに至るといふ譬も、こゝに意義づけて見らるべきである。

〔老子〕にも

天下の柔弱なるもの、水に過ぎたるはなし。而して、堅強なるものを攻むるに、之れに能く勝つものなし。

とある。柔弱の水、終に能く石を穿つは、點滴反覆、力の繼續による。精進の行道振り、正に斯くの如くあるべきである。

〔元享釋書〕の明證法師の傳には、少水穿石の譬が事實に示されて居る。明證、年甫めて十歳、元興寺に入つて、法相宗の學問を修めた。専心勉強をつゞけたが、せうも思ふやうに智識が進まないで、悲觀絶望し、別に他の良師を求めんものと、元興寺の門を出で、フト軒下を見ると、雨滴の爲めに打たれて、石に穴の出來て居るのが眼についた。是に於いて大に感悟發奮し、復た寺内へ取つてかへして、更に精進辨道し、後には學德一世に高き善知識となり、清和天皇の勅を受けて、僧都に任せられたといふ。正に此の節の本文に裏書した好範例である。

佛道修行は、容易の業でない。證果を得んが爲めには、眞に命がけの精進を要する。古今東西の名僧高德の勝蹟は、何れも之れを事實に明示されざるはない。

名僧達のみでない、世間の碩學大人と稱する人々に於ても、其の生涯は全く努力精進の結晶ならざるはない。

雨森芳洲は、徳川時代に於ける有名な大儒で、對馬侯に仕へて文教を掌り、恒に韓人を接對し、その學問文章は、内外に著聞してゐた。

芳洲、年八十一に至り、始めて和歌を學ぼうと志した。自ら謂へらく、詩は時をり之れを作る、大に稱すべきなしと雖も、兎に角、平仄を謬らざる形だけは得た。而も和歌に至つては、此の年に至つて尙ほ其の法を全然知らぬ。和歌の法を知らんと欲せば、古今集を熟讀せねばならぬと聞いた。よしッ、今から後、古今集を讀むこと、一千遍、然る後自ら作歌すると一萬首、誓つて之れを爲さう。此くの如くならば、或は少しく其の道に通じ得られよう」と、世俗に六十の手習といふことはあるが、これはまた八十餘の頽齡で、何といふ壯な意氣であらう。

芳洲、それより二年間、その言の如く、古今集を讀み返すこと一千遍、三年にして和歌を作ること正に一萬首、時人その絶倫の精力を驚歎した。八十餘の晩年に至つて、尙ほ此の志氣を見る、芳洲の少壯時、その志せる學業に對して、如何に刻苦

黽勉したかゞ想見される。何事を爲すにしても、斯くの如き努力と根氣とあらば、如何なス驚鈍の材と雖も、竟に事の成らざるを憂ふるに足りない。

井を掘りて今一尺で出る水を

ほらすに出ぬといふ人ぞうき

火を鑽るに未だ熱からずして息む中途懈廢して精進の行を退轉するもの、衆俗此の類のみなるを悲まざるを得ない。聖訓に遵ひ、古賢を慕ひ、各自發奮し、鞭撻し、勤めて精進すべきである。

五 不念の功德

汝等比丘。欲求善知識。求善護助。無如不念。若有不念者。諸煩惱賊。則不能入。是故汝等。當攝念在心。若失念

汝等比丘、善知識を求め、善護助を求めんと欲せば、不念に如くはなし。若し不念有る者は、諸の煩惱の賊、則ち入ること能はず。是の故に汝等、當に念を攝めて心に在くべし。若し念を失する者は、則ち諸の功

者。則失諸功德。若念力堅強。雖入五欲賊中。不爲所害。譬如着鎧入陣。則無所畏。是不忘念。

徳を失す。若し念力堅強なれば、五欲の賊中に入ると雖も、爲めに害せられず。譬へば、鎧を着て陣に入れば、則ち畏るゝ所なきが如し。是れを不念と名づく。

【字解】

●善知識

「節要」に三種の知識が擧げてある。一には教授の師、二には同

行の友、三つには外護の人(保護者)これを皆善知識と名づける。知識の字義は、名を聞き徳を欽しむを知と謂ひ、形を觀て敬ひ奉ずるを識と曰ふ、と釋されてある。

又靈芝の觀經疏には、知は其の道德、識は其の儀貌と註されてある。兎に角、我に道を説き法を授ける先覺者を、佛教では廣く善知識と稱するのである。●善護

助。雲棲大師釋して曰ふ、知識是れ師なり、護助是れ友なりと、我が修業を成就するやうに、直接間接に援助を與ふるもの、即ち同行の友のことである。尙ほ物質的に援助して、衣食住の安定を得しめ、以て専心に辨道せしむるなども、善護助の一と見られる。●無如不念。行住坐臥に、正念を失せざること、乃ち懈怠なく觀念を續くること。●煩惱賊則不能入。正念と妄念とは兩立しない。正念を

忘るゝところ、即ち忘念で、忘念即ち煩惱である。故に正念相續して居れば、煩惱の賊の入る間隙がない。◎攝念在心。如何にして忘念なるべきかをいふ。起信論に「心若し馳散せば、當に攝し來りて正念に住すべし」とあり、住法記には「常に守りて失はざれば、縦ひ境に従つて心起るとも、常に自ら知覺するが故に」とある。心は體念は用、その體既に正しければ、その用おのづから亦正しかるべきである。◎若失念者則失諸功德。〔節要〕に「失念は始ありて終りなきなり。終りなきときは三慧(聞思修)を失す。三慧失すれば聖果階るべきなし」とある。◎着鎧。念力は堅強に喩ふ。◎入陣。五欲の賊中に入るに喩ふ。

【講話】 此の章は、四節に分けて見られる。首めから「不能入」までは、忘念の大切なことを述べ、是故………在心は忘念になり得られる方法を明かし、若失念………不爲所害は、忘念の反對を擧げて、忘念の徳を明かし、且つ其の得失を比較して示し、終りの譬如………以下は、更に如上の意を宣明せんが爲めに、譬喩を用ひて、結ばれたものである。

佛道修行には、字解に説いたやうな、善知識善護助を得るといふことが、極めて

肝要である。しかしながら、此は他人の上になつて言ふことで、我自身のことではない。外にこの他人の助けを必要とすると同時に、内に我に於ては忘念に住するといふことが更に肝要である。教壇に立つ教師が、如何に大汗を垂らし、熱心に講義をしても、生徒が居睡りをしてゐたり、或は他の事でも考へて、ぼんやりしてゐたら、教育の効果は全然ゼロに歸するは、甚だ見易き道理である。

念とは正念、忘念とは即ち正念を相續して、四六時中、競々に管帶して、之れを忘失せざることである。念を攝めて心に在くとは即ちそれである。正しき道——佛道の聖果を得んと欲する者は、常住正しき念に住せねばならぬ。若し正念を失すれば、諸の功徳を失ふ。正しき道と遠かり、聖果に達すべき善法と相違するは當然である。反對に念力堅強、正念常に現前するならば、五欲の賊中に入ることも、爲めに害せらるゝ恐れはない。

〔起信論〕に

當に知るべし、唯心にして外の境界なきことを。即ち復た此の心も亦自相無し。

とあるが、五欲といひ、諸の煩惱の賊といふも、唯一心、一心の外に自相のあるわけ
でなく、正念といふも、唯一心、心外に求め来るわけでもない。正念を失するとき
念々悉く煩惱の賊である。念々正しきところ、即ち煩惱消滅である。徹底正念
のとき害せらるゝ心だの、害する煩惱だのと謂ふべきものさへない筈で、正念の
力堅強なる消息を、着。鎧。入。陣。と、譬喩一番して保證されて居るのである。

宗祇法師は、和歌の名手として、殊に連歌の宗匠として、一代に傑出した人であ
つたことは、世人の廣く知るところであるが、宗祇は幼にして出家し、戒律堅固の
清淨生活に入つてゐた。中年三十に及んで、當時の名家として聞えた猪苗代兼
裁に就いて、始めて和歌を學ぼうとした。兼裁應對していふに「お前さんは誠に
立派な天分を有つて居られる。しかし惜しいことに、少し遅れた、お前さんが若
しもう十年若かつたならば、必ず斯道の名人になれるだらうに」と、宗祇これを聞
いて大に發憤して言つた。「十年の月日は、長きに似て短いものでござる。私は
他人の二倍の勉強をして、他人が二十年かゝるところを、十年にして追ひつきま
せう」と、兼裁は宗祇の志氣を壯として、それより特に力を注いで、懇切に指導した。

學ぶ方の宗祇に於ては、それこそ寢食を忘れて刻苦勉勵した。勉勵刻苦は、つひ
に其の效果を見事に收め得て、後には長きあたりから「花の下もとの宗匠」の名を賜
つたほどの名手となつた。實に、前章の精進の例話にも相應こたはしい美談である。

宗祇すでに歌の道に於て妙諦を得てよりは、旅泊を家とし、風月を友とし、悠々
然、飄々乎として、世俗紅塵の外に吟詠自適し、以て擅に風懷を遣つた。曾て例の
如く行脚かんぎしてゐた時、盜賊に出會つたことがあつた。宗祇は賊のいふがまゝに
所持の金品は勿論、着てゐた衣服まで興へた。取るだけのものを取りあげた賊
は、尙ほしげ／＼宗祇の顔を見てゐたが「おい其の銀のやうな長い髭あひげも貰ひた
いもんだ」と云ひ出した。何の必要があるのかと訊くと、拂子ほすの毛に賣れば好い
値かになる、このことであつた。と、宗祇は兩手にその美しい銀髭を握つて微笑し
ながら

わがために拂子ばかりはゆるせかし

ちりの浮世をすて果つるまで

と即吟した。賊は宗祇の洒脱無我な風格に、痛く感じて、これは普通たみの旅僧では

ないど、畏敬の念にうたれ、髻を求むることを止めた上、奪ひ取つた衣服金品を殘らず返し、一禮して去つたといふことである。

宗祇法師の風懷、眞に自然の妙致に於いて、心契會通する所あつた面目が窺はれるが、歌の道に於て徹底した宗祇に於ては、その胸次不斷に歌の道を離れなかつたので、遭難咄嗟の間と雖も、口を銜いて洒脱な口吟が出来たものであらう。即ち彼は歌人として、歌道に於ける不忘念を得てゐたものと謂ふことが出来るではあるまいか。佛道修證の上に於ても、常住正道を離れぬ、所謂不忘念の様子は、まさに之れと同般なるものがある。

六 禪定の功德

汝等比丘。若攝心者。心則在

汝等比丘、若し心を攝むる者は、心則ち定に

定。心在定故。能知世間生滅

あり、心定に在るが故に、能く世間生滅の法相を知る。是の故に、汝等常に當に精勤して諸の定を修習すべし。若し定を得る者

法相。是故汝等常當精勤。修

て諸の定を修習すべし。若し定を得る者

習諸定。若得定者。心則不散。

は、心則ち散せず、譬へば水を惜む家は、善く

譬如惜水之家。善治堤塘。行

堤塘を治むるが如し。行者も亦爾り。智

者亦爾。爲智慧水故。善修禪

慧の水の爲めの故に、善く禪定を修して漏

定。令不漏失。是名爲定。

失せざらしむ。是を名づけて定と爲す。

【字解】

◎攝心

攝はヲサメルと訓み、散亂して居るものを、一處にアツメ、マツ

メルといふ意味の字である。吾々の心は實に少時も停住して居らぬもので、六

根が六境に轉せられて、前念後念、絶え間なく動き遷つて居る。即ち散亂粗動の

状態に在るのが凡夫の心である。斯の心を收攝して始めて、前章の不忘念も得

られるわけである。◎在定 散亂の心を收める法門、それを定と名づけるので

ある。定は古くより常に禪定と、二字重ねて用ひられて來て居るが、本來の原語

は禪と定とは別で、禪は禪那なる梵語の略、譯語は靜慮であり、定は梵語の三摩地

(或は三摩提とも書く)の譯語で、三摩地には、外に等持、又は正心行處などの譯語も

ある。しかし龍樹菩薩の「大論」には「一切の禪定攝心は皆三摩提と名づく」とあつ

て、是れに依れば三摩提の中には、禪も定も總括されて居るものと見るべきであ

る。要するに、正定は邪散の反對、靜慮は動想の反對と釋義されて、明鏡止水の如くに、心を一境に住せしめ、清澄ならしむるといふ點に於て、禪定と熟字し、これを一の道法と見て差支へないと思ふ。◎能知世間生滅法相。禪定の法に就するときは一心清澄、恰も明鏡の萬象を映すが如く、猶ほ高峰頂上より俯瞰する如く歴々分明に、世間の有らゆる諸相が知り得られる。是れ此の優れた道法の果用現前である。◎惜水。惜むとは大切にすること、本來佛性の智慧の働きに喩ふ。◎善治堤塘。これは定禪に譬へたもので、次の本義を宣明せんが爲めの施設である。◎行者亦爾。世俗の水を愛惜する者は、善く堤塘を治めて之れを放流しない。佛道修行者もその如くで。◎爲智慧水故善修禪定。即ち眞實智慧の水を護念し、常に湛へ置くやう、禪定の堤塘を完全に修治せねばならぬ。◎令不漏失。堤塘完備すれば、水は漏失することがない。禪定あれば、智慧を失はぬ。

【講話】 前章に於ては「念を攝めて心に在くべし」と不忘念の法を説かれたが、此の章に於ては更に「心を攝むる者は、心則ち定に在り」と前章の意を躡いで語を起し、禪定の法を説かれてある。即ち道に入らんするには正念に住せねばならず、正念に住せんとせば、先づ心の散亂を靜止せねばならぬ。而して正念正定ならば、天空海澗、迷妄の雲霧消散して、眞如空靈の月、おのづから皎潔の光を放つ、即ち萬法を諦觀して、錯ることなき、本具眞實の智慧が光を放ち、是に於て始めて佛道の修證圓成することが出来るといふわけで、前章の不忘念、此の章の禪定而して、次章の智慧と、次第に關聯して見られるのである。

昔、印度のさる王國が、非常によく治まり、國富み民榮え、萬民鼓腹擊壤の樂みを得てゐた。賢明なる國王は、ますく善政を敷かうと、種々尙ほ考へてゐたが、重臣を召して命せられるやうに「我國内は幸によく治まつたが、隣國にはまだく善く治つた國もあらう。汝今より隣國に往き、あまねく巡遊して、篤と視察し、若し何にても我が國にないものがあつたら、如何なる高價をも辭せず、必ず求め持ち歸れ」と、重臣は王命を奉じ、早速旅裝を整へ、隣國に入り、國中落ちなく仔細に探究して歩いたが、隣國には之れとて、自國に優つたものが見當らなかつた。あきらめて最早歸國の途に就いたが、或る町中を通つたとき、一軒の大きな店に、一人の老翁がボツネンと客待顔に坐つてゐるのが目についた。見れば商品らしい物

は一つも置いてない。注意深い彼の重臣は、これは確かに變つた商店に違ひないと思つたので、ツカ／＼とはいつてゆき、一体何を商賣なさるかど訊ねて見た。果してそれは珍らしい商賣であつた。老翁の答へによると、有形な物質を賣るのでなくて、無形の智慧を賣るといふのであつた。智慧の價幾何かと問ふと、即時拂で五百金だといふ。重臣は暫く考へてゐたが、智慧の賣物とは世にも珍らしい。これは我國にもない。目の前に五百金を耳を揃へて出した。老翁は、然らばお渡しする、しかし無形の智慧の寶であるから、手渡しすべき何物もない。今私が口誦するところを、よく頭に入れてお持ち歸りなさいと誦出した言葉は、

長く慮り諦かに思惟し、當に卒に怒を行ふべからず。今日用ひすと雖も、會ず當に用ふる事あるべし。

といふ四句であつた。重臣は、これが五百金かと、つまらないやうにも思つたが、兎に角それを誦誦して歸途を急いだ。我が家の門前に着いたときは、黄昏時であつた。上りそめた夕月の明りに透して見ると、家の上り口には見慣れぬ履物が一足ある。これは怪しいぞ、若しかすると俺の留守に女房があだし男でも引

き入れて不義をして居るのではないかと、ちらと疑雲が徂徠すると忽ち暗鬼を生じ、テツキリそれに相違ない、おのれ何うするか見ると、妬みと怨みの齒を噛んで、懐ましい勢で飛び込もうとしたが、フト途すがら誦誦して來たかの五百金の文句が意識の表面に現れた。それによつて僅に猛り立つた瞋心を押し鎮め、強ひて平靜を裝うて家に入ることが出來た。

今歸つたといふに、妻は愛想よく迎へてくれない。これはいよいよ訝しいと思つてツカ／＼奥へゆくと、思ひがけない、妻の母親が一室から飛んで出て、いそ／＼として挨拶をする。段々聞くと、數日前より妻は大病で床に就き、實家から老母が看護に來て居るのだと知れた。

重臣は彈かれたやうに跳びあがつて「あゝ安い／＼」と連呼するのであつた。老母や妻が、何の意味とも解せず、呆氣に取られて居ると、重臣は徐ろに、かの五百金の智慧の寶を買つて來たことを語り、若し私が此の寶を買ひ取つて來なかつたら、アノ狂ほしい氣分で何をし出かして居たか知れない、恐らく二人の貴い命に危害を及ぼすほどの大罪科を犯したであらう。思へば五百金の寶安いとも安

いものである」と言つて互に喜んだといふ話である。

凡夫が無始以來、煩惱惡業の爲めに自ら苦しみ、聖道といよく遠ざかるといふのは、正しき道理を見得る眞實の智慧を味^くますが爲めで、その智慧の光を覆ふ所のものは、貪瞋癡の三毒より、諸多の煩惱を生じて、心を散亂粗動せしめ、限りなく邪念邪心を惹起するが爲めである。不忘念、禪定、智慧と此處三章にわたりて説かれたのは、正に之れが對症療法的施設で、即ち念を攝めて心に在く、不忘念とは、之等の邪念邪心を收攝して、本來具有の正念に住せしむること、心を攝むる者は、心則ち定に在りて、正念相續の法に於て徹底するところ、即ち是れ禪定、禪定を得て始めて五欲六塵に馳走する粗動の心を制止することが出来、諸多の煩惱を影を潜むるところ、即ち智慧の光明輝きわたり、能く世間生滅の法相を知る、萬事に接し、萬相を觀照して能く宜しきに適^なひ、正しきを失ふことなきを得るのである。智慧に關しては、次章に懇説されてあるが、實に智慧の明に依つて煩惱の闇を破り、解脱の窮極目的が達し得られるのである。

彼の四句の偈^うを、五百金に買ひ取つて持ち歸つた重臣の話は、こゝに最も味ふべき意義が含まれて居ると思ふ。四句の偈を誦して歸つて來たのは所謂不忘念に引き當てゝ見られる。而して一足の履物を見て、忽ち疑心暗鬼を生じたところに、凡夫迷妄の散亂心の様子が見えるが、長く慮り諦かに思惟する「云々の偈を思ひ浮べて智慧の寶を持ち出した所は、能く堤塘を治めて水を漏失せざらしめた貌^{かたち}で、正しく禪定により、智光を味まसानかつた様子が見られるではないか。

禪那波羅蜜といつて、此は前に説かれた精進や、次に説かれる智慧と同じく、六波羅蜜の一で、佛教の實地修行には、この禪定を無視しては實力が得られない、極めて大切な道法である。自力聖道門は勿論、他力淨土門にしても、その清淨信念の状態は、知らず識らずの程にせよ、必ず此の攝心禪定に適^なはせる功德があるといふことを忘れてはならない。常に當に精勤して諸の定を修習すべし、禪定は斯くの如く重要であるが、諸の定とあつて、禪定にも種々あることが見られる。通常四禪八定といふことが説かれるのであるが、詳しい解釋は、こゝには預りとして、その名稱だけ擧げて見れ

ば、一に有尋有伺靜慮。二に無尋無伺靜慮。三に離喜靜慮。四に離喜樂靜慮。これが即ち四禪。この四禪の上に更に次の空無邊處定。識無邊處定。無所有處定。非想非々想定の四を加へて八定といふので、實は四禪と四定とである。これらの禪定は、外道に於ても、又聲聞緣覺の小乘に於ても、皆修習される所であるが、大乘佛教に至つては、更に三乘、一乘、金剛乘など種々の禪定が説かれてゐる。殊に禪定に最も重きを置き力を注ぐ所の禪宗に於ては、如來禪だの祖師禪だの、名目も立てられ修禪の方法も詳細に説かれてある。要するところは「圓覺經」に

無碍清淨の慧は皆禪定に依つて生ず。

とある如く、修禪の要は、眞實智慧を現前せしめんが爲めで、定慧均等、以て始めて道を得られる所以である。

本文の結構は四節に區分される。「若攝心者……知世間生滅法相」が第一節で、正しく禪定の功德を示し「是故……修習諸定」の十二字が第二節、これはその修業を勧めたもの「若得者心定則不散」と重ねてその功德を説かれたのが第三節

而して最後に「譬如……」以下は譬喩を設けて結勸とせられたものである。

七 智慧の功德

汝等比丘。若有智慧。則無貪着。常自省察。不令有失。是則於我法中。能得解脫。若不爾者。既非道人。又非白衣。無所名也。實智慧者。則是度老病死海。堅牢船也。亦是無明黑暗大明燈也。一切病者之良藥也。伐煩惱樹之利斧也。是故汝等。當以聞思修慧。而自增益。若人有智慧之照。雖是肉眼。而是明見人也。是名智

汝等比丘、若し智慧あれば、則ち貪着無し。常に自ら省察して、失すること有らしめざれ。是れ則ち我が法中に於て、能く解脫を得。若し爾らざるものは、既に道人に非ず、又白衣に非ず、名づくる所無きなり。實智慧は、則ち是れ老病死の海を渡る堅牢の船なり。亦是れ無明黑暗の大明燈なり。一切病者の良藥なり。煩惱の樹を伐る利斧なり。是の故に汝等當に聞思修の慧を以て而も自ら增益すべし。若し人、智慧の照あれば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見

慧

の人なり。是れを智慧と名づく。

【字解】 ①智慧。六波羅蜜の一、梵語の般若を譯したる語で、禪定より生ずる所の勝果に名づけたものである。②無貪着。貪着愛着、これ凡夫の病で、迷妄の情は皆之れを本とするのであるが、僅に智慧を開き、悟得する所あれば、亦その悟に貪着する。故に石頭禪師は「事を執するは本と是れ迷、理に契ふも亦悟に非ず」と喝破されて居る。馬鳴菩薩は智實義處の障と世間事處の障といふことを論じて居るが、之を約して通常は理障と事障といつて居る。事障は事實の上の墮迷で、世間上の粗雑な迷のこと、理障の方は理想上の障で、荒々しい迷の取れた後に悟の上に就て又貪着を起す、是れ亦一の迷である。此理事二障の全く無くなつたのが無貪着である。③常自省察不令有失。智者は一切時に於て事理の二障を察知して、之を生ぜざらしむ、若し二障生ずるときは、即ち智慧の明を失ふからである。④於我法中能得解脫。徒に身心を勞して、竟に得る所なき外道の如き法ではない、我が佛法は解脫を目的とし、寂靜安穩の境界に達する、其の解脫は眞實智慧によつて得られるのである。⑤道人。出家のこと。⑥白衣。在俗の

人(九十七頁參看) ⑦實智慧。眞實超世間の智慧、所謂世間智ではない。苦集滅道の四諦の法を達觀し、能く煩惱を斷する底の智慧をいふのである。⑧老病死海。老病死に生を加へて四苦といふ。他なし此人生をいふので、此の四能く群生を沒溺するが故に、海を以て譬としたのである。⑨堅牢船。吾々等しく此の苦の海に漂うて居るものであるが、若し眞實智慧を得るならば、堅牢の船に乗るが如く、覆没の患は無い、必ず彼岸に渡りつくことが出来る。⑩無明黑暗。無明は煩惱の異名と見てもよい。迷妄の體に名づけて無明といひ、其用を煩惱と名づける。無明煩惱は眞實智慧を壅蔽するもの、智慧の光至らぬところ、即ち黑暗である。⑪大明燈。實智の光明に譬ふ。三慧の中に強ひていへば、智慧に當る。⑫一切病者之良藥。藥は三慧の中の修慧に喩へたもの、病とは無明煩惱の累をいふ。「涅槃經」には貪病を除く藥は寂靜、瞋恚を除く藥は清涼、癡病を除く藥は明了とある。⑬伐煩惱樹之利斧。實智を以て障惑を斷じ、乃ち以て聖果を證得する。その斷惑の智慧を利斧に譬へたのである。⑭聞思修慧。念を攝めて法理を聞く、これ聞慧である。自ら思惟して理を究む、これ思慧である。修行して倦

まず能く果を證す、これ修慧である。此三慧は三世諸佛の皆依るところであれば、佛弟子たるもの必ず修習せねばならぬ。●雖是肉眼而明見人「大智度論」に五眼が擧げてある。曰く、肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼、即ちこれであるが、眞實智慧の照明するところ、肉眼のまゝにして、他の四眼を具足すると同じく、明に宇宙の眞理を觀ることが出来るといふのである。

【講話】 智は眞心の體、慧は其用である。今日世間の心理學では、理智と情意とに分けて説くが、扱ふところ大体佛教哲學でいふ眼、耳、鼻、舌、身、意の六識の域を出でない。近頃潜在意識などの名も盛に用ひられるやうになつたが、それも佛教でいふ第七識の了別作用の一部をいふものらしい。今茲にいふ眞實智慧とは、所謂六識の妄想分別を離れ、更に第七識第八識をも透過して、第九識の無碍清淨なる心體の光明を謂ふので、世間の心理學などで扱ふところの理智なるものに比して、深淺の程度を異にした消息がある。

然らば、その無碍清淨なる心體の光明は、如何にして作用を顯はすかといふに、それは矢張り六識の上に顯はされるのであるが、所謂貪着無しで、字解の下に述べたやうに、事理二障を離れた本具の智光現前である。無碍清淨なる所以、實にこゝに存するのである。此の章に説かれる智慧とは、斯ういふ意義のものであると、先づ概念を確と得て置く必要がある。

本文三節に分たれ、初めに「若有智慧……又非白衣無所名也」と先づ法を授け次に「實智慧者……伐煩惱樹之利斧也」と船と燈と藥と斧の四喩を擧げ、終りの「是故汝等……」以下は即ち勸奨である。

人若し眞實智慧の光明を輝かして、味ますことなければ、境遇に束縛せられず何事に對しても些の執着心を起さない。執着なきは即ち煩惱を離るゝ所以である。故に常に自ら心をこゝに用ひて以て、無碍の智慧を失はざらんと勉めねばならぬ。斯くの如く智慧の明を失はざれば、佛法の中に於て必ず解脱を得べく、然らずして智慧の明を失はんか、心中闇然として正しき道理を觀ることを得ない。正しき道理に合はざる者は、その形こそ出家であれ、既に道人と謂ふべからずと云つて落飾染衣の身であれば、之れを在家とも謂ふべからず、全く名づくる所なきえたいの知れないものである。

以上は第一節の教意であるが、「既に道人に非ず、又、白衣に非ず」といふに就て「佛藏經」の中に蝙蝠僧の譬が見えて居る。それは蝙蝠といふ奴は、鳥に似て鳥に非ず、鼠に似て鼠にも非ざる形をして居るが、彼が鳥を捕へんとするときには、穴に入つて鼠となり、又、鼠を捕へんとするときには、空に飛んで鳥となる。而して實は眞の鳥の用も、眞の鼠の用もないものである。その身は臭穢にしてたゞ暗冥を樂しむ。破戒の比丘も亦此くの如くである。既に清淨大衆の中に入らずして自ら恣にし、又王者の使役に入つて一般臣民の務めをも爲さぬ。これ白衣と名づけず、出家と名づけず、屍を焼きたる殘木の復た用ふべきなきが如きのみ……と説かれてある。今の世斯の蝙蝠僧は到るところに跳梁して居るのを見受けられる。淺ましといふも今更である。

第二節の堅。牢。船。大。明。燈。良。藥。利。斧。の四喩は、意義既におのづから明かだ、以て智慧の功德の如何に大なるものなるかを知るべきである。併しながら斯くの如き眞實智慧を得るといふことは、容易のことでない。前にも云ふ如く、こゝに所謂智慧は、世間通常にいふ所の才智とか、智能とか、知識とかいふ分別解了の差別

相對智でなく、本具佛性の光が顯はれた絶対無碍の智慧である。相對差別の智見解會を以てしては、事に滯り理に執し、如何に道理を明め得たるが如きも、ついに解脱の域に入ることには出來ない。之れを世智辯聰と名づけて、佛道修行の上では、強く戒め斥けられる所である。

昔、或る長者の夫人が妊娠したので、長者は佛陀を請じて種々の供養を爲し、腹の中の兒が男あるか、女であるかを鑒別して貰つた。佛陀は、たしかに男子で、しかも端正殊好、生長の後は世間の有らゆる幸福を受くるのみならず、後には道に入つて羅漢果を得ると、明かに豫言された。

數日の後、常に長者の家に入人して居る、一人の外道が訪ねて來たのに對して、長者は佛陀の豫言を語り、且つ更に外道の鑑識を乞うた。外道は常に佛敎の流布を妬んでゐたので、それは途方もない妄言だ、腹の中の子はたしかに女子だ、と反對に出たが、若し男が生れたら、長者は全く自分を棄て、佛陀に歸依するであらうことを恐れたので、即坐に詭辯を弄して、長者よ、實は胎兒は男であるが、あまりお氣の毒故女子と申した。それは此胎兒は頗る性質のわるい子で、此子成長

せば、貴家一族は此子の爲めに大凶難を蒙り、家室眷屬、恐らく七世まで斷絶するであらう。佛陀は媚びんが爲めに、端正殊好の幸福の男子などと妄言を爲したに外ならぬ、自分は長者にお氣の毒だから、あからさまにも言ひかねて、女子と言つたのである」と、口にまかせて述べ立てた。

長者はこれ聞いて苦悶に堪へなくなつた。外道は、こゝだばかり、「我に一神法がある。能く以て此の災厄を免れしめ得られる」と言つた。長者は是非にと其の修法を願つた。

一兩日を経て、外道は長者の夫人を招んで、いよく其秘法を行ふことになつた。外道は頻りに夫人の腹を按摩して流産せしめんと企てた。その結果無慘にも誤つて夫人を死に至らしめた。然るに胎内の兒は、不思議にも助かつた。しかし是れ不祥の子なりといつて、母親と共に一片の煙に附せんとしたが、如何なる勝れた宿業にや、火にも焼かれずして、蓮華の上に安らかに生存してゐた。その相好は佛陀の豫言の通り、世にも優れた端嚴の面貌であつた。

佛陀は、之れを憐んで、人に命じて救ひ取らせ、長者の家に送り届けさせた。此

兒はそのまゝ、長者に愛育せられることになつたが、漸く長じて十六の春を迎へた頃には、才學藝能、萬人に秀で、實に立派な男子になつた。一日大會たいふを設けて知友を招き、さきの外道をも其の席に請じて供養をした。

外道は横柄わづらひな態度で坐に着いたが、突然カラ／＼と高笑ひをした。人々何がをかしいのかと尋ねると、「イヤサ今五萬里外の遠い山中で、一疋の猿が水に落ちたが、其落ち様が如何にも可笑しかつたので、つい思はず笑うたのさ」と尤もらしい顔容かほで言ふのであつた。

長者の子は「外道の馬鹿者め、曩さき日の失敗にも懲りず、まだあんな好い加減な出たらめを言つて居る」と肚はらの中で、却つて外道を笑つてゐたが「今に見ろ！」と何か考へてゐた。

やがて種々の珍味を鉢に盛り、其の上に飯を蓋うて外道の前に供へた。他の人々の前に出したのは何れも珍味が上に出してあつた。と、外道はツンとして箸を執らうとしない、長者の子は、言葉叮嚀に「どうぞお箸を」といふと、外道は、この一座の衆中に於て我のみに珍味を除くは怪しからん」と立腹して云つた。長者

の子はすかさず「ハテサテ君の眼は不具であるか、五万里外をも見透す人が、何故に飯の下の珍珠が見えぬのであらう」とカラ／＼と笑ひ返した。外道は大に愧ぢ且つブリ／＼怒つて、席を蹴つて歸つて往つた。其の後に又ドツと一座の人々の嘲笑が浴びせられた。

所謂世智辯聰で、耳口三寸の學識智能を以て、世を瞞着する學者宗教家は現代に於て其のあまりに多きに苦む状態である。それらは皆此の外道の亞流たるを免れまい。

然らば如何にして眞實智慧は得らるべきかといふに、第三節の勸奨となつて聞思修の慧を以て自ら増益すべし。此の三慧圓成して始めて智慧の照現はれ肉眼にして而もこれ明見の人たるを得るのである。と實地修行の順序を示されたのである。古歌に

耳に聞き心に思ひ身に修せば

いつか菩提に入るぞたのしき

とあるは此の三慧を解り易く歌つたものである。道霈禪師は次のやうに釋し

て居る。

耳に達するを聞といひ、理を究むるを思といひ、行を起すを修といふ。聞慧なければ覆へれる器の水を受くると能はざるが如く、思慧なければ漏器の受くると雖も而も失せるが如く、修慧なければ穢器の漏失せずと雖も、而も穢れて用ふべからざるが如し。必ず三つの者具足すること、器の既に仰いで、且つ完く、而して復た清淨なるが如くなるべきなり。

と、桶を伏せて置いたのでは水を入れられない、桶を正しく置くと底がなく、は入れた水が漏れてしまふ、底があつても肥桶に溜めた水は飲まれない。不念により、正念に住して、法を聞き、禪定の底を完全に嵌め、靜に慮ひ、思、邪念の穢れを去る、修、即ち正しく、完く、而して清く、といふのが三慧具足の條件で、斯くて始めて智光照徹するのである。

元來、智慧は、各自が本來具有する所の光である。たゞ煩惱に蔽はれて其光を味まされて居るのであるから、如上の三慧を以て勤めて怠らず、之れを増益せば塵垢次第に拭ひ去られ、竟には本來の光を赫耀するに至るは、必然の道理である。

本來の智光輝くところ、四諦の法を體得して、復た邪見に墮せざるが故に、肉眼と雖も是れ明見の人。既に是れ最勝の道果を得たる人、即ち出家の理想に到達した者である。

八 畢竟功德

汝等比丘。若種種戲論。其心

汝等比丘若し種種に戲論せば、其の心則ち

則亂。雖復出家。猶未得脫。是

亂る。復た出家すると雖も、猶ほ未だ脱する

故比丘。當急捨離亂心戲論。

ことを得ず。是の故に、比丘當に急に亂心

若汝欲得寂滅樂。唯當善滅

戲論を捨離すべし。若し汝寂滅の樂を得

戲論之患。是名不戲論。

んと欲せば、唯當に善く戲論の患を滅すべし。是れを不戲論と名づく。

【字解】

●種種戲論

戲論とは、無益な言語を弄すること、眞實理の上に於て

徒に名目や枝葉の議論に執着し、眞實悟道の上に、何ら履踐なきは、皆戲論である

が、尙ほ佛道の上のとはかりでなく、世間の事物の上に於て、狂言綺語、談諧嘲謔等

みな修道上に有害無益のものは、總て戲論のうちに入れられる。●其心即亂

戲論は眞面目を缺くものであり、不眞面目は即ち心を正道から遠からしめ、正念

を亂らしむるものである。●猶未得脱 出家學道の要は、前來既に説き來れる

如く、淨戒を持ち、禪定を實修し、智慧の光を磨き出す、戒定慧の三學を完からしめ、

以て四諦の眞理を證得するに在る。それが心が亂れてゐたのでは、何時まで經

つても解脱の期のないのは言ふまでもない。●寂滅 涅槃のこと。●戲論之

患 亂心乃ち患で、學道の上に於ては、實に除き難き慢性の病患である。

【講話】 此章は八大人覺の最後で、第三段出世間法要の結末である。本文の義

理は、既に字解に盡きてゐて、戲論の患を遠離すべきを説かれた、即ち戲論を好む

ものはその心亂れて靜一でない、心靜一ならずして散亂浮動する者は、涅槃寂靜

の樂を得ること不可能である。故に寂靜を得るを以て窮極目的とする佛道修

行者にありて、捨離すべきは實に不戲論である、といふのがその要旨である。

さて、上來のこの第三段に八種の功德を擧げて來たが、前の七者は、その題目と

本文の結語とが同一で、例へば「智慧の功德」の章に於ては、章末に「是れを智慧と名

づく」といふ結語がある。然るに此章に限り「畢竟功德」と題してあつて、本文の結語は「是れを不戲論と名づく」となつて居る。此は一寸妙に思へるが、意義あるところで、特に注意して見ねばならない。夫の眞如の徳は、全く所謂戲論の外に出で、涅槃の本性は言語道斷えて元より戲論の及ぶべきところでない。眞實理の上に戲論が除かれなければ、何程禪定だの、智慧だのと高唱したところで、皆空談放言、即ち戲論に過ぎないものとなる。謂ゆる戲論の及ざる涅槃寂靜の樂は、眞に不戲論にして、始めて獲得せられるのである。即ち「不戲論の功德」即ち「畢竟功德」たる所以で、前來戒定慧悉く説き了り、佛法の修行も證果も、既に満足した上に更に最後に此功德門を設けて、徹底せしめられたものと解せられる。尙ほ約言すれば、少欲と知足と遠離とは、戒律の方便であり、精進と不忘念とは禪定の方便であり、而して禪定の正修、この禪定より生ずるのが智慧、斯くて最後に不戲論を以て、寂滅の眞樂が得られるといふ順序である。

世に文覺と西行との出會の逸話が傳へられて居る。二人は共に武門から出て桑門に入り、一は荒行あらしやうの豪傑僧として、他は風流和歌の名手として、同時に名高

かつたことは、皆人の口に膾炙せられて居るところである。

文覺は常に西行を罵つて「佛法修行は不惜身命ふしやくしんみやうであらねばならぬ。彼れ西行何者ぞ、出家の身でありながら、徒に遊山玩水を事とし、風流韻事を以て世を渡る。畢竟何の爲めの出家であるか。我れ若し彼に出會つたならば、佛法の爲に痛く打ち懲らしてくれよう」と言つてゐた。と、偶然にも、西行が行脚あんぎやの途次、足を高尾へ向け、序に文覺の菴を訪れた。文覺の弟子達は師の平常の言葉を思つて、互に先づ顔を見合せた。

あの恐ろしい文覺上人が、常に痛罵してゐた西行と出會つたのであるから、今に一大活劇が演ぜられることであらうと、弟子達は好奇と不安の眼を睜みはりながら、ジツと物かげから様子を窺つてゐた。然るに文覺は、西行と相對するや、虎のやうな、いつもの猛威は何處へやら、まるで小猫のやうな柔順温和な顔をして、終日一室に對坐し、如何にも睦まじげに、如何にも楽しさうに談笑してゐた。

西行が歸つて往つた後で弟子達が「師は日頃あれほど仰せられた西行を、今日のやうな好き折りに、何故打ち懲なぐされんでした」と訊ねると、「イヤどうもあの西行

は畏ろしい男ぢや、彼の風骨は決してたゞ者でないぞ、こちらが打つところか、わるうすれば彼に痛く打たれさうであつた」と云つて、さすがの文覺もホツと太息を吐いたといふことである。

謂ゆる聞思修の三慧を増益すべく、持戒堅固に、精進辨道した文覺が、一風流僧の西行には一籌を輸した。西行の超然たる風懐のうちには、謂ふところの不戯論底の眞面目が、韜藏されてゐたものと見ることも出来るではあるまいか。此の章に特に「畢竟功德」と題する眞意義は、簡潔な本文の字句以外に、全く戯論を去つて深く探り味ふべきである。

以上で「世間法要」「出世間法要」共に全く説き終り、通常いふところの一經の正宗分は、之れで盡きたやうなものであるが、更に次の段以下、如上の法の實修を親切に勸説されるので、或は人によつては、次の段以下を流通分と見る向もあるが、解題に於て言へるが如く、本經は他の諸經の結構とは趣を異にして居るので、以下も矢張り正宗分として見られるのである。

第四段 勸修證成

一 究竟利益を顯示す

汝等比丘。於諸功德。常當一

汝等比丘諸の功德に於て、常に當に一心に

心捨諸放逸。如離諸怨賊。大

諸の放逸を捨つること、諸の怨賊を離るゝが如くすべし。大悲世尊所説の利益は皆

悲世尊。所説利益。皆已究竟。

已に究竟す。

【字解】

◎諸功德

初章より、前章の「畢竟功德」に至るまでの、修證の道法を謂ふ。

◎如離怨賊

怨賊は人の財産生命に危害を加へるもので、諸の放逸に喩へたもの、一心にして二念なく、放逸を捨つること、怨賊を恐れ避くるが如くせよといふ

のである。

◎大悲世尊

大悲は、大慈大悲の略語であるが、大慈は、樂を與へらるゝ佛の大なる徳、大悲は、苦を抜く所の佛徳といふやうに釋義されてある。「觀音玄

義」には「性徳の惡毒を觀じて、惻愴し、憐愍し、大悲心を起して、其苦を抜かんと欲す